
口魔のごとく！ ~ Hayate the combat servant of Zero ~

carzee

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ魔のごとく！ ～Hayate the combat servant of Zero～

【Nコード】

N7418L

【作者名】

carzee

【あらすじ】

えー、衝動的に書いてしまいました。

ゼロの使い魔とハヤテのごとくのクロス小説です。

ベースはゼロの使い魔となっております。

原作通りに進めていく予定ではありませんが、オリ話が入ることもあ

るかもしれませんが。

作者はハヤテのごとくを途中までしか読んでいないので、ハヤテのファンには若干物足りないこともありえるかもしれませんが、そこはご了承ください。

別サイトにて、一度だけ短編を投稿したことがあるのですが、連載小説の執筆・投稿はこれが初めてです。緊張しております。

ゆえに、設定や文体等、おかしな所が多々あるかもしれませんが、そこは感想でご指摘いただけると嬉しいです。

更新に関しては、前項の通り衝動で書いておりますので、かなり不定期になるかと思えます。

そこもご了承ください。

それでは、よろしく願います。

追記：更新をブログでお知らせしていますので、ご覧いただけると嬉しいです。僕のマイページにリンクをはったので、そちらからどうぞ。

第一話 ハヤテ&サイト、異世界へ（前書き）

えー、あらすじの通り、かなり衝動的に書いております。

文章がおかしい、と言う所が多々あるかと思われませんが、ぜひ感想
でござ指摘ください。

ハヤテのシーンは、原作マンガ7巻を参考に書いています。

後書きでは、キャラ・作者対談を予定しています。

では、ごうござ。

第一話 ハヤテ&サイト、異世界へ

第一話 ハヤテ&サイト、異世界へ

キーン、コーン、カーン、コーン…

「起立、礼！」

『ありがとうございます！』

クラス委員長である瀬川泉の号令で、クラスの生徒が帰りの挨拶をする。

ここは東京杉並区の白皇学院。

大富豪の子女たちが集まる超エリート名門校である。

今はちょうど帰りのHRが終わり、放課後だ。

1年7組の教室では、各々が自由に時間を過ごしている。

そんな中、自分の席で帰りの支度をしている水色の髪をした少年は溜息をつきながら、

「ふー、今日はこれで終わりか。今日もお嬢様は学校をお休みに…
やっぱりお嬢様がいないと張りが出ないなあ…」

と独りごちる。

すると、

「ハヤ太君？」

委員長の泉が声をかけてきた。

「これ、今日の分のプリントだよ。ナギちゃんに届けておいてね。」
泉はそう言っつて、授業でもらったプリントを渡してきた。

「わざわざありがとございます、瀬川さん。」

ハヤテは礼を言っつて受け取る。

「今日はナギちゃん、どうしたの？」

泉が聞いてきた。

「はあ、なんでも、昨日徹夜でマンガを描いておられたらしいんです。今日が締め切りのマンガ大賞に投稿するとかで…。今朝お嬢様の寝室へ伺っつたら、ペンを握っつたまま眠っつておられました…。原稿は何とかできたみたいでしたけど。」

ハヤテは苦笑いを浮かべて説明する。

「へえ…。なんというか、執念みたいなものを感じるねえ…。」
泉も苦笑いだ。

「ははは…。…では瀬川さん、僕は執事の仕事がありますので失礼します。」

そう言っつてハヤテは鞆を持つ。

「うん、ナギちゃんによろしくね。また明日、ハヤ太くん？」
泉も挨拶する。

「はい、また明日。」

今日は通っている高校の創立記念で休みだったので、修理に出していたノートパソコンを引き取りに来ていたのだった。

「やっとこれでインターネットが出来るぜ。やってみたいオンラインゲームが沢山あるんだよね」

もはや鼻歌まで歌いそうな才人である。

ほとんどスキップに近い歩き方で家に向かう途中、さらにワクワクするような事が起こった。

目の前に突然、光る鏡のような物が現れたからだ。

才人は立ち止まって、まじまじとそれを見つめた。

持ち前の好奇心と、今までのテンションの高さから、どうしても気になったのである。

とりあえず、足元の小石を拾って、その光る鏡に向かって投げしてみた。

小石は鏡の中に消え、鏡の裏へも通り抜けていなかった。

おお、と思い次に、抱えていたノートパソコンを両手で持ち直し、その端をゆっくりと鏡の中へ差し込んでみた。

すぐに引き抜いて確かめてみても、パソコンは何も変化がなかった。

これなら大丈夫だ、と思い、才人は手を前に伸ばしてゆっくりと鏡に触れてみた。

その瞬間…鏡は一際大きく輝き、ものすごい力で才人を吸い込んできた。

才人は「え…」と抵抗する間もなく、鏡の中に消えた。

その鏡は、才人を吸い込んだあと、跡形もなく消えたのだった。

東京の異なる場所で2人の少年が突然消えたにもかかわらず、その周囲の人間は誰一人気づいていなかった。

まるで、気づかせないための『力』がかかっているかの様に…

第一話 ハヤテ&サイト、異世界へ（後書き）

キャラ・作者対談

サイト（以下サ）：なんか、俺の方がバカみたいに思われそうな文だよな…

ハヤテ（以下ハ）：ま、まあまあ…

作者（以下作）：す、すまん… っていうか、原作でもこんな感じだったような…

サ：言うな、それを…

ハ：こ、これからですよ！これから活躍すればいいじゃないですか！

作：ま、次回も活躍する機会はないと思うけど…

サ：そうだよな…まだ召喚の段階だからな…

ハ：あはは…

作：それどころか、若干ハヤテの方が好印象かもな…

サ：どうせ…俺は…モグラだよ…

ハ：あはは…（もう笑っしかないや…）

作：次の更新はいつになるかわからないけど、頑張れ、サイト。

ハヤテを倒すその日まで！

サ・ハ：そういつ話じゃねえだろ！（じゃないでしょ！）

第二話 召喚、そして契約（前書き）

今回はタイトル通り、召喚と契約までとなっております。

なかなか話が進まねーじゃねーか、と思いの方もいらっしゃるかもしれませんが、

作者はこれでいっぱいいっぱいですので、ご勘弁ください……

今回も後書きでキャラ・作者対談をします。

では、ごうござ。

第二話 召喚、そして契約

第二話 召喚、そして契約

またまた所変わって、ここは異世界ハルケギニアのトリステイン魔法学院。

その第一演習場で、春の使い魔召喚の儀式『サモン・サーヴァント』が行われていた。

この春に2年生になった生徒たちが1人ずつ順に自分のパートナーである使い魔を召喚するのである。

儀式といってもそれ自体は5分もかからないもののだが、最後に残った女子生徒が儀式を何度も失敗し、もう数十分が経ってしまった。

「私の運命に従いし、使い魔を召喚せよ！」

その刹那、

ドカーン…

爆発が起こり、失敗する。

その爆発で、先に召喚した生徒たちの使い魔たちがギャーギャーと騒ぎ出す。

生徒たちは必死でそれを宥める。

こうしたことが数十分前から繰り返されていた。

もうすぐ儀式のために空けられていた時間が終わってしまう。

痺れを切らした担当の教師、ジャン・コルベールが心底残念そうな顔で言った。

「ミス・ヴァリエール、とても残念ですが、今日はこれで切り上げましょう」

「も、もう一度、最後にもう一度だけやらせてください！」

杖を固く握り締めた少女が言った。

「…わかりました。今日はこれで最後ですよ」

そう言って、コルベールは真剣な面持ちで見守った。

ヴァリエールと呼ばれた少女 ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、必死に集中して唱えた。

「わが名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし使い魔を召喚せよ……！」

ドッカーン！！

今までとは比較にならないほどの大爆発が起こった。

また使い魔たちが騒ぎ、生徒たちが必死に鎮めようとしている。

爆発によって、土煙がもうもうとたちこめる。

段々と土煙が晴れていくと、ルイズの目の前には2人の人間が倒れて気絶していた。

一方は見たことのない服を着た黒髪の少年。

もう一方は使用人のような服を着た水色の髪をした少年。

「ゼロのルイズが平民を2人も召喚したぞ！」

周りにいた生徒の1人が言うと、ルイズを除く生徒全員が笑い出した。

「ちょ、ちょっと間違っただけよ!!！」

ルイズは叫び返す。

「いっつもじゃないか」

「さすがはゼロのルイズだな！」

また生徒たちが爆笑する。

そうしていると、意識が戻ったのか、2人が目を覚ましてゆっくりと起き上がった。

ルイズは心底苦々しげに聞いた。

「あなたたち…誰？」

才人とハヤテはキョトンとする。

「……………え？」

ルイズは苛立ちながら、再び尋ねる。

「あ・ん・た・た・ち・だ・れ？」

ポカーンとしながら2人は答える。

「お、俺は平賀才人だ」

「…僕は綾崎ハヤテです」

そして才人が聞き返す。

「お前こそ誰だ…？…っていつか……………ここ、どこ？」

ルイズは貴族に対してなんて口の聞き方だ、と思ったが、混乱しているであろうことはわかったので、グツとこらえた。

「私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。そしてここは、ハルケギニアのトリステイン魔法学院よ」

才人は繰り返してみた。

「あなたは、ルイズ・フランボワーズ……………トラヴァリエール？」

「覚えられないならルイズでいいわ」

ルイズはムカツときたが、またこらえた。

「じゃ、あなたはルイズで……ここは………「つて“魔法”学院!？」

」

才人の隣で聞いていたハヤテは、とんでもない言葉を聞き、思わず才人とハモった。

「日本の東京ではないのですか？」

今度はハヤテが聞く。

「ニホン？トウキョウ？どこ、その地名……？」

ルイズは水色の髪の少年は、口の利き方がいいようだと思いながら、聞いたことのない地名に？が頭に浮かぶ。

才人とハヤテは愕然とする。あの鏡のようなものに吸い込まれたばかりに、とんでもない事になってしまった。

3人で話していると、コルベールが近づいてきて言った。

「さあ、早く『コントラクト・サーヴァント』を済ませてしまいなさい。日が暮れてしまいますぞ」

「も、もう一度召喚からやり直させてください!」

ルイズは抗議した。

「それはダメだ、ミス・ヴァリエール。この使い魔の儀式は、とても神聖なものなんだ。一度召喚したものをやり直すなんて、とても恐れ多いことだよ」

コルベールは即座に却下した。

「『サモン・サーヴァント』によってその2人が現れたなら、その2人と契約するべきだ。それに、私はこれが最後とも言ったはずだ」

「っ」

ルイズはもう全てを諦めてしまったような顔で2人と目線を合わせにしゃがむ。

「あんたたち、感謝しなさいよ。普通平民が貴族にこんなことされるなんて、一生ないんだからね」

「は…？」

2人がキョトンとしていると、ルイズはまず2人の前で杖をかざし、

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者たちに祝福を与え、私の使い魔となせ」

そして、才人の顎をつかみ、唇を近づけ　キスをした。

「…え？」

それを見ていたハヤテは驚く。キスされた才人の目も見開く。

才人から離れると、次にハヤテに顔を近づけ

「ちょ、ちょっと待っ」

ハヤテの制止も聞かず、顎をつかんでキスをする。

ハヤテからも離れると、呆然としている2人を放ったまま立ち上がり、ルイズはコルベールに報告する。

「…終わりました」

「うん、『コントラクト・サーヴァント』はうまくできたね」

満足そうにコルベールが頷く。

ボーっと2人がそれを見ていると、突然左手に見たこともない記号が刻まれ、身体が焼けるように熱くなる。

「ぐっ……うあぁっ……何だ……これ……」

「か、身体が……熱いです……うっっ……」

2人は熱さにつめく。

「使い魔のルーンが刻まれているだけよ。すぐ終わるわ」

「「っ…使い魔？」」

2人がその言葉に疑問を浮かべていると、唐突に熱さが消えた。

「あ、あれ？あんなに苦しかったのに…っ…って、なんだこりゃ？」

「見たことない模様が…左手に…？」

2人は自分の左手の模様を見つめる。

2人にルーンが刻まれたらしいことを見ると、コルベールが近づいてきた。

「ちよつと失礼、ルーンを見せてください」

2人はコルベールに左手を差し出す。2人とも同じルーンだ。

「ふむう…見たことがないような…でもどこかで見たような…」

コルベールはひたすら記憶をたどって唸っていたが、

「まあ、調べてみることにしましょう。スケッチをとらせてください」

すぐに思い出すのを止めて、ルーンをスケッチした。

スケッチを終えると、コルベールは生徒たちに呼びかけた。

「それでは、使い魔召喚の儀を終わります！皆、寮へ戻るように！」

そして、ルイズ以外の生徒と、コルベールは杖を振る。
すると、彼らは宙に浮かんだのだった。

「は…!？」

才人とハヤテは、またまた驚愕の顔色になる。

「魔法”学院”なんだから、魔法使うのくらい当たり前じゃないの」
ルイズは事もなげに言う。

「…じゃあルイズは飛ばないのか？」

才人は尋ねる。

「わ、私はいいの！歩いた方が体にいいわ！」

ルイズは慌てたように言った。

「ま、まあ、そうですね」

ハヤテはルイズが魔法を使わないことにあまり疑問を覚えず、その言葉を肯定する。

「でしょ？さあ、行くわよ！私の部屋へ！」

こうしてルイズを先頭に、ハヤテ、才人と続いて、寮へと向かったのだった。

第二話 召喚、そして契約（後書き）

キャラ・作者対談

ルイズ（以下ル）：なによ、トラヴァールって…

サイト（以下サ）：ご、ごめん…あんまり長かったもんだからつい…

ハヤテ（以下ハ）：まあ、初対面でしたし…仕方がないのでは…？

作者（以下作）：僕は原作読んですぐ覚えただけだな！

サ：どうせ…俺は言われたことも復唱できないモグラだよ…

ハ：前回に続いて…またモグラ発言…

ル：もう、しっかりしなさい！私の使い魔になったんだから！

作：ま、次回は互いに説明するっていう話だけど…

ハヤテは執事だけあって、しっかりしてるな…

ハ：ありがとうございます。三千院家の執事として、

ナギお嬢様をお守りしてきた僕ですから、

きっと、ルイズお嬢様もお守りしてみせます！

ル：そ、それくらい当たり前よ！

サ：いーなー、ハヤテは…

作：がんばれ、サイト。ハヤテを倒すその日まで！

サ・ハ・ル：だから違うだろ！（違うでしょ！）

第三話 使い魔とは（前書き）

えー、第三話です。今回はルイズの部屋での説明といった話になっています。

今回もキャラ・作者対談をしますので、お楽しみください。

では、ごうごう。

第三話 使い魔とは

第三話 使い魔とは

ルイズと才人、ハヤテの3人は、女子寮のルイズの部屋へと着いた。

部屋の中は女の子らしく整理が行き届いており、貴族らしくベッドは1人で寝るには少々広すぎるほど大きいものだった。

3人はとりあえず話をするため、腰を下ろした。ルイズは椅子に座り、才人とハヤテは床に座る。

ルイズから尋ねる。

「改めて名前を聞いわ。あと、ニホンとかトウキョウとかいうのも説明しなさい」

才人は説明する。

「えーと、俺は平賀才人だ。サイトって呼んでくれ。あと、日本と東京は俺のいた国と街だ」

ハヤテも答える。

「僕は綾崎ハヤテといます。ハヤテと呼んでください。日本と東京についてはサイトさんと同じです」

ルイズは溜息をついて言う。

「はあ……聞いたこともない国だわ…あんたたち、異世界から来たって言うの？」

「俺だつて信じられないけど、そうみたいだな。俺の国というか、世界じゃ魔法は空想の産物でしかないし…」

才人も心底まいったという顔で言う。

「そうですね…」

ハヤテも苦笑いで同感する。

「なによそれ…。魔法がないなんて、それこそ信じられないわ。…異世界から来たっていう証拠でもあるの？」

才人は持つてきていたノートパソコンを出す。ハヤテは鞆を元の世界に落としてきてしまったようで、執事服を探ると携帯電話が出てきた。

才人はパソコンのスイッチを入れる。起動したパソコンはOSのロゴを表示する。

「うわぁ……何これ…？」

ルイズはノートパソコンの画面と携帯電話を交互に見て、驚いた声をあげた。

「綺麗……何の系統の魔法で動いてるの？」

「魔法ではありませんよ。科学です」

ハヤテが言うと、ますますルイズは興味津々で2つの機械を眺める。

「カガクってなに？」

「うーん、なんて言ったらいいかわからないけど、この場合は…物や現象の性質を研究する学問って言えばいいのかな…」

才人は持っていた知識をフル活用してなんとか答えた。

「そうですね、だいたい合ってるとは思いますが。僕も自信ないですけど…この世界では魔法にとって変わるものでしょう」

ハヤテもそれに付け加えて答える。

「へえ〜…いまいちわかったような、わかんなかったような気もするけど、まあ、いいわ。信じてあげる」

ルイズは満足するように言った。

「はぁ…やっと信じたか。じゃあ、さっさと元の世界に返してくれ…」

「僕も帰りを待っている人がいるんです…」

才人とハヤテはルイズに頼むが…

「残念だけど、それは無理よ」

ルイズは困ったように2人に告げた。

「ええっ…どうして(ですか)!?」「」

2人は衝撃に打ちのめされた顔で尋ねる。

「あのね、あんなたちを召喚したあの魔法は、こっちに呼び寄せるだけで一方通行なの。おまけに、もう一度その魔法、『サモン・サーヴァント』を使うには、一度呼び出した使い魔が死ななくちゃいけないの」

ルイズの言葉に2人は固まる。

「じ、じゃあ、やっぱりいいです……」「」

2人はがっかりして言った。

才人は使い魔という言葉に、左手に刻まれたルーンを見つめて聞く。

「これ……、使い魔ですって印なのか？」

「そうよ」

ルイズは頷く。

「使い魔というのは、具体的に何をするんですか？」

ハヤテが尋ねる。

「そうね。まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

ルイズは説明する。

「どういうことだ？」

才人は聞き返す。

「つまり、使い魔が見たり聞いたりしたことは、主人も見たり聞いたりできるのよ」

「「はあ、なるほど」」

2人は納得する。

「でも、あんたたちじゃ無理みたいね。私、何も見えないもの」

「はあ……」

才人はぼけつとした様子で言った。

「お役に立てないようで残念ですね……」

ハヤテは少ししゅんとする。

ルイズは説明を続ける。

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば、

秘薬とかね」

「秘薬というのは何ですか？」

今度はハヤテが聞き返す。

「特定の魔法を使う時に使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか……。でもあんたたち、そんなの見つけて来れないでしょ。秘薬の存在もだけど、そもそもこの世界の地理すらわかっていないのに」

「「そうだな（ですね）」」

2人は頷く。

ルイズは溜息をついて、さらに説明する。

「そして、これが一番肝心なんだけど……、使い魔は主人を守る存在であるの。その能力を駆使して主人を敵から守るのが一番の役目！……で、あんたたちはどうなの？見た感じ全然強そうには見えないけど……」

説明の後、ルイズは尋ねる。

才人は苦い顔で、

「無理……ただの高校生だし……」

と答える。

逆にハヤテはようやく笑顔になり、

「僕、実はある事情で元いた世界でも大富豪の一人娘の女の子に執事として仕えていたんです。今まで、その女の子を命をかけてお守りしてきたので、ある程度はお役に立てると思います！」

と嬉しそうに言った。

「ふうん。その服、やっぱり使用人の制服なのね。なら、ハヤテは役に立ちそうね。逆にサイトはさっぱり役に立ちそうもないわね」

ルイズが言うと、

「うっせえ。どうせ俺は……どうせ……」

と才人はぶつぶつと呟いた。

「ま、今日は説明はこれくらいにしておくわ。しゃべってたら眠くなっちゃったし」

ルイズは眠そうにあくびをした。

「俺たちはどこで寝ればいいんだ？」

才人が聞くと、ルイズは無表情で床を指差す。

「犬や猫じゃないんだけど」

「しかたないでしょ。ベッドは一つだけなんだから」

ルイズは才人の文句に眠そうに答え、毛布を一つずつ才人とハヤ

テに放つてよこした。

そして、ブラウスのボタンに手をかけ、外していく。

「なな、何やってんだよ！」

「ええっと……、退室した方がよろしいですか……？」

才人は慌て、ハヤテは目を背けながら退室を申し出ようとする。

ルイズはその言葉にきょとんとして言った。

「寝るから着替えるのよ。それとハヤテ、別に出てなくてもいいわ」

「で、でもさすがに僕たちの前ではまずいんじゃない……」

「そ、そうだよ！俺たち男だぞ！」

2人は顔を赤くしながら言う。しかし……

「はぁ？男？使い魔に見られたって何とも思わないわ」

ルイズは全然平気で脱いでいく。

才人とハヤテは毛布を引っつかむと、頭からかぶって横になった。

大きめのネグリジエに着替え終えたルイズは、才人とハヤテに向かって何かを投げつけてきた。

何だろうと思って2人が取り上げると、ルイズの脱いだ下着だった。

「じゃあ、それ明日洗濯しといて」

ルイズがベッドに入りながら2人に言った。

「なんで俺がお前の下着を！洗濯！嬉しいけどふざけるな！」

思わず立ち上がり、才人はそう狼狽えるが、

「かしこまりました、ルイズお嬢様。それでは、おやすみなさい」

ハヤテは慣れているのか、床に投げられたルイズの下着を拾い上げ、丁寧に畳んで寝床のそばに置く。

それを聞いてルイズは、

「ハヤテは使い魔としての自覚が出てきたみたいね。というより、使用人の経験からかしら？ま、どっちにしろ感心だね。それにひきかえ、サイトは全然その自覚がないのね…少しはハヤテを見習いなさい。それじゃ、おやすみ」

と言って、すぐに眠りについてしまった。小さな寝息が聞こえてくる。

「ちくしょう…、俺たちを男とすら思っていないなんて…。おい、ハヤテっていったっけ。ハヤテはあいつの言うこと聞くのかよ？」

悔しそうに才人はハヤテに尋ねる。

「はい……。どうやらしばらくは帰れないようですし、ルイズお嬢様しか寝食を頼りに出来る方はいらっしやいません。主を守り、主の身の回りのお世話をさせていたたくのは元の世界でもやっていたことです。僕にとって特に不都合はありませんよ」

ハヤテは真剣な顔で答える。

「そっか……。そうだな。ここでジタバタしたって余計にひどいことになりそうだし、とりあえずハヤテの言うようにしてみるか。じゃ、おやすみ」

才人は再び毛布をかぶり、眠りにつく。

「おやすみなさい、才人さん」

ハヤテも毛布をかぶり、眠りに入る。

こうして、2人の使い魔としての生活が始まった。

第三話 使い魔とは（後書き）

ルイズ（以下ル）：ねえ、今まで見てきて思ったんだけど、これって…

サイト（以下サ）：ああ、ルイズもそう思うか…？

ハヤテ（以下ハ）：ど、どうしたんですか？

ル：『ゼロの使い魔』原作とほとんど同じ文章じゃない！

サ：やっぱりか！

ハ：ええ〜っ！いいんですか！？そんなことしちゃって…？

サ：いや、ダメだろ……なんか法に引っかかりそうな気がしてならないのは俺だけか…？

ル：わ、私もマズイと思うわ…

ハ：ダメですよね…

サ：おい、作者！どうなんだ！原作からほとんどパクってんだろ！

作者（以下作）：……………。

ハ：はっきり言ってください！

作……………。

ル：鞭で引っぱたくわよ！

作：……………ゴメンナサイ。

サ・ハ・ル：（認めやがった……！）

作：だ、だって…僕には文才がないし…

サ：わかってんならパクってまで書くなよ！

作：いや、だって、二次作品ってものを書いてる時点である意味パクリじゃな

い…？

サ・ハ・ル：（うわぁ、こいつ…二次作品の作者全員を敵に回す気か……）

作：……………一応通報はしないでいただけるとありがたいです。

サ・ハ・ル：俺（僕・私）たちからも頼みます。この文才のないバカ作者のために、

通報はしないでやってください…

作：ま、たぶん…大丈夫だよな（笑）

ル：……………あんた、誠意ってモンを見せなさいよ！（鞭を構えて）

ピシッ、バシッ、ピシッ、バシッ！

作：ぎゃあああああ…「う」めんなさーい…

(作者は気絶しました)

追伸：この小説の執筆はノートの手書きから始めているのですが、

そのノートのストックが後わずかになってきています…

ストックがなくなってしまった場合、更新が遅れることがあ
りますが、

そこはご了承ください…

第四話 使い魔の一日 その1 (前書き)

はい、第四話でございます。

なかなか場面が動きませんが、それはひとえに作者の力量不足ですので、ご勘弁ください。

恒例となりつつある、キャラ・作者(?) (対談もありますので、よろしく願います。

(?の理由は後書きを読めばわかると思います…)

では、どうぞ。

第四話 使い魔の一日 その1

次の日の朝…

「うーん、やっぱり夢じゃなかったなあ…」

夜が明けて間もなく、トリステイン魔法学院女子寮のルイズの部屋でハヤテは目を覚ました。

ルイズも才人もまだ眠っている。

「起こすにはまだ早いかな…洗濯しようにも水場の場所がわからないし…とりあえず、もう少し時間が経ってから、才人を起こして、2人でルイズお嬢様を起こそう」

ハヤテはひとまずの計画を立てる。そして、元いた世界のことを思い出す。

「ナギお嬢様…僕がいなくなって心配してるだろうな…。マリアさんにもお屋敷の仕事を増やして迷惑をかけてしまっているだろうし…、ヒナギクさんたちも僕を探しているのかな…」

そう考えると、申し訳なささと寂しさでいっぱいになる。

「でも…くよくよ考えていても仕方がない。今はルイズお嬢様に仕えるしかないんだ。もしかしたらその内に帰る方法も見つかるかもしれない」

ハヤテは超がつくほどの不幸体質である。『異世界に飛ばされる』

というのは初めてだが、それ以外はそこまでひどい現状ではない。借金取りに追われたり、巨大ロボに襲われたり、変態に求愛されたりという今までの経験からすれば、遥かにマシである。

「よし、頑張るぞ〜！」

そう気合を入れつつ、ポケットに入っていた携帯のディスプレイを見ると、時計が7時前を指していた。

「そろそろ起こそう。……サイトさん、サイトさん！起きてくださいー！」

ハヤテは毛布に包まった才人を揺り動かす。

「う、うん………やっぱり目覚めたら俺の部屋って訳にはいかなかったか……」

才人はゆっくりと起き上がると、がっくりとうなだれる。

「サイトさん、今は現状を受け入れるしかありません。では、ルイズお嬢様を起こします。サイトさんも手伝ってください」

「ん、わかったよ……」

ハヤテと才人は立ち上がり、軽く伸びをしてから、ベッドへ近づく。

「お嬢様、ルイズお嬢様！起きてください、朝ですよー！」

「朝だぞー、お嬢様」

2人で呼びかけると、ルイズはもぞもぞと動いて起き上がった。

「ふあゝあ……あれ、あんたたち、誰だっけ……？」

ルイズは起きるなり、寝ぼけ眼でそう言い放った。

「昨日お嬢様が召喚なさった使い魔です。僕はハヤテ」

「おい、自分が呼んだ奴の事忘れるなよ……。俺はサイトだ」

2人は改めて名乗る。

「ああ、使い魔ね。そうね、昨日召喚したんだっけ」

ルイズはそう言ってベッドから出ると、2人に命じる。

「服」

才人は椅子にかかった制服を取り上げる。

ルイズは気だるげにネグリジエを脱ぎ始めた。

才人は顔を赤くしてそっぽを向く。

ハヤテはクローゼットへと向かう。

「お嬢様、下着はどちらにございますか？」

「そのー、クローゼットのー、一番下の引き出しに入ってる」

ハヤテはそれを聞いてクローゼットの引き出しを開けた。なるほど、中に下着がたくさん入っていた。

元の世界ではナギの着替えはマリアが手伝っていたが、バイトなどで扱ったことがあったので、女性の下着を生で見るのは初めてではない。適当に取り出して、ルイズを見ないようにしながら渡す。さすがに下着は自分で身に着けるらしい。

下着を身に着けたルイズが再びだるそうに呟く。

「服着せて」

「ハヤテ、頼む」

才人は持っていた制服をハヤテに渡す。やはり顔を赤くしてそばを向いている。

「わかりました」

ハヤテはそれを受け取り、ルイズに着せていく。

最後にマントを身に着けると、

「朝ごはんよ」

と言ったので3人は部屋を出た。

？

部屋を出るとほとんど同時に隣のドアが開き、中から燃えるような赤い髪の子が現れた。

ルイズより背が高く、才人やハヤテと大して変わらない身長だ。むせるような色気を放っている。彫りが深い顔に、突き出たバストが艶かしい。

ブラウスのボタンを上から2つ外し、その胸元を覗かせている。褐色の肌が健康そうな色気を振りまいている。身長、肌の色、雰囲気、胸の大きさ……、全部がルイズと対照的だった。魅力的な美女であるのは2人とも同じだが。

彼女はルイズを見ると、にやつと笑った。

「おはよう、ルイズ」

ルイズは顔をしかめると、嫌そうに挨拶を返した。

「おはよう、キュルケ」

「あなたの使い魔って、その2人？」

キュルケと呼ばれた彼女は、才人とハヤテを指差して言った。

「そうよ」

「あっはっは、ホントに人間なのね！しかも2人も！すごいじゃない！」

その言葉に才人はムツとして、ハヤテは苦笑いを浮かべる。

「召喚したら、こいつらが出てきちゃっただけよ!」

ルイズはキュルケの言葉に噛み付く。

「『サモン・サーヴァント』で平民呼んじゃうなんて、さすがはゼ口のルイズね」

するとルイズは苦い顔になる。

「うるさいわね」

「でも、どうせ使い魔にするなら、こんなのがいいわよね、フレイム」

キュルケは得意げに使い魔を呼んだ。キュルケの部屋から、のっそりと真っ赤で巨大なトカゲが現れた。むわっとした熱気が周囲に広がる。

「「うわあ、真っ赤なトカゲ!」」

才人とハヤテは思わず後じさる。

キュルケは高らかに笑う。

「おっほっほ!もしかしてあなたたち、この火トカゲを見るのは初めて?」

「こ、このトカゲがあなたの使い魔なんですか?」

ハヤテはキュルケに尋ねる。

「そうよ。あたしが命令しない限り、襲ったりしないから。心配しないでね」

キュルケは口元に手を添え、色っぽく答えた。

大きさはトラほど（ハヤテにしてみればタマほど）もあるだろうか。尻尾の先に燃え盛る炎がついている。チロチロと口から火炎がほとばしっている。

「そばにいて熱くないの？」

今度は才人が尋ねた。

「あたしにとっては涼しいくらいね」

「これって…サラマンダー？」

ルイズが悔しそうに尋ねた。

「そうよ、火トカゲよ。見て、この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ？ブランド物よ。好事家に見せたら値段なんかつけられないわよ？」

「そりゃよかったわね」

苦々しげにルイズが言った。

「素敵でしょ、あたしの属性びつたり」

「あんた、『火』属性だもんね」

「ええ、微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。でも男の子は、それでイチコロなの。あなたと違ってね？」

キュルケは得意げに胸を張った。ルイズも負けじと胸を張り返すが、悲しいかな、ポリュームが違いすぎる。

ルイズはそれでもぐつとキュルケを睨みつけた。かなりの負けず嫌いのようだ。

「あんたみたいに、いちいち色気振りまくほど暇じゃないだけよ」

キュルケはにつこりと笑った。余裕の態度である。それから才人とハヤテを見つめる。

「あなたたち、お名前は？」

「平賀才人だ」 「綾崎ハヤテです」

「ヒラガサイトとアヤサキハヤテ？変わった名前ね」

「うるせえ」 「まあ、ここではそうかもしれませぬ……」

才人はまたムツとした顔になり、ハヤテは苦笑いする。

「じゃ、お先に失礼」

そう言うと、炎のような髪をかき上げ、颯爽とキュルケは去って

いった。ちょこちょこ大柄な体に似合わない可愛い動きでサラマ
ンダーが後を追っていった。

キュルケがいなくなると、ルイズは拳を握り締めた。

「くやしー！なんなのあの女！自分が火竜山脈のサラマンダーを
召喚したからって！ああもう！」

「いいじゃないですか、召喚そのものは出来たんですから」

「よくないわよ！メイジの実力を測るには使い魔を見ろって言われ
ているくらいよ！なんであるバカ女がサラマンダーで、わたしがあ
んなたちなのよ！」

「悪かったな人間様で。でも、お前らだって人間じゃないかよ」

「メイジと平民じゃ、狼と犬ほどの違いがあるのよ」

ルイズは得意げに言った。

「そ、そうなんですか……。ところである人、お嬢様を『ゼロ』って
言っていましたけど、これって何ですか？苗字ですか？」

「違うわよ。わたしの名前は、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。『
ゼロ』はただのあだ名よ」

「あだ名……ですか。あの人が『微熱』っていうのはなんとなくわ
かりますけど、お嬢様はどうして『ゼロ』なんですか？」

「知らなくていいことよ」

ルイズはバツが悪そうな顔で言った。

「……………むね？」

才人はルイズの胸を見つめて言った。いやあ、見事にぺったんこだった。

ルイズの平手が飛んできた。それをかわす。

「かわすな！」

「殴んな！」

「ま、まあまあ……」

(ん……………？平手……………？)

才人の頭の中に閃くものがあった。

こいつ、そういえば……………。

昨日、皆が飛んでいった時も変に理由を付けて歩いて帰った。

今だって本気で怒って懲らしめたいなら、殴ったりするより魔法を使えばいいではないか。

その方が確実だし、魔法使いっばいじゃないか。

どうしてだろう、と才人は思った。

ハヤテはルイズを宥めていたので、そのことに気づかなかった。

第四話 使い魔の一日 その1（後書き）

キャラ・作者対談

キュルケ（以下キ）：やっとあたしの登場ね。

ルイズ（以下ル）：別に対談にまで出なくてもいいわよ…

キ：あたしの方が魅力的だからって、ひがんでるの？

ル：べ、別にそんなんじゃないわ！

ハヤテ（以下ハ）：まあまあ…

サイト（以下サ）：女って怖えええ…（汗）

ル・キ：何よ！

サ：う、ごめんなさい…

ハ：そういえば、作者がいませんけど…どうしたんでしょう？

サ：ああ、なんでも、前回のルイズの鞭打ちが相当堪えたらしく、

今回は出て来れないらしいぜ。

ル：そ、そこまで強くしたつもりなかったんだけど…（汗）

キ：だからあなたはモテないのよ…

ル：何ですって！

ハ：まあまあ…

サ：という訳で、作者から手紙が来ているので読んでみるぜ。

ハ：て、手紙なんてあったんですか…

サ：おう。出て来れないながら頑張って書いてたらしい。

えー、なにになに…

『みなさん、こんにちは。』

このゼロ魔のごとくは、昨日付けでついにユニークアクセス

累計1000人を突破しました！

ひとえにこれは、読者様のおかげでございます。

本当にありがとうございます。

この作品は、まだまだ冒頭の部分でしかありませんが、

原作を見直しつつ、どうハヤテを絡めていくか、

試行錯誤しながら書いております。

以前にも書いたかもしれませんが、

手書きのノートから始め、

ワードソフトで加筆修正を施し、UPしております。

ゆえに若干時間がかかるので、

今までは毎日更新しておりましたが、

ついに…ノートのストックがピンチになっております(汗)

次回の第五話が予想以上に長くなり、

まだノートが書きあがっていません…

どこかで区切ることも考えてはいますが、

もしかしたら、明日の更新は…出来るかどうか、

といったところでしょうか…

なるべく明日中に更新いたしますので、よろしくお願ひします。

by carzee

…だつてさ。

ハ・ル・キ：ダメじゃない(ですか)！

サ：んゝ、でもまあ、たぶん更新できるだろ…

ル：なによ、その曖昧な感じ…

キ：…あら、その手紙、追伸があるみたいよ。

サ：ほんとだ。えーと…

『追伸：補足を忘れていました…

ゼロの使い魔の原作を知らない人もいるかもしれないので…

作中に出てくる「メイジ」というのは、

お気づきの方もいると思いますが、

異世界ハルケギニアにおける魔法使いの事です。

ルイズにでも説明させればよかったのですが、

忘れていましたね…

お詫び申し上げます。』

…だつて。

ル：なんか、半分わたしのせいみたいにされてない…？

キ：あなたは頭も『ゼロ』なのね。

ル：違うわ！わたしが忘れてたんじゃなくて、

作者が忘れてただけよ！

ハ…ま、まあまあ…（作者、また鞭打ちかもしれないですね…）

サ…なんか、ハヤテ…ほとんど「まあまあ…」だよな…

ハ…宥めてばかりですね…

第五話 使い魔の一日 その2（前書き）

はい、第五話です。

なんだかんだで悩んだ結果、場面で区切ることにしました。

よって、今回は少し短めです。ごめんなさい。

今回も後書きでキャラ・作者対談をやります。

感想で718さんからご希望があったので、

対談で質問を受けたいと思います。

では、どうぞ。

第五話 使い魔の一日 その2

第五話 使い魔の一日 その2

トリスティン魔法学院の食堂は、学園の敷地内で一番背の高い、真ん中の本塔にあった。

食堂の中にはやたらと長いテーブルが三つ並んでいる。百人は優に座れるだろう。

まるでハリポタだ、と才人とハヤテは思った。

二年生のルイズたちのテーブルは真ん中だった。

どうやらマントの色は学年で決まるらしい。食堂の正面に向かって左隣のテーブルに並んだ、ちょっと大人びた感じのメイジたちは、全員紫色のマントをつけていた。三年生だろうか。

二年生のテーブルを挟んだ反対側のテーブルのメイジたちは、茶色のマントを身につけている。おそらく一年生だろう。学年別チャージみたいだ、と才人とハヤテは思った。

朝食、昼食、夕食と、学院の中にある全てのメイジたち 生徒も先生もひっくるめて は、ここで食事を取るらしい。

一階の上にロフトの中階があった。先生メイジたちが、そこで歓談に興じているのが見えた。

全てのテーブルに豪華な装飾がなされている。いくつものロウソ

クがたてられ、花が飾られ、フルーツが盛られた籠がのっている。

才人が食堂の豪華さに驚いて口をぽかんと開けているのに気づくと、得意げに指を立てルイズが言った。鳶色の目が、イタズラっぽく輝いた。

「トリステイン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ」

「はあ」

「メイジはほぼ全員が貴族なの。『貴族は魔法をもつてしてその精神となす』のモットーの下、貴族たるべき教育を存分に受けるのよ。だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬ」

「はあ」

才人は呆然としながら答えた。

「三千院家のお屋敷でもこのような部屋はあったので、そこまで驚いてはいませんが、さすがは貴族、といったところですね」

ハヤテは食堂全体を眺めながら言った。

「なるほど、ハヤテは使用人として見慣れてるってのもあるのね。でも、普通の平民はこの『アルヴィーズの食堂』には一生入れないのよ。感謝してよね」

「はあ。で、アルヴィーズって何？」

才人はまだ呆然としつつ、ルイズに尋ねる。

「小人の名前よ。周りに像がたくさん並んでいるでしょう」

ルイズの言うとおり、壁際には精巧な小人の彫像が並んでいる。

「よくできた彫像ですね…。もしかしてあれ、夜中に動いたりなんてことは……」

ハヤテがまさかと思いながら恐る恐る聞くと、

「あら、よく知ってるわね」

「動くのかよ（動くんですか）！」

「っていつか踊ってるわ。さ、いいから早く席につきましょ」

ルイズたちは二年生のテーブルに向かった。

席につくと、ハヤテがルイズに椅子を引いてやる。ルイズは当たり前だといった様子で何も言わずに座った。ハヤテに「ありがとう」くらい言っただけ、と才人は思ったが、ここは黙っておく。

才人も席につこうと隣の椅子を引くと、ルイズがぼんぼんと肩を叩いてきた。

「ん？」

才人は怪訝に思ってルイズの方を見た。

ルイズは才人をじっと睨みながら、床を指差していた。そこに皿

が二枚置いてある。

「お、おい。まさか、これを食えつてのか？」

才人とハヤテは顔を若干引きつらせながら、床にある皿を見た。

申し訳程度に小さな肉のかけらが浮いたスープが揺れている。皿の端っこに硬そうなパンが二切れ、ぼつんと置いてあった。

「仕方ないでしょ。本当なら使い魔は外。でもまさかあんたたちみたいな人間が出てくるなんて思わなかったから、食事がそれだけしか用意できなかったの。今日はわたしの分も少しあげるから、それで我慢して」

ルイズはバツが悪そうに言った。

「三千院家で食べるものとは程遠いですけど、バイト時代に比べればまだマシですね…」

「そ、そうなのか…？ハヤテ、一体どんな生活してたんだよ…？」

才人はハヤテの言葉に驚きながら、パンをかじった。やっぱり硬い。

「ま、まあ、それは別の機会にということでお断りしてください…」

ハヤテは思い出したくないというように顔を青ざめた。

「わ、わかった…」

才人はこんな奴も日本にいるのか…と、自分の今までの幸せを身にしみて感じた。

貧しい食事をとりながら才人とハヤテが話していると、

「ほら、これあげるから」

ルイズが鳥肉を一切れずつ2人の皿に落としてくれた。

「ありがとうございます、お嬢様」

才人は棒読みで、ハヤテは誠意を込めて言った。

「サイト、ご主人様に対する誠意ってものが足りないわ。そりゃ、満足に食べられないのは悪かったけど、少しくらい感謝して欲しいものだわ」

ルイズは頬を膨らませながら言った。

才人はその可愛らしさにドキッとしながら、

「わ、悪かったよ。…ありがとうございます、お嬢様」

と、今度はややぶつきらぼつながらも、気持ちを含めて言った。

「そうそう、それでいいのよ。ちゃんとご主人様の言うことを聞いて、誠意を示せば、悪いようにはしないわ」

ルイズは、うんうん、と頷きながら言う。

「……そういえば、ここは学院だそうですね、授業はまだなんですか？」

ハヤテは携帯の時計を見ながら言った。

「そうですね、まだもう少し時間はあるけど、早めに行きましょっか」

3人は朝食を終えると、早速授業へと向かった。

第五話 使い魔の一日 その2（後書き）

キャラ・作者対談

作者（以下作）：はい、復活いたしました。carzeeです。

サイト（以下サ）：お、意外と早く復活したな…

ハヤテ（以下ハ）：あんなに鞭で打たれてたのに…

ルイズ（以下ル）：わ、悪かったって言うてるじゃない…

作：ま、それはもういいとして…

サ：ハ・ル：（思い出したくないんだな…）

作：読者様が感想で質問をくださったぞ。

ルイズ、読んでくれ。

ル：え、わたしが？…えーと、なになに…

『carzeeさんはこの小説を書こうと思ったんですか？』

…ですって。

サ：これって…なんか抜けてるような気が…

ハ：たぶん、ですけど…『どうして』が抜けてるのでは…？

作：そうかもしれないな…

質問をくれた718さん、

たぶんそのような意味で書いてくれたのだと思って答えると、

『どうしてこの小説を書こうと思ったのか』……

もともとは、この『小説を読もう!』のサイトで

『ゼロの使い魔』の二次作品や、

特にクロスものを好んで読んでいたんですが、

そういえば、『ハヤテのごとく!』とのクロスもないのかな

と思って検索してみても、多クロスは見つかりましたが、

2作品のみのクロス作は見つかりませんでした。

だから、きっと僕以外だってハヤテとのクロス、

読んでみたい人はいる!と思ったのが、

まあ、きつかけと言えるかもしれません…。

サ：……おい、なんか変にカッコつけてないか?

ハ：なんかイラっとするのは僕だけでしょうか…?

ル：なぜかわからないけどハヤテ、わたしも…

サ：なぐんか、作者風情というか、上から目線的なものが、

ピンピンと感じられるような気がしてならねえんだが…

ハ：そうですね…一度…というか、

二度目ですけど、シメときますか…

作：お、おい、やめろ…ハ、ハヤテ…

ハ：ルイズお嬢様の言うとおり、

あなたには少し誠意って物が足りません…

身体にそれを教えてあげないと…わからないですよ…？

作：…ハヤテ、メガコワイヨ…？

ハ：大丈夫、次の対談には出られるくらいに抑えておきますから。

ハヤテはタマを吹っ飛ばしたことがある、イナズマキックを放った。

…バキバキッ

作者は悲鳴もなく飛んでいきました。

ル・サ：…抑えてなくね？

ハ：ふう、スッキリしました。

サ：ストレス発散って感じの笑顔してるな…

ル：いいのかしら…作者、次回出てこれるわよね…？

ハ：ま、出て来れなくても大丈夫でしょう。

代わりに新キャラにでも出てもらえば。

サ：新キャラか…なんかその新キャラ、

可哀相な目に合いそうな気がするな…

まだ会ってもないけど…

ル：今回は授業シーンってことだから、生徒の誰かってことね…？

ハ：そうだと思いますけど…

サ：意外に先生出てきたりして…

ル：え、なんだかそれ、わたしが気まずいんだけど…

サ：いや、出るかもな、作者が鞭打ちの仕返しに…

ル：……………（汗）

ハ：大丈夫ですよ。対応は僕がしますから…

ル：あ、ありがとう……

サ：じゃ、次回は作者が来るか、生徒が来るか、先生が来るか……

予想がつかないな……

えー、ハヤテによって半死半生の作者です。

今回の対談は感想に書かれた質問に答える形になりました。

次回以降も、希望があれば対談の中で質問に答えたいと思います。

設定については主にキャラクターが、執筆については主に僕が、

といった感じで答えます。

感想の一言欄に、質問を書いていたいただいた場合、

対談での回答を希望の方は、その旨を書いておいてください。

対談回答希望と書かれていない場合は、感想の返信で回答します。

キャラ対談の中にもありましたが、次回は授業シーンです。

キャラが何人か増えるので、対談にも徐々に絡めていきたいと思い

ます。

では、
また次回。

第六話 使い魔の一日 その3 (前書き)

はい、第六話でございます。

書きたいことを書いたら、いつもより長くなってしまいました……

でも、これだけは入れておきたかったので、後悔はしません。

キャラ・作者対談も誰が出るのか……お楽しみに。

では、どうぞ。

第六話 使い魔の一日 その3

第六話 使い魔の一日 その3

魔法学院の教室は、大学の講義室のようだった。それが石で出来ていると思ってもらえれば、大体当たっている。講義を行う魔法使いの先生が立つ場所が一番下の段に位置し、階段のように生徒の席が続いている。

ルイズたちが中に入っていくと、先に教室に来ていた生徒たちが一斉に振り向いた。そしてくすくすと笑い始める。

先ほどのキュルケもいた。周りを男子が取り囲んでいた。なるほど、男の子がイチコロというのは本当だったようだ。周りを取り囲んだ男子たちに、女王のように祭り上げられている。まあ、あの胸では仕方がない。巨乳は異世界でも共通言語のようだ。

皆、様々な使い魔を連れていた。

キュルケのサラマンダーは、椅子の下で静に眠り込んでいる。肩にフクロウを乗せている生徒もいた。窓からは巨大な蛇がこちらを覗いている。男子の一人が口笛を吹くと、その蛇は頭を隠した。カラスや猫もいた。

でも、より目を引いたのは才人やハヤテの世界では架空の生物だった生き物たちだった。驚くような生き物たちがその辺をひよこひよこ動いている。

巨大な目の玉のような生き物がぷかーっと浮いている。

思わず才人はルイズに尋ねた。

「あの目の玉のお化けみたいなのはなに？」

「バグベアー」

「あの蛸人魚は？」

「スキュア」

ルイズは不機嫌な顔で答えながら、ハヤテが引いてくれた椅子に腰掛けた。

ハヤテは小さな声で才人に言った。

「サ、サイトさん…もうすぐ授業始まるみたいですから…。静かにしていないと…」

「あ…、そ、そうだな…。悪かったよ…」

才人はすまなそうに頭をかいた。

ルイズは、その不機嫌そうな顔のまま、

「本当はメイジしか座っちゃダメだけど、2人も床に座ったら窮屈すぎるでしょうから、特別に席に座ることを許可するわ」

と、ぶすつとした声で言った。

「え、いいのか？…ありがとうございます、お嬢様」

才人は意外そうに言って座った。

「ありがとうございます、お嬢様」

ハヤテはいつも通り礼を言って座る。

2人が座るとほぼ同時に扉が開き、先生が入ってきた。

中年の女の人だった。紫色のローブに身を包み、帽子をかぶっている。ふくよかな顔が、優しい雰囲気を漂わせている。

「あの人も魔法使い？」

才人はルイズに呟いた。

「当たり前じゃない」

ルイズは呆れながら言った。

先生メイジは教室を見回すと、満足そうに微笑んで言った。

「皆さん、春の使い魔召喚は大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に様々な使い魔を見るのが、とても楽しみなですよ」

ルイズはその言葉に俯いた。

「おやおや、変わった使い魔を償還したものですね、ミス・ヴァリ

エール。しかも2人とは」

シュヴルーズが才人とハヤテを見てとぼけた声で言うと、教室がどっと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

ルイズは一人の男子生徒のその言葉に思わず立ち上がるうとしたが、唐突に笑い声が止んだ。

見ると、隣に座っていたはずのハヤテがいない。いつの間にかハヤテはその男子生徒の背後に立っていた。

「な……、お、お前、いつの間に僕の後ろに……!？」

男子生徒は振り向いてギョツとしている。

ハヤテは満面の笑みを浮かべながら、言った。

「いえ、執事には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わっているんですよ。そんな事より、僕はなんと言われようと構いませんが、僕の大切なルイズお嬢様とサイトさんをバカにすることだけは許せません。今すぐ、その言葉を撤回してください」

男子生徒はハヤテから漂うオーラに内心ビクビクしながらも、

「う、うるさい！平民の、しかもあの『ゼロ』のルイズの使い魔のくせに、貴族であるこの『風上』のマリコルヌに楯突く気か!？」

と、ハヤテに怒鳴り散らした。

「撤・回・し・て・く・だ・さ・い」

と、ハヤテはもう一度言った。

対する男子生徒 マリコル又は段々と耐え切れなくなったのか、ガタガタと震えだした。

他の生徒はルイズも含めて、啞然とそれを見つめている。

「…ね？」

と、ハヤテがマリコル又の肩に手を置いた瞬間、それがトドメだったのか、マリコル又は泡を吹いて気絶した。

周りの生徒やシュヴルーズは呆然としている。

「他の皆さんもお願いします。今後、一切、ルイズお嬢様とサイトさんのことを侮辱するようなことはしないでください」

生徒たちは皆ぶんぶんと勢いよく首を縦に振っている。

（ハ、ハヤテって……あんなにすごい奴だったの……？）

（ハ、ハヤテ……めっちゃ笑ってるけど……めっちゃ怖えええ……！）

ルイズとサイトはハヤテを怒らせちゃダメだ、と本能で感じた。

思わず呆然と見ていたシュヴルーズは、授業中であつたことを思い出し、はっと我に返つた。

「ミ、ミスタ……」

しかし、思わず声が震える。

「ハヤテです」

ハヤテは穏やかな顔に戻つて答えた。

「そ、そう、ミスタ・ハヤテ。今は授業中ですから、席にお戻りなさい」

シュヴルーズは必死に落ち着きを取り戻そうとしながら言った。

「はい、すいません。授業を止めてしまいましたね。本当に申し訳ありません」

ハヤテは丁寧にシュヴルーズと生徒全員に謝り、席に戻つた。……マリコル又は気を失つたままだが。

ハヤテが席に戻つたのを確認すると、

「こほん、ちょっと一騒動ありましたが、挨拶はこのくらいにして、本題に入りたいと思います」

シュヴルーズはやつと落ち着きを取り戻し、杖を振つた。机の上に石ころがいくつか現れた。

「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです。『土』系統の魔法をこれから一年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですね？ミスタ・グラモン」

グラモンと呼ばれた金髪の男子生徒は、髪をかきあげキザっただしく答えた。

「もちろんです。『火』『水』『風』『土』の四つであります」

シュヴルーズは頷いた。

「その通りです。今は失われし『虚無』を含めて全部で五つの系統があることは、皆さんも知っての通りです。その五つの系統の中で、『土』は最も重要なポジションを占めていると私は考えます。それは、私が『土』系統のメイジだから、というわけではありませんよ。私の単なる身びいきではありません」

シュヴルーズは再び重々しく咳をした。

「『土』系統の魔法は、万物の組成を司る重要な魔法であるのです。この魔法がなければ、重要な金属を作り出すことが出来ません。大きな石を切り出して建物を建てることも出来ないし、農作物の収穫も今より手間取ることでしょう。このように、『土』系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのです」

才人は、なるほど、と思った。この世界では、どうやら魔法が才人やハヤテの世界でいう科学技術に相当するらしい。ルイズが、魔法使いというだけで威張っている理由がなんとなくわかった。

「今から皆さんには『土』系統の魔法の基本である、『錬金』の魔

法を覚えてもらいます。一年生のときに出来るようになった人もいます。基本は大事です。もう一度、おさらいすることに致します」

シュヴルーズは石ころに向かって杖を振り上げた。

そして短くルーンを呟くと、石ころが光りだした。

光が収まると、ただの石ころだったそれはピカピカ光る金属に変わっていた。

「ゴ、ゴールドですか？ミセス・シュヴルーズ！」

キュルケが身を乗り出した。

「違います、ただの真鍮です。ゴールドを錬金出来るのは『スクウェア』クラスのメイジだけです。私はただの……『トライアングル』ですから……」

シュヴルーズはもったいぶったように一呼吸おいてから言った。

「ルイズ」

才人はルイズをつついた。

「なによ、授業中よ」

「スクウェアとか、トライアングルとかって、どういうこと？」

「系統を足せる数のことよ。それでメイジのレベルが決まるの」

「どづいうことですか？」

隣で聞いていたハヤテも尋ねる。

ルイズは小さい声で2人に説明した。

「例えばね？『土』系統の魔法はそれ単体でも使えるけど、『火』の系統を足せばさらに強力な呪文になるの」

「なるほど」

「『火』『土』のように、二系統を足せるのが『ライン』メイジ。シユールズ先生みたいに、『土』『土』『火』と三つ足せるのが『トリアングル』メイジ」

「同じの二つ足してどうすんの？」

「その系統がより強力になるわ」

「なるほど。つまり、あのシユールズ先生は三つも系統を足せる『トリアングル』メイジだから、強力なメイジというわけですね？」

「そづいうことよ」

「ルイズはいくつ足せるの？」

ルイズは急に黙ってしまった。

そんな風に3人でしゃべっていると、シュヴルーズに見咎められた。

「ミス・ヴァリエール、おしゃべりする暇があるなら、あなたにやってもらいましょう」

「え、わたしがですか？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてごらん下さい」
ルイズは立ち上がらない。困ったようにもじもじするだけだ。

「どうしたんですか？」

「」指名だろ、言っつてこいよ」

ハヤテと才人が促した。

「ミス・ヴァリエール、どうしたのですか？」

シュヴルーズが再び呼びかけると、キュルケが困ったように言った。

「先生」

「なんですか？」

「止めといた方がいいと思いますけど……」

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケはきっぱりと言った。教室のほとんどが真面目な顔で頷いた。

「危険？どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家だということは聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール、気にしないでやってごらんなさい。失敗を恐れては、何も出来ませんよ？」

「ルイズ、やめて……」

キュルケが蒼白な顔で言った。

しかし、ルイズは立ち上がった。

「や、やります」

そして、緊張した顔で、つかつかと教室の前へと歩いていった。

隣に立ったシュヴルーズは緊張を和らげようと、にっこりとルイズに笑いかけた。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を強く心に思い浮かべるのです」

こくりと可愛らしく頷いて、ルイズが手に持った杖を振り上げた。

唇を軽くへの字に曲げ、真剣な顔で呪文を唱えようとするルイズは、この世のものとは思えないほど愛らしい。

しかし、そんな才人やハヤテの感想とは裏腹に、なぜか周りの生徒は次々と椅子の下に隠れた。あんなに可愛らしいルイズを見たくないのだろうか。

「サイト、ハヤテ、隠れた方がいいわよ」

ルイズの後ろの席だったキュルケが呼びかけてきた。

「え？」 「どうしてですか？」

才人とハヤテは、頭に？が浮かぶ。

「危険」

キュルケの隣にいた青い髪の女の子が言った。彼女の身長ほどもある杖と、本を持っている。

「？……わかった」 「……はあ」

才人とハヤテは理解が追いつかないながら、身を縮めるように椅子の下に隠れた。

その直後、『危険』の意味を理解した。

ルイズが短くルーンを唱え、杖を振ると………

その瞬間、机ごと石ころが爆発した。

爆風が直撃したルイズとシュヴルーズは黒板に叩きつけられた。生徒からは悲鳴が上がる。

気絶していたマリコルヌは、爆風を受け上半身が真っ黒になった。

驚いたバグベアーが浮き上がって飛び回り、窓ガラスを割って外へと飛び出した。その穴から先ほど教室を覗いていた巨大な蛇が入ってきて、誰かのカラスを飲み込んだ。

教室中が阿鼻叫喚の大騒ぎになる。

キュルケは頭を抱えながら言った。

「だから、ルイズにやらせるなって言ったのよ……」

青髪の女の子も、

「同感」

才人とハヤテは呆然とした。

シュヴルーズは倒れたまま動かない。たまに痙攣しているから、死んではいないようだ。

煤で真っ黒になったルイズが、むくりと立ち上がる。見るも無残な格好だった。ブラウスが破れ、華奢な肩が覗いている。スカートが裂け、パンツが見えていた。

しかし、さすがと言うべきか、大騒ぎの教室を意に介した風もなく、顔についた煤をハンカチで拭いながら、淡々と言った。

「ちょっと失敗みたいね」

（ちょっとじゃないだろ！）

（いつだって成功の確率、ほとんどゼロじゃないか！）

他の生徒たちは口に出したい気持ちでいっぱいだったが、先ほどのハヤテが頭に焼きついているのか、誰も心に思うだけにしていた。

才人とハヤテは、どうしてルイズが『ゼロ』と呼ばれていたのかようやく理解した。

？

この騒動の後、先生に怒られるということとはなかったものの、教室を壊したのはルイズだったので、片づけを命じられた。

ルイズ、才人、ハヤテの3人は、誰もいなくなった教室で机を直したりしていた。

「はあ……」

ルイズは溜息をつく。

それを見て、才人は机の位置を直しながら言った。

「……なるほどな。だから『ゼロ』って呼ばれてたのか」

「なによ、やっぱりあんたもわたしをバカにするの…?」

ルイズは怒って言った。

「違うよ。確かに、先生と言ったこととは違ったけど、何も起きなかつたわけじゃない」

才人はルイズの言葉を否定して言った。

「そうですね、『爆発』という形ではありましたが、あれも立派な魔法だと思いますよ」

ハヤテも頷いて言った。

「……………え?」

ルイズは驚いたような顔をした。

「ルイズは、『自分は全然魔法が出来ない』って思ってたかもしれないけど、それは違う」

才人はルイズの顔を真っ直ぐに見つめながら言う。

「『魔法ができない』んじゃない、『爆発だけはできる』んですよ」

「ハヤテもルイズを励ます。」

「……………そんな風に思ったこと、一度もなかった…」

ルイズは自分の手を見つめて呟く。

「だから、もっと自信を持って」

「そうです。お嬢様は、『ゼロ』なんかじゃないんですから」

2人の言葉に、ルイズは手で顔を覆った。

「……………ありがとう」

彼女からの初めての感謝の言葉だった。

第六話 使い魔の一日 その3 (後書き)

キャラ・作者対談

サイト(以下サ)：で、今回は結局誰が出るんだ…？

ハヤテ(以下ハ)：えーと、内容では、マリコルヌとシュヴルーズ先生は気絶、でしたから…

ルイズ(以下ル)：ホッ…先生じゃないみたいね…

サ：じゃ誰だ？

ギーシュ(以下ギ)：やあ、僕の出番というわけさ…

サ・ハ：お前誰だっけ…？

ギ：この僕を知らないとは…まあいい、この話では僕はちょい役だったからね…

僕はギーシュ・ド・グラモン。『土』系統のメイジだ。

ル：なんでギーシュが出るのよ…というか今回も作者はいないのね…

ギ：なぜかって？それは僕がいることで、この対談が華やかになるからさ…！

サ・ハ・ル…(そうは思えません…)

ギ：僕は一輪の薔薇なんだ。どこにいたって皆の目を楽しませなくてはね……

サ：ま、これ小説だけだな。

ギ：………君、そこは華麗にスルーしたまえ。

ハ：あはは……

ギ：あ、そうそう、なにやら作者から手紙を預かっているのだよ。

ル：それを最初に言いなさいよ！ちよつと見せなさい！………なににな、

『前回、ハヤテにボコボコにされた作者です。今回も出て来れそうにありません』

んでしたので、頑張つて手紙を書いています。

えー、この『ゼロ魔のごとく』は本日の10時台に、ユニークアクセス20

00人を突破いたしました！真にありがとうございます！

そして、昨日の夜にはPVアクセスが10000アクセスを超えました！

本当に感謝の言葉しか出てきません！

この第六話は、ハヤテの強さの片鱗と主を想う優しさ、

そして、サイトのぶっきらぼうながらもルイズを励ます優しさを表現したいなあと思って書いていました。

その辺を感じていただけたら嬉しい限りです。

サイトのいい所を出して欲しい、という要望もあったので、

最後はオリジナル展開として付け加えました。

この『ゼロ魔のごとく』では、

ルイズを原作より優しい性格として書いています。

サイトの方は、ぶっきらぼうな感じはそのままですが、

人をバカにするような、そんなことはしない性格として書いています。

つまらない、という方もいるかもしれませんが、

これは、執筆前の構想から決めていたことですので
変えるつもりはありません。

ハヤテに関しては、まあ原作どおり、紳士というか、

カッコ可愛い執事として書いていこうと思います。』

ハ：な、なんですか！カツコ『可愛い』って！

ギ：うむ、確かに君は、女顔だからな……僕が思わず求愛してしま
いそうだよ……

ハ：結構です！変態はあいつ（虎鉄）だけで十分困ってるんですか
ら！

サ：やっぱり追いかけてるんのか……

ル：……続きを読むわよ。

……『そういうわけで、『ゼロ魔の』とく』は

そんな3人を中心に動いていきます。

今回は決闘へと繋がるシーンを書く予定です。

決闘本番は次々回か、その次辺りになると思います。

きつと楽しみにしていた方もいると思うので、

頑張つて書いていきたいと思えます。

これからもよろしくお願いします。』

……これで終わりだわ。

サ：そうか、決闘か……

ギ：ようやく僕の真打というわけだね。

ハ：原作ではサイトさん、最初ボコボコでしたけど……

作者はどうするんでしょうか……？

ル：……なんだかギーシュが可哀相な目に合うのが、頭に浮かんでくるわ……

ギ：ええ！？ぼ、僕がかい？

ま、まさか、少しの見せ場もなくやられる展開になってしまっ
つてことかい？

サ：ハ・ル：……

ギ：おい！なんとか言いたまえ！

サ：……せめて、痛くないように一瞬で終わらせてやるよ。

ギ：ぼ、僕は殺されるのかい……？

サ：ハ・ル：……

ギ：い、いやだ！そこまでされるなんて聞いてないぞ！

サ：まあ、初登場だし……

ハ：作者の良心がギーシュさんを瀕死で終わらせるか……

やっぱりあの世へ行ってしまうわねか…

ギ…どつちにしるひどい目じゃないか！

………作者、僕はそこまでひどい奴なのかい？

そこまでひどい奴だったつもりはないんだけどな………

ル…ああ、ギーシュが白くなっていく………

サ…ほっとけ。

ハ…いいんでしょうかね………？

はい、ギーシュはどうなるか………どうしようかな（笑）

次回に限って言えば、まだ決闘ではないです。

ですので、じっくりギーシュについては考えていきたいと思えます

…（笑）

では、また次回。

第七話 伝説のルーン（前書き）

はい、第七話でございます。

今回はなんとというか、

決闘へのつなぎ その1とでも言うべきか…

決闘シーンは次々回となります。

次回の分は書きあがっているのですが、

その次の決闘シーンが難しい…

戦闘描写ってどうやったらうまく書けるのでしょつか…

恒例のキャラ・作者対談もどうぞ。

では、お楽しみください。

第七話 伝説のルーン

第七話 伝説のルーン

ジャン・コルベールはトリステイン魔法学院に奉職して二十年、中堅の教師である。彼の二つ名は『炎蛇』。『火』系統の魔法を得意とするメイジである。

彼は、先日の『春の使い魔召喚』の際に、ルイズが呼び出した2人の平民の少年たちのことが気になっていた。いや、正確には、その少年たちの左手に現れたルーンのことになって仕方がないのであった。珍しいルーンだったので、先日の夜から図書館にこもりつきりで書物を調べていたのだ。

トリステイン魔法学院の図書館は、食堂と同じく本塔の中にある。本棚は驚くほどに大きい。おおよそ三十メートルほどの高さの本棚が、壁際にならんでいる様は壮観だ。それもそのはず、ここには始祖ブリミルがハルケギニアに新天地を築いて以来の歴史が詰め込まれているのだった。

彼がいるのは、図書館の中の一画、教師のみが閲覧を許される『フェニアのライブラリー』の中であった。生徒たちも自由に閲覧できる一般の本棚の中には、彼の満足いく回答は見つからなかったのである。

空中浮遊の呪文である『レビテーション』で、手の届かない書棚まで浮かび、彼は一心不乱に本を探っていた。

そして、その努力は報われた。彼は一冊の本の記述に目を留める。

それは、始祖ブリミルが使用した使い魔たちが記述された古書であつた。

その中に記された一節に彼は目を奪われた。じっくりとその部分を読みふけるうち、彼の目が見開いた。

彼は、あつ、と声を上げそうになった。一瞬『レビテーション』のための集中が途切れ、床に落ちそうになる。

彼は本を抱えると、慌てて床に下りて走り出す。

彼が向かった先は、学院長室だつた。

？

学院長室は、本塔の最上階にある。トリステイン魔法学院の学院長であるオスマン氏は、白い口ひげと髪を揺らし、重厚なつくりのセコイアのテーブルに肘をついて、退屈を持って余っていた。

部屋の端に置かれた机について書き物をしているのは、秘書のミス・ロングビルである。

オスマン氏は咳くように言った。

「モートソグニル」

ミス・ロングビルの机の下から、小さなハツカネズミが現れた。

オスマン氏の足を伝って、肩にちょこんと乗り、首をかしげる。

ポケットからナッツを取り出し、ネズミの顔の先で振った。

ちゅうちゅう、とネズミが喜んでいる。

「気を許せる友達はお前だけじゃ、モートソグニル」

ネズミはナッツをかじり始めた。かじり終わると、再びちゅうちゅうと鳴いた。

「そうかそうか。もっと欲しいか。よろしい、くれてやろう。だが、その前に報告じゃ、モートソグニル」

ネズミはオスマン氏の耳元に顔を寄せて、ちゅうちゅうと鳴いた。

「そうか、白か。うむ。しかし、ミス・ロングビルは黒に限る。そうは思わんかね、可愛いモートソグニルや」

オスマン氏は再びネズミにナッツを与えた。ちゅうちゅうとネズミは喜ぶ。

ミス・ロングビルの眉が動いた。

「オールド・オスマン」

「なんじゃね？」

「今度やったら、王室に報告します」

するとオスマン氏は立ち上がった。ネズミが肩からテーブルに飛び降りる。

「カーツ！王室が怖くて魔法学院学院長が務まるカーツ！」

オスマン氏は目を剥いて怒鳴った。よぼよぼの年寄りとは思えない迫力だった。

「下着を覗かれたぐらいでカツカしなさんな！そんな風だから、婚期を逃すのじゃ」

ミス・ロングビルは立ち上がり、無言で上司を蹴りまわした。

「ごめん。やめて。痛い。もうしない。ほんとに」

オスマン氏は頭を抱えてうずくまる。ミス・ロングビルは荒い息でオスマン氏を蹴り続けた。

「あだっ！年寄りを。きみ、そんな風に。こら！あいだっ！」

そんな平和な時間は突然の闖入者によって破られた。

ドアがバタン！と勢いよく開かれ、中にコルベールが飛び込んできた。

「オールド・オスマン！」

「なんじゃね？」

ミス・ロングビルは何事もなかったように机で仕事を続けていた。

オスマン氏は腕を後ろに組んで、重々しく闖入者を迎え入れた。一瞬の早業であった。

「たた、大変です！」

「大変なことなどあるものか。すべては小事じゃ」

「こ、ここ、これを見てください！」

コルベールはオスマン氏に、先ほど読んでいた書物を手渡した。

「これは、『始祖ブリミルの使い魔たち』ではないか。まーたこのような古臭い文献を漁りおつて。そんな暇があるのなら、たるんだ貴族たちから学費を徴収するうまい手をもっと考えるんじゃないよ。ミスタ……コツパゲール、じゃったかの？」

オスマン氏は首をかしげた。

「コルベールです！お忘れですか！」

「そうそう、そんな名前じゃったな。君はどうも早口でいかんよ。で、コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「こ、これも見てください！」

コルベールは才人とハヤテの手に現れたルーンのスケッチも手渡す。

それを見た瞬間、オスマン氏の表情が変わった。目が鋭く光り、厳しい色になった。

「ミス・ロングビル。席を外してもらえるかの」

ミス・ロングビルは立ち上がり、部屋を出ていく。彼女の退室を見届け、オスマン氏は重々しく口を開いた。

「詳しく説明するんじゃない。ミスタ・コルベール」

？

ルイズがめちゃくちやにした教室の片付けが終わったのは、意外にも早かった。ハヤテのおかげで、あっという間に元通りに、というより元の教室以上に綺麗になったのであった。

確認しに来た担当の先生は口をあけて驚いていたが、「よろしい」と言って、ひとまず他の授業が続いていたので、寮へ戻っているように言われた。

そういうわけで、3人はルイズの部屋に戻った。

部屋に入ったとたん、才人は床に落ちているものを見て、「あ」と声を上げた。

「そういえば、下着の洗濯がまだだったな……」

「い、いいわよ。学院のメイドにでもやらせておけば……」

ルイズは先ほど2人に励まされたこともあって、なんだか急に気

恥ずかしくなる。

「でも、昨日お嬢様がおっしゃったことですから。……サイトさん、僕が行ってきましようか？」

ハヤテは自分が慣れてるから、と洗濯へ行こうとするが、

「いや、ハヤテはここでルイズといってくれ。さっきの片付け、ほとんどハヤテがやってくれたし、俺も何かしないと悪いだろ。ルイズ、水場の場所だけ教えてくれ」

才人は洗濯物を拾い上げて、ルイズに水場への道筋を聞いた。

そして、部屋を出て水場へと向かう。

？

「ふう〜、昔の人は大変だったんだな……」

才人は水汲み場で、洗濯板を使って洗濯をしていた。

お湯なんて出やしないので、指はキンキンに冷えて段々としびれてくる。ルイズの下着は高そうなレースやフリルがついていたりするので、丁寧に洗わねばならない。正直、辛い作業である。

初めてだったので、時間がかかってしまった。どうやら、もう昼食の時間らしい。

生徒たちが本塔へ向かっているのが見える。

ちょうどルイズとハヤテも見えたので、2人に合流する。

「ご苦労様です」

ハヤテが労いの言葉をかける。

「水しか出なかったから、ちょっと大変だったよ……」

才人は赤くなった手を見せる。

「大丈夫……？」

ルイズは少し心配そうだ。授業の前とは大違いである。

「……どうしたんだよ？なんか、やけに優しくないか？」

才人はルイズの顔を見て言った。

ルイズは少し頬を染めながら、

「だ、だってあんたたち……授業の後で、わたしのこと……」

と少し恥ずかしそうに言った。

「そんなことか。そりゃ、まあ……だって、俺たち……」

「お嬢様の『使い魔』じゃありませんか」

ハヤテは才人の言葉を引き取った。

「セリフ取るなよ、ハヤテ！」

「あはは……」

ハヤテとルイズは笑った。

？

「明日からは用意するから……」とのルイズの言葉により、才人とハヤテは朝食とほとんど同じ昼食を取った。

2人はあつという間に食べ終わったので、ルイズに一言告げて、外へと出た。

外にもテーブルと椅子が置かれ、そこでデザートを食べている生徒たちがいた。メイドたちが忙しそうに、デザートを配っている。

見かねた才人とハヤテは、メイドの1人に声をかけた。

「あの……」

「はい、なんでしょう？」

声をかけたメイドは、素朴な感じの少女であった。カチューシャで纏めた黒髪と、そばかすが可愛い。

「大変そうですけど、僕たちでよければ、お手伝いしましょうか？」

「どうせ暇だしな」

2人の言葉に、そのメイドは笑顔で言った。

「あなたたち、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔さんたちですか？」

才人とハヤテの左手に刻まれたルーンに気づいたらしい。

「え……？知ってるの？」

「はい。メイドたちの間でも噂になってましたから」

「あなたも魔法使いなんですか？」

ハヤテは尋ねた。

「いえ、私はあなたたちと同じ平民です。貴族の方々をお世話するために、ここでメイドをやらせていただいているんです」

「そっか……俺は平賀才人。サイトでいいよ」

「僕は綾崎ハヤテ。ハヤテと呼んでください」

2人は自己紹介した。

「変わったお名前ですね……。あ、私はシエスタっていいいます」

シエスタも挨拶する。と、そうしていると……

「おーい、こっちにもデザートをくれ！」

と、生徒が呼んでいるようだ。

「あ、いけない！ サイトさん、ハヤテさん。お手伝いお願いしてもいいですか？」

シエスタは2人に頼んだ。

「もちろん」

「よろこんで」

2人は笑顔で答えた。

第七話 伝説のルーン（後書き）

キャラ・作者対談

作者（以下作）：復活しました、carzeeでございます。

サイト（以下サ）：お、作者…よく帰ってこれたな…

ルイズ（以下ル）：不死身ね…

ハヤテ（以下ハ）：もう少し強く蹴っておけば…

サ・ル：（ハヤテが黒い……………）

作：とりあえず、それはさておき、

今回の対談はこの方に来ていただきました。どうぞ！

シエスタ（以下シ）：こんにちは、メイドのシエスタです。

ル：今回の新キャラってわけね…

サ：なんだか、シエスタ見ると懐かしい気分になるんだよね…

ハ：僕もなんですけど…なんででしょうかね…？

作：んー、黒髪だからじゃない？

サ：それもまああるんだけど、なんか雰囲気がというか…

ル：ご主人様をないがしろにしないでよ！

ハ：あ、すいません……

シ：たしか、原作では、

ミス・ヴァリエールにご飯を抜かれてしまったサイトさんに、

厨房までご案内して賄い食を食べさせてあげる……

というのが、私の初登場でしたよね？

作：ああ、そうだったな。

原作のルイズはちょっとひどいなあと思ったからね。

こつこつ優しい感じにしてみたんだ。

ま、原作のサイトもやりすぎのところがあるけどな。

ル：ひどいってなによ！

サ：やりすぎてってなんだよ！

ハ：シ……まあまあ……

作：お、さすがは使用人コンビ。息が合ってるな……

ハ：シ……そうですか？

ル：わたしとサイトのことは華麗にスルーしたわね…

サ：もう、どうでもいいや……

作：というわけで、次回は決闘直前のシーンだけど、

ギーシュが本格的に動きますんで。

サ：あいつ、キザな奴だから、なんかムカつくんだよな…見た目がら…

ル：わたしもどこがいいのかよくわかんないわ…

なのに、なぜか意外とモテるのよね…

ハ：美形といえば美形ですし、甘い言葉を囁くのが……

いって人もいるのでは？……コアなマニア的な…

シ：ミスタ・グラモンは……失礼ですが、私も正直…タイプじゃないですね…

ギーシュ（以下ギ）：おいおい、僕の魅力に気づいていないのかい…？

サ：あ、出てきやがった。本編にいないのに…

ギ：言ったじゃないか……薔薇は皆を楽しませる物だってね…

ル：それだけで対談に現れるの…？

ハ：あはは……………

ギ：これから僕の魅力についてじっくりと語ってあげ…

サ：ハヤテ、やっちなえ。

ハ：……………わかりました。次回の本編に出ただただかないといけませんので、

かなり手加減しておきます。

ハヤテは軽いハイキックをギーシュにぶち込んだ。

ギ：ぶっ！！

ギーシュは悶絶して倒れた。

作：震えてるな……………

ハ：これくらいなら大丈夫でしょう。

サ：ああ、サンキュー、ハヤテ。

ル：やっと黙ってくれたわ…

シ：ミ、ミスタ・グラモン……………

ギ：…（あ、悪魔だ……………こいつらは……………あく!!!）

ギーシュは気絶した。

はい、ギーシュ君には次回から活躍していただきます。

前書きにも書きましたが、戦闘シーンって本当に難しいですね…

決闘のシーンは、特に力を入れて書いていきたいと思えます。

では、また次回。

第八話 食堂前にて（前書き）

はい、第八話です。

今回は決闘へのつながり その2となっております。

次回、第九話が決闘本番です。

ちょっと展開が変かな、と思ったところもあるのですが、
楽しんで読んでもらえれば幸いです。

いつものキャラ・作者対談もあります。

では、さようなら。

第八話 食堂前にて

第八話 食堂前にて

大きな銀のトレイに、デザートのカークが並んでいる。才人とハヤテがそのトレイを持ち、トングでケーキを取って、一つずつ生徒に配っていく。

金髪で、フリルのついたシャツを着た、キザなメイジがいた。薔薇をシャツの胸ポケットに挿している。さっきの授業で答えていた先生にはグラモンとか呼ばれていた男子だ。

周りの友人が彼を冷やかしている。

「おい、ギーシュ！お前、今は誰と付き合っているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

キザなメイジはギーシュという名前らしい。彼は唇の前にすっと指を立てた。

「付き合う？僕にそのような特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

自分を薔薇に例えてやがる。救いようのないキザだ。見てることちが恥ずかしいほどのナルシストっぷりである。

才人はバラじゃなくてバカだろ、と思いながら、彼を見つめた。

そのとき、ギーシュのポケットから何かが落ちた。ガラスの小瓶である。中に紫色の液体が入っている。

気に入らない奴だが、落とし物は落とし物だ。教えてやるつ。

才人はギーシュに声をかけた。

「おい、ポケットから瓶が落ちたぞ」

しかし、ギーシュは振り向かない。こいつ、無視しやがって。

才人は一旦トレイをテーブルに置き、しゃがみこんで小瓶を拾った。

「落とし物だよ。色男の貴族さま」

才人はそれをギーシュの目の前のテーブルに置いた。ギーシュは苦々しげに才人を見つめると、その小瓶を押しやった。

「これは僕のじゃない。君はなにを言っているんだね？」

その小瓶の出所に気づいたギーシュの友人たちが、騒ぎ始めた。

「おお？その香水は、もしか、モンモランシーの香水じゃないか？」

「そうだ！その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぞ？」

「そいつが、ギーシュ、お前のポケットから落ちてきたってことは、つまりお前は今、モンモランシーと付き合っている。そうだな？」

友人たちは次々にはやし立てる。

「違う。いいかい？彼女の名誉のために言っておくが……………」

ギーシュが何か言いかけたとき、後ろのテーブルに座っていた茶色のマントの少女が立ち上がり、ギーシュの席に向かって歩いてきた。

栗色の髪をした、可愛い少女だった。着ているマントの色からして、一年生だろうか。

「ギ、ギーシュさま……………やっぱり、ミス・モンモランシーと……………」

そしてポロポロと泣き始めた。

「か、彼らは誤解しているんだ、ケティ。いいかい、僕の心の中に住んでいるのは、君だけ……………ぶっ！」

しかし、ケティと呼ばれた少女は、思いっきりギーシュの頬をひっぱたいた。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが何よりの証拠ですわ！さようなら！」

ケティは走り去る。ギーシュは頬をさすった。

すると遠くの席から一人の見事な巻き髪の子が立ち上がった。

彼女はいかめしい顔つきでかつかつとギーシュの席までやってき

た。

「モ、モンモランシー、誤解だ。彼女とは、ただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただけで……」

ギーシュは首を振りながら言った。冷静な態度を装っていたが、冷や汗が一滴、額を伝っていた。

「やっぱり、あの一年生に、手を出していたのね？」

「お願いだよ、『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りでゆがませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

しかし、モンモランシーは、テーブルに置かれたワインの瓶を引つつかむと、中身をどぼどぼとギーシュの頭の上からかけた。そして……

「うそつき……！」

と怒鳴って去っていった。

沈黙が場を支配した。

ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭いた。そして、首を振りながら芝居がかった仕草で言った。

「あのレディたちは、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

才人は一生やってろ、と思い、テーブルに置いたトレイを持って、

再び歩き出した。

そんな才人を、ギーシュが呼び止めた。

「待ちたまえ」

「なんだよ」

「君が軽率に、香水の瓶なんかを拾い上げたおかげで、2人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

才人は呆れた声で言った。

「二股かけてるお前が悪い」

ギーシュの友人たちが、どっと笑った。

「その通りだ、ギーシュ！お前が悪い！平民、なかなかいいこと言うじゃないか！」

ギーシュの顔に、さっと赤みが差した。

「いいかい？給仕君。僕は君が香水の瓶をテーブルに置いたとき、知らないフリをしたじゃないか。話を会わせるくらいの機転があってもいいだろう？」

「どつちにしろ、二股なんかそのうちバレるっつもの。あと、俺は給仕じゃない」

「ふん……。ああ、君は……………」

ギーシュは周りを見回した。ハヤテが近くにいないか見ているらしい。

ちょうどハヤテは遠くの席でケーキを配りながら、生徒と話をしているようだ。執事として染み付いた物腰が、貴族の子女たちに好印象だったらしい。

近くにいないことを確かめると、ギーシュはバカにしたように鼻を鳴らした。

「たしか、あの『ゼロ』のルイズが呼び出した、平民だったな。平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。さっさと行きたまえ」

才人はかちんときた。確かに美少年ではあるが、こんなキザのナルシストに、そうまで言われたら黙ってられない。

余計な一言が口をついた。

「うるせえ、キザ野郎。一生薔薇でもしゃぶってる」

ギーシュの表情が変わった。

「どうやら、君は貴族に対する礼儀を知らないようだな」

「あいにく、貴族なんか1人もいない世界から来たんでね」

才人はギーシュの物腰を真似て、右手を上げ、キザったらしい仕草で言った。

「よかるう。君に礼儀というものを教えてやるう。ちょうどいい腹ごなしだ」

ギーシュは立ち上がった。

「おもしろえ」

才人はニヤリと笑みを浮かべた。まず、こいつは第一印象からして気に入らない。ルイズほどじゃないけど、結構可愛い女の子と2人も付き合っていた。おまけに俺をバカにしくさった。

ケンカするには十分すぎる理由がある。ルイズをバカにした分も含めて、殴ってやる。ルイズは俺のご主人さまだからな！

「ここでやんのか？」

才人は言った。ギーシュは才人より背が高いが、ひよろつとしていて力はなさそうだ。才人もそんなに強いわけじゃないが、負けるとは思えない。

ギーシュはくるりと体を翻した。

「逃げんのかよ！」

「そんなわけないだろう。まさか食堂の目の前でやるわけにはいかない。ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配り終えたら、来たまえ」

ギーシュの友人たちが、わくわくした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追った。

1人はテーブルに残った。どうやら才人を見張るつもりのような生徒たちがなにやら集まっているのに気づいて、ハヤテが近づいてきた。

「ど、どうしたんですか？」

人だかりの中の1人に尋ねた。

「お、あいつの相棒か。なんでも、ギーシュとあのルイズの使い魔の平民が決闘するらしいぜ」

「え……………？」

ハヤテは慌てて才人に駆け寄った。

「サ、サイトさん！決闘って本気ですか！？」

才人は笑いながら答えた。

「ああ、ハヤテか。大丈夫、あんなひよろした奴に負けるわけねえ」

「で、でも！」

ハヤテが説得しようとしていると、昼食を終えたらしいルイズも駆け寄ってきた。

「聞いたわよ！あなた、なに勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

「だって、あいつ……あまりにもムカつくから……」

才人はバツが悪そうに言った。

ルイズは溜息をついて、やれやれと肩をすくめた。

「怪我したくなかったら、謝ってきなさい。今なら許してくれるかもしれないわ」

「なんで俺が謝んなくちゃならないんだよ！先にバカにしてきたのは向こうの方だし、だいたい、俺は親切で……」

「いいから」

ルイズは強い調子で才人を見つめた。

「いやだ」

「頑固なんだから……。あのね？絶対勝てないし、あんたは怪我するわ。いや、怪我で済めば運がいいわよ！」

「そんなの、やってみなくちゃわかんねえだろ」

「サイトさん、僕が代わりに……」

「悪いけど、ハヤテは引っこんでくれ。これは俺が受けた決闘だ。ハヤテはきつと強いけど、それじゃダメなんだ。自分でやらなきゃ

……」

才人はきっぱりとハヤテに言うと、残っていたギーシュの友人に尋ねた。

「ヴェストリの広場ってどこだ」

3人のやり取りを見ていたギーシュの友人は、顎をしゃくった。

「こつちだ、平民」

「ああもう、ほんとに！使い魔のくせに勝手なことしないでよ！」

「大変なことになってきましたね……」

ルイズとハヤテは才人の後を追いかけた。

第八話 食堂前にて（後書き）

キャラ・作者対談

サイト（以下サ）：なんで二股かけんだよ…

ギーシュ（以下ギ）：言ってるじゃないか。薔薇は…

ルイズ（以下ル）：それはもう聞き飽きたわ。

ハヤテ（以下ハ）：そうですね。

ギ：おいおい！僕のセリフを止めないでくれよ…

サ：どうやったらそんなキザなセリフが出るんだよ…

ギ：貴族という高貴な者は自然とこんな物腰が身につくのさ…

ル：いやいや、あんたくらいよ、そんなナルシストは…

サ・ハ：同感だな（ですね）。

ギ：……………ふっ。

サ：ごまかすな！

作者（以下作）：えー、次回が決闘となるんだが…

ハ：あ、作者ですか。いつの間にかいたんですか？

作：最初から…いたつもり…だったんだが…

ル：き、気づかなかったわ……

サ：俺もだ。

ギ：僕的美しさに、作者の存在が陰ってしまったようだ

サ・ハ・ル・作：んなわけないだろ（でしょ）。

ギ：………そこまで言われると………さすがに………へこむな……

作：へこんだギーシュはおいといて…

ル：おいておくのね……

作：話を戻すけど、次回は決闘だ。

サ：ついにきたか。

ハ：なんだかとても長くなったようですね……

作：…：…そうなんだ。書いてたら、あれよあれよと長くなってしまっ
て、

気づいたら、いつもの倍になってしまった……

ル：でも、読者様の中にも『長くして欲しい』という方もいたんだ
から、

いいんじゃないかしら？

ハ：そうですね。

また感想で長さについて書いていただけることもあるでしょうし、

とりあえずそのまま投稿してみたらいかがでしょうか？

作：そうだな。九話・十話にまたいで決闘にしようかとも思ってたんだが、

あえて九話だけに纏めてみるよ。

ギ：僕のことよろしく頼むよ……

作：サ・ハ・ル：あ、まだいたんだ。

ギ：うおおい！いい加減にしたまえ！

はい、前書きと対談でも言ったとおり、次回は決闘本番です。

長くなってしまいましたが、一気に書いて投稿しようと思います。

楽しみにしていた方もいると思いますので、頑張って書き上げました。

ハヤテもつまく絡めることが出来たと思うので、よろしくお願いします。

では、また次回。

第九話 ガンダールヴ（前書き）

はい、第九話です。

いよいよ、お待ちかねの決闘でございます。

普段の倍くらいの長さとなっております。

もちろんキャラ・作者対談もあります。

活動報告も見ていただくと嬉しいです。

それでは、どうぞ。

第九話 ガンダールヴ

第九話 ガンダールヴ

ヴェストリの広場は、魔法学院の敷地内、『風』と『火』の塔の間にある中庭である。

西側にある広場なので、そこは日中でもあまり日が差さない。決闘にはうってつけの場所である。

しかし、噂を聞きつけた生徒たちで、広場は溢れかえっていた。

「ギャラリーの諸君、決闘だ！」

ギーシュは薔薇の造花を掲げた。生徒からは歓声が巻き起こる。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの使い魔の平民の片割れだ！」

俺にだって名前があるんだよ……と才人は苦笑いした。

才人とギーシュは、広場の真ん中に立ち、お互いに睨みあった。

「とりあえず、逃げずに来たことは褒めてやろうじゃないか」

「誰が逃げるか！」

「さて、では始めるとしよう」

ギーシュは才人を余裕の笑みで見つめると、薔薇の花を振った。

花びらが一枚、宙に舞ったかと思うと……

甲冑を着た女戦士の形をした、人形になった。

身長は人間と同じくらいだが、硬い金属製のようだ。淡い陽光を受けて、甲冑がきらめいている。

それが、才人の前に立ちふさがった。

「な、なんだこりゃ……！」

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。まさか、卑怯だ、などとは言えないね？」

「て、てめえ……！」

才人はギーシュの顔を睨みつける。

「言い忘れたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」「

「く、くそ……！」

女戦士の形をしたゴーレムが、才人に向かって突進してきた。

才人は反射的に腕で体をかばう。

ゴーレムの右の拳が、そのガードした両腕を襲う。

「ぐっ………！」

才人はうめいた。両腕から嫌な音がした。無理もない、青銅製の拳を受けたのだ。

続いてゴーレムの左拳が、ガードしきれていない脇腹にヒットした。

「げふっ………！」

才人は地面にくず折れた。息が詰まる。苦しくて立ち上がれない。

「なんだ、もう終わりかい？」

ギーシュが呆れた声で言った。人ごみの中から、追いついたルイズとハヤテが飛び出してくる。

「ギーシュ！」

ルイズはギーシュを睨みつけた。

「サイトさん！」

ハヤテは倒れた才人に駆け寄る。

「おお、ルイズ、悪いな。君の使い魔を1人、ちよつとお借りしているよ！」

ルイズは長い髪を揺らし、よく通る声でギーシュを怒鳴りつけた。

「いい加減にして！だいたい、決闘は禁止されてるじゃない！」

「禁止されているのは、貴族同士の決闘だけだ。平民と貴族の間での決闘なんか、誰も禁止していない」

ルイズは言葉に詰まった。

「そ、それは、そんなこと今までなかったから……」

「ルイズ、もしかして君は、そこに倒れている平民が好きなのかい？」

ルイズの顔が赤く染まった。

「だ、誰がよ！やめてよね！自分の使い魔がみすみす怪我するのを、黙って見ていられるわけじゃないじゃない！」

「サイトさん、無茶です…！もうやめてください！」

ハヤテが才人に叫ぶ。

「……だ、誰が、怪我するって…？あと、ハヤテ……俺はまだ、平気だっつの……」

「サイト（さん）！」

立ち上がった才人を見て、ルイズとハヤテは悲鳴のような声で名前を呼んだ。

「…へへへ、ハヤテ、絶対手出すなよ……」

ルイズとハヤテは心配そうに見つめる。

「わかったでしょう？平民は絶対にメイジには勝てないのよ！」

「……ちょ、ちょっと油断しただけだ。いいから、どいてろ」

才人はルイズとハヤテを押しやった。

「おやおや、立ち上がるとは思わなかったな……。手加減しすぎたかな？」

ギーシュが才人を挑発した。

才人はゆっくりとギーシュに向かって歩き出した。ルイズとハヤテがその後を追いかけているが、才人の肩をつかむ。

「寝てなさいよ、バカ！どうして立つのよ！」

「こ、これ以上は危険です、サイトさん！」

才人は肩に乗せられた手を振り払った。

「ムカつくんだよ……」

「ムカつく？メイジに負けたって恥でもなんでもないわ！」

才人はフラフラと歩きながら、呟いた。

「うるせえ」

「「え…？」」

「ほんと、ムカつくんだよね……。俺だけならまだしもよ……。ルイズ、お前のこと…まだ『ゼロ』って呼ぶんだぜ、あいつ……」

その言葉に、ハヤテの表情が変わった。

「ハヤテ……お前も言っただろ……。ルイズをバカにすることだけは、許せねえってよ……。俺だって同じなんだよ……。ルイズは…俺の…大事な……ご主人様だからな……」

ルイズは、その言葉に涙を流した。

そのとき……。

ガコンー！！

ギーシュの前に立ちふさがっていたゴーレムが吹き飛び、地面にめり込んでいた。

ギーシュは啞然としている。

ハヤテが笑顔で立っていた。そのまま、あっけらかんと言った。

「すみません、足が滑っちゃいました」

「ハ…ハヤテ……邪魔すんなって……」

才人が搾り出すような声で言った。

「そ、そうだ！君、これは僕と彼の決闘なんだ。手を出さないでくれ」

ギーシュも我に返って言った。

しかし、ハヤテは笑顔で言う。

「『決闘』？これが決闘なんですか？丸腰の相手に、自分の得意な攻撃でなぶり倒して、見せ物にするようなこれを決闘というんですか？

僕には、これが『リンチ』にしか見えてなりません。あと、ギーシュさん、あなたは、僕たちの大切なお嬢様をバカにするばかりか、悲しませていますね。これはもう黙って見過ごすわけにはいきません、と言いたいところですが、手を出すな、とサイトさんにも言われています」

そしてハヤテは振り向いて、才人に言った。

「サイトさん。邪魔してしまったことは謝ります。僕はどうすればいいですか？」

才人とハヤテは見つめ合った。ルイズは才人を支えながら、ハヤテの真剣な目を見ていた。

「……………俺がやるにきまってるんだろ、ハヤテ。もう絶対、二度と手出すなよ」

「サ、サイト！」

ルイズは叫んだ。しかしハヤテは、才人の目を真つすぐに見て、

「……わかりました、サイトさん。……お嬢様、サイトさんの邪魔になります。離れていきましょう」

「ハ、ハヤテ！」

「ここで僕が場を治めてしまったら、サイトさんは絶対に後悔してしまいます。サイトさんじゃないと意味がないんです」

ハヤテはルイズを説得した。

「………わかったわよ………」

ルイズはハヤテと一緒に才人から離れた。

「………このままだと、僕が悪者みたいじゃないか………」

ギーシュは首を振りながら言った。そして、薔薇の花を振った。

一枚の花びらが才人の方へと飛んで、才人の目の前で剣へと変わり、地面に突き立った。

「君、本当にやる気があるのなら、その剣を取るがいい。口先だけなら、一言こう言いたまえ。ごめんなさい、とね。それで終わりにしようじゃないか」

「ふざけんな、やるつつつたんだ。男に二言はねえ」

才人は剣に左手を伸ばした。腕が折れているからか、力が入らな

い。

「サイト！」

ルイズが叫んだ。

「ルイズ、見てろ。お前をバカにした奴は……この俺が叩つ斬る」

才人は力を振り絞って、左手で剣を握った。

そのとき……………。

才人の左手に刻まれたルーンが、光りだした。

？

所変わって、ここは学院長室。

ミスタ・コルベールは、興奮しながらオスマン氏に説明していた。

春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の少年を2人も呼び出してしまったこと。

ルイズがその少年たちと『契約』した証明として現れたルーン文字が気になったこと。

それを調べていたら……………。

「始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』に行き着いた、というわけじゃね？」

オスマン氏は、コルベールが描いた才人とハヤテの手に現れたルーンのスケッチをじっと見つめた。

「そうです！あの少年たちの左手に刻まれたルーンは、伝説の使い魔『ガンダールヴ』に刻まれていたモノとまったく同じであります！ただ………」

「ただ………？」

「先ほどお見せした『始祖ブリミルの使い魔たち』の『ガンダールヴ』の記述について……前半の方はなんとか読めるのですが、後半の方は汚れてしまったのか……わからなかったのです」

コルベールは冷や汗を拭きつつ、言った。

「たしかに……そのようじゃな」

オスマン氏も書物のその部分を見つめる。

「しかし、これだけは間違いありません！あの少年たちは『ガンダールヴ』です！これが大事じゃなくてなんなのですか！オールド・オスマン！」

コルベールは再び勢いを取り戻してまくし立てた。

「ふむ……。たしかに、ルーンが同じということは、ただの平民だ

ったその少年たちは、『ガンダールヴ』になった、ということになるんじゃないかな」

「どうしましょう」

「しかし、それだけでそう決め付けるのは、早計かもしれん」

「それもそうですな」

オスマン氏は書物とスケッチのルーンをじっと見つめていた。

そのとき、ドアがノックされた。

「誰じゃ？」

扉の向こうから、ミス・ロングビルの声が聞こえてきた。

「ロングビルです。オールド・オスマン」

「なんじゃ？」

「ヴェストリの広場で、決闘している生徒がいるようで、大騒ぎになっていきます。止めに入った教師がいましたが、生徒たちに邪魔されて止められないようです」

「まったく、暇をもてあました貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい。で、誰が暴れておるんじゃないかね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「あの、グラモンとこのバカ息子か。オヤジも色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじゃ。おおかた女の子の取り合いじゃろう。相手は誰じゃ？」

「……………それが、メイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の黒髪の少年のようです」

オスマン氏とコルベールは顔を見合わせた。

「教師たちは、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めております」

オスマン氏の目が鋭く光った。

「アホか。たかが子供のケンカを止めるのに、秘宝を使ってどうするんじゃ。放っておきなさい」

「わかりました」

ミス・ロングビルが去っていく足音が聞こえた。

コルベールは唾を飲み込んで、オスマン氏を促した。

「オールド・オスマン」

「うむ」

オスマン氏は、杖を振った。壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリの広場の様子が映し出された。

「そのルーンが真のものか、見極めさせてもらおうかの」

？

才人は驚いていた。剣を握った瞬間、体の痛みが嘘のように消えた。

自分の左手のルーンが光っていることに気づく。

そして……

体が羽のように軽い。まるで飛べそうだ。

その上、左手に握った剣が、自分の体の延長のようにしっくりと馴染んでいる。

不思議だ。剣なんか握ったこともないのに。

離れて見ていたハヤテも驚いた。才人ほどではないが、ハヤテの左手のルーンも薄く輝いている。

隣にいたルイズも、口を開けてハヤテの左手と才人を交互に見ていた。

剣を握った才人を見て、ギーシュは冷たく微笑んだ。

「まずは褒めよう。ここまでメイジに楯突く平民がいることに、素直に感激しよう」

そして、手に持った薔薇を振った。倒れていたゴーレムが立ち上がる。

あの薔薇の造花が魔法の杖らしい。どこまでもキザな奴だ。

そんなことを考える余裕があることに気づく。

息が詰まるほど苦しかったはずなのに、いったい、俺はどうしたんだよ…。

ギーシュのゴーレムが襲い掛からんと迫ってくる。青銅の塊、戦乙女ワルキューレの姿をした像がゆっくりとした動きで、才人に向かってくる。

なんだよ、と思った。

あんなトロい奴に、今までいいようにあしらわれていたのか。

才人は駆け出した。

自分のゴーレムが、粘土のように才人に切り裂かれるのを見て、ギーシュは驚愕の表情になった。

ぐしゃっと音を立てて、真っ二つになったゴーレムが、地面に落ちる。

同時に、才人はギーシュめがけて疾風はやてのように突っ込んだ。

ギーシュは慌てて薔薇を振った。花びらが舞い、新たなゴーレムが6体現れる。

全部で7体のゴーレムが、ギーシュの得意な魔法である。1体しか使わなかったのは、それには及ばない、と才人をナメていたからだ。

ゴーレムが才人を取り囲み、一斉に踊りかかった。

そして、一気に押しつぶす……、かに見えた瞬間、5体のゴーレムがバラバラに切り裂かれる。

振る剣がまったく見えない。速い。あんな風に剣を振れる人間がいるなんて思えない。

とっさに残りの1体をギーシュは盾に置いた。

次の瞬間、その最後のゴーレムもなんとなく切り裂かれる。

「ぶふっ……………！」

ギーシュは顔面に蹴りを食らって吹っ飛び、地面に転がる。杖もあらぬ方へと飛んでいった。

才人が自分めがけて猛スピードで突進してくるのが見えた。

「ひいっ…！」

思わずギーシュは頭を抱えた。

ザツと音がして……………、恐る恐る目を開けると……………。

才人が、剣をギーシュの目の前、数ミリの所へ突きつけていた。

「まだ、続けるか？」

才人は呟くように言った。

ギーシュは首を振る。完全に戦意を喪失していた。

震えた声で、ギーシュは言った。

「ま……………、参った」

才人は剣を投げ捨て、歩き出した。

あの平民、やるじゃないか！とか、ギーシュが負けたぞ！とか、見物していた連中からの歓声が届く。

勝った……………、のか？

才人はぼんやりと思った。

……………俺はいつたい、どうしたんだろう。

最初はただやられるだけだったのに…。

それが、剣を握った瞬間、体が羽にでもなったように感じた。気づいたら、ギーシュのゴーレムをすべて切り裂いていた。

俺って、剣なんか使えたっけ…？

わからない。でもまあ、とにかく勝ったんだから、よしとしよう。なんだか、どっと疲れたし、後で考えよう。今はとにかく休みたい。

ルイズと、少し遅れてハヤテが駆け寄ってくるのが見えた。

おーい、勝ったぞ、と言おうとしたら、膝が抜けた。

重い疲労感が体を襲う。意識が急に遠くなって、才人は倒れた。

いきなり倒れかけた才人の体を、駆け寄ったルイズは支えようとしたが、うまくいかなかった。2人揃って倒れそうになったが、追いついたハヤテが受け止める。

「ハヤテ……」

「お疲れさまです、サイトさん」

ハヤテは才人に声をかけたが、返事がない。

「サイト、サイト！」

ルイズは才人の体を軽く揺すった。死んではないようだ。

「ぐ……」

いびきが聞こえてくる。寝ているらしい。

「ね、寝てるし……」

ルイズは、ほっとした表情で溜息をついた。

「はは……」

ハヤテは笑った。ふと自分の左手を見ると、もうルーンは光っていなかった。なんだったんだろう。

ギーシュが立ち上がって、首を振る。

「ルイズ、彼らは何者なんだ？この僕の『ワルキューレ』を倒すなんて……」

「ただの平民でしょ」

「ただの平民に、僕のゴーレムが負けるなんて思えない」

「ふんだ。あんたが弱かっただけじゃないの？」

「お嬢様、サイトさんを治療しなくては……」

ハヤテが才人を背負いながら、ルイズに言った。

「そうね、わたしの部屋に運びましょう」

ルイズと才人を背負ったハヤテは、ルイズの部屋へと向かった。

「ルイズをバカにすることだけは許せねえってよ……。俺も同じなんだよ……。ルイズは俺の大事なご主人様だから……」

部屋へ戻る途中、ルイズは才人が言ったことを思い出していた。

（サイトは、自分のためだけじゃない……わたしのためにも、決闘を受けた……こんな、わたしなんかのために……）

ルイズは顔が熱くなるのを感じた。

（な、なに考えてるのよ！わたしったら……）

ルイズはぶんぶんとう首を振った。

？

オスマン氏とコルベールは、『遠見の鏡』で一部始終を見終えると、顔を見合わせた。

コルベールは震えながらオスマン氏の名前を呼んだ。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民の少年、勝ってしまいましたが……」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低い『ドット』メイジですが、それでも

ただの平民に後れをとるとは思えません。それにあの動き！あんな平民は見たことがない！やはり彼は、いや、彼らは『ガンダールヴ』！」

「うむむ……………」

コルベールはオスマン氏を促した。

「オールド・オスマン。すぐに王室に報告して、指示を仰がないことには……………」

「それには及ばん」

オスマン氏は、重々しく頷いた。白いひげが、厳しく揺れる。

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に甦った『ガンダールヴ』！」

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではない」

「そのとおりです。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』。その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在、と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、その強力な呪文ゆえに、詠唱の時間が長かった。知っての通り、詠唱時間中のメイジは無力じゃ。そんな無力な間、己の身を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』じゃ。その強さは……………」

「千人もの軍隊を1人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並

のメイジではまったく歯が立たなかつたとか！現代に蘇つた『ガン
ダールヴ』は、それが2人も！」

「で、ミスタ・コルベール」

「はい」

「その少年たちは、本当にただの人間だつたのかね？」

「はい。どこからどう見ても、ただの平民の少年でした。ミス・ヴ
アリエールが呼び出した際に、念のため『ディテクト・マジック』
で確かめたのですが、真正正銘、ただの平民の少年でした」

「そんなただの少年たちを、現代の『ガンダールヴ』にしたのは誰
なんじゃね？」

「もちろん、ミス・ヴァリエールですが……」

「彼女は、優秀なメイジなのかね？」

「いえ、というか、むしろ……魔法はまったく出来ないというか……」

「さて、謎が多いのう」

「ですね……」

「無能と言つても過言ではないメイジと契約したただの少年が、な
ぜ『ガンダールヴ』になつたのか。しかも2人も。そして、この書
物の『ガンダールヴ』の記述。私は読めないこの部分には、まだな
にか隠された秘密があるように思えてならん」

「そうですね……」

「とにかく、王室のボンクラどもに、『ガンダールヴ』とその主人を渡すわけにはいくまい。そんなオモチャを与えてしまつては、またぞろ戦でも引き起こすじゃろうて。宮廷で暇をもてあましている連中はまったく、戦が好きじゃからな」

「ははあ、学院長の深謀には恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ、ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

オスマン氏は、杖を握ると窓際へ向かった。そして、遠い歴史の彼方へと想いを馳せる。

「伝説の使い魔『ガンダールヴ』か……。いったい、どのような姿をしておつたのだらうなあ」

コルベールは夢見るように呟いた。

「『ガンダールヴ』は、あらゆる『武器』を使いこなし敵と対峙した、とありますから……」

「ふむ」

「とりあえず、腕と手はあつたんでしょうなあ」

第九話 ガンダールヴ（後書き）

キャラ・作者対談

ハヤテ（以下ハ）：えーと、今回はサイトさんが倒れてしまったので、

お休みだそうです。

ルイズ（以下ル）：使い魔のくせに勝手なことするからよ……。

ギーシュ（以下ギ）：それにしても、彼は本当に強かったね…

ル：だから、あんたが弱かっただけでしょ？

ギ：そんなはずはない！しかし、彼の人間とは思えないあの速さ、

本当に不思議な平民だな…

ハ：そういえば、サイトさんが剣を握った瞬間から、

彼と僕の左手が光ってましたね……。

ル：そうね、使い魔としての能力ってことなのかしら？

ギ：そ、そうだったのかい？

うーん、僕は敵に塩を送ってしまったようだね…

ハ……あのときも言いましたが、丸腰の相手に魔法なんて、

『決闘』になってないですよ……。

ギ……そう言われたら、僕はもう何も言えないな……

彼には後で貴族として謝っておくよ。

ル……意外ね、あんたが平民相手に謝るなんて。

ギ……なにせ、僕を倒した男だ。礼儀を尽くすのは当然さ。

ハ……思ったよりいいところもあるんですね……。

ギ……失敬な。僕だってそれくらいの分別はつくさ。

あ、そうだ、君たちにも謝らなくてはね。

ルイズ、君を『ゼロ』などと呼んで悪かったよ。

許してくれとは言わない。

すまなかつたね。

ル……なによ、急に……もういいわよ。

ハ……もう二度とお嬢様をそう呼ばないでくださいね。

ギ……ああ、約束するよ。水色の使い魔君。

ハ：………できれば、ハヤテと呼んでくれませんか？

ギ：そうかい？ならば、名前で呼ぼう。

これからよろしく頼むよ、ハヤテ。

ハ：はい、よろしくお願ひします、ギーシュさん。

ル：（これでよかったのかしら……？）

作者（以下作）：おーい、僕を忘れないでくれ……

ル・ハ・ギ：あ、いたんだ。

作：いたよ、最初から！

だんだん僕が存在が希薄になってきてないか？

僕は作者なんだよ？

ル：だって、別に対談にまで出てこなくていいわよ。

ハ：そうですね。別に作者がいなくて困るようなこともないですし。

ギ：まったく、その通りだね。

作：お前ら………

次の話に困ってるのに、このひどい扱いはなんなんだ！

ハ：え、困ってるんですか？

作：ああ、決闘が終わって一段落したから、

次は何を持ってくるか悩んでいてな……

ギ：原作だと……キュルケの誘惑、武器の購入……と続くようだね。

ル：キュ、キュルケですって！

作：キュルケの場面入れようか入れまいかとも迷ってるんだ……

ル：NO、キュルケ！ダメ、ゼツタイ！

ハ：なんだか、麻薬禁止の広告みたいですね……

ギ：ルイズは本当にキュルケが嫌いなようだね……

ル：だって……あの女は……

作：……ここで言うな！ネタがなくなるだろ！

ル：……う……

作：ま、キュルケはおいといて、

武器の購入は避けては通れないから入れるつもりだけど……

ハ：……だけど……どうしたんですか？

作：ハヤテ、お前の武器がどうも決まらないんだよな…

ハ：僕の武器？

作：サイトには原作どおりあいつを持たせるつもりなんだが、

ハヤテが武器主体で戦うってのが、イメージしにくいんだ…

ハ：言われてみれば、そうですね……

僕は、ほとんど体術で戦っているような気がします……

ギ：体術を中心に出来そうな武器というのはないのかい？

作：たぶん…あるとは思いが……あとで調べてみるよ……

ハ：なんだか嫌な予感がします……

はい、次回は正直未定です。

キュルケの話を抑えるならば、武器屋の話となる予定です。

ユニークアクセスが3000人を超え、

ますます嬉しい作者でございます。

今後ともよろしく願います！

では、
また次回。

第十話 宝物庫（前書き）

はい、第十話です。

予定と内容が変わってしまいました…。

次回に武器屋の話を持ってくる予定です。

キャラ・作者対談もあります。

では、どうぞ。

第十話 宝物庫

第十話 宝物庫

朝の光で、才人は目を覚ました。腕や上半身に包帯が巻かれている。

そうだ。

自分は、あのキザなギーシュと決闘して、最初はただ叩きのめされて……。

それから、なぜか剣を握ったら逆転して……。

気絶したのだ。

ルイズの部屋だった。自分はどうかやらルイズのベッドで寝ているようだ。

ルイズは椅子に座り机に突っ伏して寝ていた。

ハヤテは今どこかへ出ているようだ。姿が見えない。

ふと左手のルーンを見る。このルーンが光りだしたら、自分の体が羽みたいに動き、体の延長のように握ったこともない剣が動き、ギーシュのゴーレムを切り裂いたのだった。

左手のルーンは、今は光っていない。

なんだっただらう。

そんな風に左手を見つめると、ノックがあつて、ドアが開いた。

ハヤテだった。手には銀のトレイを持っている。

ハヤテは才人が起きているのを見ると、微笑んだ。銀のトレイの上にはパンと水が乗っていた。

「ハヤテ……」

「お目覚めですか？ サイトさん」

「ああ……、俺……」

「あれから、僕がサイトさんをここまで運んで寝かせた後、お嬢様が先生を呼んで、『治癒』の呪文とこのをかけていただきました。結構大変だったんですよ」

「『治癒』の呪文……？」

「はい。お嬢様と先生にお尋ねしたところ、怪我や病気を治す魔法だそうです。魔法ってすごいですね」

「なるほど……」

才人も素直に感心した。折れていたはずの腕はもう骨がくっついてるようだ。

「治癒の呪文のための秘薬の代金は、お嬢様が出しておられました。安心してください」

「そんなにかかるの？秘薬の代金って…」

「平民に出せるような金額ではないそうですよ」

才人は立ち上がろうとして、うめいた。

「あいだっ！」

「あ、まだ動いたらダメです！骨折もしてましたし、治癒の呪文でも完璧には治せていないそうですから…。ちゃんと寝てください！」

才人は頷いて、ベッドに寝転んだ。

「食堂で、シエスタさんからお食事をいただいできました。食べられますか？」

ハヤテは銀のトレイを才人の枕元に置いた。

「ありがとうございます……。ハヤテ、俺……。どのくらい寝てたんだ？」

「三日三晩、ずっと寝続けてました。僕もですが、お嬢様もとても心配なさっていましたよ」

「そうか、ルイズが……」

「お嬢様、サイトさんの包帯を取り替えたり、顔を拭いてあげたり……。ずっと寝ないで看病なさっていましたが、お疲れになったみたいですね」

ルイズは柔らかい寝息を立てている。長いまつげの下に大きな隈ができている。

相変わらず寝顔は可愛い。人形みたいだ。

やっぱり優しいところあるんだな、と思ったら、急にその横顔が激しく可愛く見えた。

「……そういえば、あの決闘の後、シエスタさんが感激なさっていましたよ。『平民でも貴族に勝てるんだ、って勇気をもらいました！』っておっしゃってました」

「そうか……」

才人は照れくさくなった。

そうして話していると、ルイズが目を覚ました。

「ふあああああああ」

大きなあくびをして、伸びをする。それから、ベッドの上で目をぱちくりさせている才人に気づいた。

「あら、起きたの。あんた」

「う、うん……」

「怪我は大丈夫なの？」

「あ、ああ、まだ少し痛いけど……だいぶ治ったみたいだ」

「そう……」

才人は顔を伏せた。お礼を言おうと思った。

「その……ルイズ……」

「なによ」

「ありがとう。あと、心配かけてごめん」

ルイズは目をこすってから言った。

「あたりまえじゃないの。あんたは、わたしの『使い魔』なんだから」

「そうか……」

才人とハヤテは、その言葉に微笑んだ。

？

次の日には、才人は全快していた。

ルイズとハヤテは、そのことにほっと安心して喜んでくれた。

久しぶりに部屋を出て、3人で朝食へ向かう途中、ルイズが言った。

「あんたは寝てたから、ずっとハヤテとだけだったんだけど、今日からあんたも食堂の席で食べてもいいわ」

「……え？いいのか？」

才人は思わず聞き返した。

「ええ。ちゃんと学院長の許可もいただいているし、さすがにあの食事じゃね……」

ルイズは貧しい食事を思い出して苦笑いする。

「あ、ありがとう、ルイズ！」

才人は嬉しそうに礼を言った。

食堂の席につくと、才人は豪華な料理に目を奪われる。

「やっぱりすげえなあ……」

才人は興奮していた。

「サ、サイトさん……」

ハヤテは苦笑いする。

「ちょっとサイト、マナーは守るのよ」

ルイズがたしなめる。

「う、ごめん…」

才人は謝った。

食事の挨拶をして、食べ始める。

3人が食事を続けていると、同じ二年生のテーブルの向こうから、あのギーシュがやってきた。

そして、才人のそばで立ち止まる。

「君」

「んあ？」

才人は口に入れたものを飲み込む。

「ルイズとハヤテにはもう済ませたのだがね、君はずっと寝ていたようだったから……」

ギーシュはすまなそうに言った。

「なんだよ」

才人はギーシュを睨んだ。

「そ、そんな怖い顔をしないでくれたまえ……。僕は君に謝りに来たんだ」

ギーシュの言葉に、才人は目を丸くした。

「あのとき……、確かに君の言うとおり、すべて僕が悪かったんだ。それを指摘されて、ついカツとなってしまう……。君やルイズをバカにしたことは謝る。許してくれとは言わないが、せめて謝罪の言葉だけは言っておきたいんだ」

ギーシュは頭を下げた。

才人は慌てた。

「お、おい……、いいいいいよ！もう終わったことだろ、頭を上げてくれ……！」

ギーシュはゆっくりと頭を上げた。

ルイズとハヤテも食事の手を止めて、2人を見ている。

「それと……」

ギーシュは少しはにかみながら、手を差し出した。

「この僕を倒した君に、ぜひ友達になってほしいんだ」

「……………」

才人はその手を見つめる。

「……俺は、『キミ』じゃない。『サイト』だ」

そして、握手した。

「ありがとう、サイト」

ギーシュは強く握り返した。

？

ルイズたちが朝食を終えて授業へ向かっている頃……。

学院長室では、秘書のミス・ロングビルが書き物をしていた。

彼女は手を止めると、オスマン氏の方を見つめた。オスマン氏はセコイアの机に伏せて居眠りをしている。

ミス・ロングビルは薄く笑った。誰にも見せたことのない笑みである。

それから立ち上がり、咳くように『サイレント』の呪文を唱える。

オスマン氏を起こさないように自分の足音を消して、学院長室を出た。

ミス・ロングビルが向かった先は、学院長室の一階下にある宝物

庫である。

階段を下りて、鉄の巨大な扉を見上げる。扉には、ぶっとい門がかかっている。門はこれまた巨大な錠前で守られている。

ここには、魔法学院成立以来の秘宝が収められているのだ。

ミス・ロングビルは、慎重に辺りを見回すと、杖を取り出した。鉛筆くらいの長さだが、彼女が軽く振るとするすると伸びて、オーケストラの指揮者が振るような指揮棒くらいの長さになった。

ミス・ロングビルは低く呪文を唱えた。

詠唱を終えると、杖を錠前に向けて振った。

しかし……、錠前からは何の音もしない。

「まあ、ここの錠前に『アン・ロック』が通用するとは思ってないけどね」

くすりと妖艶に笑うと、ミス・ロングビルは自分の得意な呪文を唱え始めた。

それは『錬金』の呪文であった。朗々と呪文を唱え、分厚い鉄のドアに向かって杖を振る。魔法は扉に届いたはずだが……。しばらく待っても変わった所は見られない。

「スクウェアクラスのメイジが『固定化』の呪文をかけているみたいね」

ミス・ロングビルは呟いた。『固定化』の呪文は、物質の酸化や腐敗を防ぐ呪文である。これをかけられた物質は、あらゆる化学反応から保護され、そのままの姿を永遠に保ち続けるのだった。『固定化』をかけられた物質には『錬金』の呪文も効力を失う。呪文をかけたメイジが、『固定化』をかけたメイジの実力を上回れば、その限りではないが。

しかし、この鉄の扉に『固定化』の呪文をかけたメイジは、相当強力なメイジらしい。『土』系統のエキスパートであるミス・ロングビルの『錬金』を受けつけないのだから。

ミス・ロングビルは、ずれたメガネを直し、扉を見つめていた。そのとき、階段を上ってくる足音に気づく。

彼女は杖を縮めてポケットにしまった。

現れたのは、コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここでなにを？」

コルベールは間の抜けた声で尋ねた。ミス・ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべた。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが…」

「はあ…、それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで、一日がかりですよ。何せここにはお宝ガラクタひっくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「」
「」

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

ミス・ロングビルは微笑んだ。

「それが……、ご就寝中なのです。まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……」

「なるほど、ご就寝中ですか。あのエロジジイ、じゃなかった、オールド・オスマンは寝るとなかなか起きませんからな。では、僕も後で伺うことにしましょう」

コルベールは歩き出した。それから、ふと立ち止まり、振り向いた。

「その……、ミス・ロングビル」

「なんででしょう？」

照れくさそうに、コルベールは口を開いた。

「もし、よろしかったら、なんです……。昼食をご一緒にいかがですか？」

ミス・ロングビルは、少し考えた後、にっこりと微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

2人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

ちよつとくだけた言葉遣いになって、ミス・ロングビルが話しかけた。

「は、はい？なんでしょう」

自分の誘いがあっさりを受け入れられたことに気をよくしたコルベールは、跳ねるような調子で答えた。

「宝物庫の中に、入ったことはありませんか？」

「ありますとも」

「では、『破壊の杖』をご存知？」

「ああ、あれは、奇妙な形をしておりますなあ」

ミス・ロングビルの目が光った。

「と、申されますか？」

「説明のしようがありません。奇妙としか。はい。それより、なにをお召し上がりになりますか？本日のメニューは、ヒラメの香草包みですが……。なに、僕はコック長のマルトー殿に顔が利きますから、僕が一言言えば、世界の珍味、美味を……」

「ミスタ」

ミス・ロングビルはコルベールのおしゃべりを遮った。

「は、はい？」

「しかし、宝物庫は立派なつくりですわね。あれでは、どんなメイジを連れて来ても、開けるのは不可能でしょうね」

「そうですね。メイジには、開けるのは不可能かと思います。なんでも、スクウエアクラスのメイジが何人も集まって、あらゆる呪文に対抗できるように設計したそうですから」

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらつしやる」

ミス・ロングビルは、コルベールを頼もしげに見つめた。

「え？いや……。はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多いもので……。研究一筋と申しましょうか。はは、おかげでこの年になつても独身でして……。はい」

「ミスタ・コルベールのおそばにいられる女性は幸せでしょうね。

だって、誰も知らないようなことを、たくさん教えてくださるんですから……」

ミス・ロングビルは、うっとりとした目でコルベールを見つめた。

「いや！もう！からかつてはいけませんよ！はい！」

コルベールはかちこちに緊張しながら、禿げ上がった額の汗を拭いた。それから、真剣な顔で、ミス・ロングビルの顔を覗き込んだ。

「ミス・ロングビル。次のユルの曜日に開かれる『フリッグの舞踏会』はご存知ですか？」

「なんですの？それは」

「ははあ、貴方はここに来てまだ二ヶ月ほどでしたな。その、なんてことはない、ただのパーティです。ただ、ここで一緒に踊ったカップルは、結ばれるとか何とか！そんな伝説がありますよ！はい！」

「それで？」

ミス・ロングビルはにっこりと笑って促した。

「その……、もしよろしければ、僕と踊りませんかと、そういうことで。はい」

「喜んで。舞踏会も素敵ですが、それより、もっと宝物庫について知りたいわ。私、魔法の品々にとっても興味がありますの」

コルベールはミス・ロングビルの気を引きたい一心で、頭の中を探った。宝物庫、宝物庫と……。

やっと、ミス・ロングビルの興味を引けそうな話を見つけたコルベールは、もったいぶって話し始めた。

「では、ちょっとご披露いたしましょう。たいした話ではないのですが……」

「ぜひとも伺いたいわ」

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵ですが、一つだけ弱点があると思うのですよ」

「はあ……………、興味深いお話ですわ」

「それは……………、物理的な力です」

「……………物理的な力？」

「そうですね！例えば、まあ、そんなことはありえないのですが、巨大なゴーレムが……………」

「巨大なゴーレムが……………？」

「コルベールは得意げに、ミス・ロングビルに自説を語った。聞き終わった後、ミス・ロングビルは満足げに微笑んだ。

「大変興味深いお話でしたわ。ミスタ・コルベール」

第十話 宝物庫（後書き）

キャラ・作者対談

サイト（以下サ）：おい、作者。予告と全然違っじゃねーか…。

ルイズ（以下ル）：大事な今回の場面のことを忘れてたなんて、ど
ういうことよ…。

ハヤテ（以下ハ）：おまけに武器の名前、一向に思いつかないって
……

作者（以下作）：返す言葉もございません……

サ・ハ・ル：いいかげんにしろ（しなさい）！

作：……ごめんなさい。

サ：ま、今回は宝物庫ってことだったけど、『破壊の杖』って…な
んだ？

ル：さあ、聞いたことないわね……『破壊』ってつくくらいだから…

すごそうだけど…

ハ：『杖』ってことは…やっぱりマジックアイテムなんでしょうが
ね？

サ・ハ・ル：うーん……

作………。

ハ：ちよつと、作者。なに黙ってるんですか。

作：え？だつて……黙ってないとネタバレになるし……

サ：そりやそうかもしれないけど、それなら別の話振るとかしろよ……

作：ん、えーと、じゃあ、ギーシュの話。

あいつ、原作一巻では決闘以外目だったトコはなかったけど、

決闘終わって何もなしってのは、ちよつとなつて思つて付け加えてみた。

ル：最初の方の仲直りのシーン？

ハ：仲直りというか……和解？

サ：和解……というか……雨降つて地固まる的な？

作：ああ、その部分。ギーシュは根は悪い奴じゃないからな。

どうも憎めないキャラなんだよね。

サ：確かにな。

ル：原作では2巻からレギュラー入りつて感じよね。

作：ああ、そうだな。このゼロ魔のごとくは原作で言つと、

やっと1巻の半分くらいってトコだけど。

ハ：遅いですね……

作：悪かったな。僕だって一生懸命なんだよ。

夜中にノート開いて、右手にシャープペン、左手にうまい棒握つて……

ル：うまい棒って……

サ：ハ：なつかしいな、うまい棒か……

作：でももう尽きちゃった。

サ：どんだけうまい棒食ってただよ……

作：『うまい』からね。

ハ：体壊して更新滞らせないでくださいよ。

作：わ、わかってるよ……。

サ：で、次回は武器屋って言うってたな。

ハ：まだ僕の武器の名前決まってるのに？

作：意見が来なかったら……必死で考えるよ。

ハ：頼みますよ……。

ル：大丈夫かしら……。

はい、今回は武器屋でございます。

ハヤテの武器は一応決まったのですが、

その名前がまだ決まっておりません。

活動報告にて募集もしているのですが…

未だに一通も来ておりません…。

とにかく、なんとかかひねくり出したいと思います。

案があれば、至急その意見をお寄せください！（かなり必死）

募集は終了しました。

では、また次回。

第十一話 武器屋（前書き）

はい、十一話です。

遅くなってしまいました。

今までで一番長くなってしまい、

もつどうにも止まらなくなってしまったのです。

ついにハヤテの武器が決まりました。

本編にてどうぞ。

キャラ・作者対談もあります。

では、お楽しみください。

第十一話 武器屋

第十一話 武器屋

次の日の朝、食堂で朝食をとりながら、ルイズは才人とハヤテへ言った。

「昨日言ったとおり、今日は出かけるわよ」

「ああ、わかってる」「はい、お嬢様」

2人は頷きながら、昨日の夜を思い出す。

昨日の夜、就寝前……………。

「ねえ、2人とも。明日は虚無の曜日だから、街へ行って武器を買ってあげるわ」

「え……………?」「」

2人は首をかしげた。

「な、なんで急に……………」

「あなた、この前ギーシュと決闘した時、自在に剣を振ってたじゃない。これから身を守るってことも必要かもしれないし、なにか武器を買ってあげるって言ってるの。もちろん、ハヤテもね」

「は、はあ……………」

2人は曖昧に返事をした。

「で、でもよ……。俺、剣なんか握ったこともなかったんだ。なんであんなに振れたのか、わかんねえんだけど……………」

才人は自分の手を見つめて言った。

「ああ、そのことなら、あんたが寝てる間に、ハヤテとも話してただけ、もしかしたら使い魔としての能力がもしれないわ」

「使い魔としての能力？」

「そうよ。猫なんかを使い魔にすると、人の言葉をしゃべったりとかね。人を使い魔にしたって話は聞いたことないし……。だから、剣を握ったことのないあんたが、自在に操れるようになっても不思議じゃないかもね」

「ふ〜ん……………」

「僕の左手の印も光っていましたが……、きっとサイトさんと同じ能力を持っているのでしょうかね」

ハヤテも左手を見つめて言った。

「たぶん、そうね。ま、とにかく、明日は街へ出かけるわよ」

「わかったよ」「はい、了解しました」

そうして、3人は眠りについたのだった。

？

時は戻って、朝食を終えた3人は馬を借りて、王都へと向かった。

3人が魔法学院の門を出て行くのを、火の塔から見ている者がいた。

キュルケである。

彼女は、先日の才人とギーシュの決闘を見物していた生徒の中にいた。

才人がギーシュを倒した時、彼女は情熱という衝撃に震えたのだった。

まあ、一言で言えば、一目惚れである。

彼女は、まるで伝説のイーヴァルディの勇者だわ、と恋歌までつぶっていた。

休日である虚無の曜日に、朝早く目覚めた彼女は化粧をしながら、どうやって才人を口説こうか、と考えていた矢先、学院を出て行く3人が見えたのである。

「なによ、出かけるの？」

キウルケはつまらなさそうに呟いた。

それから、ちよつと考えて部屋を飛び出した。

？

タバサは、寮の自分の部屋で、読書を楽しんでいた。青みがかつた髪と、ブルーの瞳を持つ彼女は、メガネの奥の瞳をキラキラと輝かせて本の世界に没頭していた。

彼女は虚無の曜日が好きだった。なぜなら、自分の世界に好きなだけ浸っていられるからである。彼女にとっての他人は、自分の世界に対する無粋な闖入者である。数少ない例外に属する人間でも、よほどのことがない限り、うつつうしく感じるのであった。

その日も、どんどんとドアが叩かれたので、タバサはとりあえず無視した。

そのうちに、激しく叩かれ始めた。タバサは立ち上がらずに、めんどくさそうに小さな唇を動かしてルーンを呟き、机に立てかけてあった自分の身長より大きい杖を振った。

『サイレント』、風属性の魔法である。タバサは風属性の魔法を得意とするメイジなのだ。『サイレント』によって、彼女の集中を妨げるノックの音は消え去った。

タバサは満足して再び本に向かった。その間、表情はぴくりとも変わらない。

しかし、ドアは勢いよく開かれた。タバサは闖入者に気づいたが、本から目を離さなかった。

入ってきたのは、キュルケだった。彼女は二言、三言、何かを喚いたが、『サイレント』が効果を発揮して、その声はタバサに届かない。

キュルケはタバサの本を取り上げた。そして、肩をつかんで自分の方へ振り向かせる。タバサは無表情にキュルケを見つめていた。その顔からは、いかなる感情も窺えないが、歓迎していないことは確かだった。

しかし、入ってきたのはキュルケである。タバサの親友である。これが他の相手なら、『ウィンド・ブレイク』でも使って吹き飛ばす所なのだが、キュルケは数少ない例外の内の1人であった。

しかたなく、タバサは『サイレント』を解いた。

いきなりスイッチを入れたオルゴールのように、キュルケの口から言葉が飛び出した。

「タバサ、今から出かけるわよ！早く支度をしてちょうだい！」

タバサは短くぼそつとした声で、自分の都合を親友に述べた。

「虚無の曜日」

それで十分である、と言わんばかりに、タバサはキュルケの手から本を取り返そうとした。キュルケは高く本を掲げた。背の高いキ

キュルケがそうするだけで、タバサの手は本に届かない。

「わかってる。あなたにとって虚無の曜日がどんな日だか、あたしは痛いほどよく知ってるわよ。でも今はね、そんなこと言ってもらえないの。恋なのよ、恋！」

それで分かるでしょ？と言わんばかりのキュルケの態度であるが、タバサは首を振った。キュルケは感情で動くが、タバサは理屈で動く。どうにも対照的な2人である。そんな2人だが、なぜか仲がよい。

「そう、それもわかってる。あなたは説明しないと動かないのよね。ああ、もう！あたしね、恋したの！でね、その人が今、あのにっくいヴァリエールと出かけたの！あたしはそれを追って、どこに行っただかを突き止めなくちゃいけないの！わかった？」

タバサは首を振った。それでどうして自分に頼むのか、理由が分からなかった。

「出かけたのよ！馬に乗って！あなたの使い魔じゃないと追いつかないのよ！助けて！」

キュルケはタバサにすがりついた。

タバサはやっと頷いた。自分の使い魔じゃないと追いつかないるほど、と思った。

「ありがとう！じゃ、追いかけてくれるのね！」

タバサは再び頷いた。キュルケは親友である。その親友が自分に

しか解決できない頼みを持ち込んだ。ならば仕方がない。面倒だが、受けるまでである。

タバサは窓を開け、口笛を吹いた。

それから、窓枠によじ登り、外に向かって飛び降りた。

何も知らない人間から見たら、おかしくなったとしか思えない行為だが、キュルケはまったく動じずに、タバサに続いて窓から外に身を躍らせた。ちなみに、タバサの部屋は5階である。

タバサは、外出の際にあまりドアを使わない。こっちの方が早いからである。

落下する2人をその理由が受け止めた。

ばっさばっさと力強く両の翼を陽光にはためかせ、2人をその背に乗せて、ウィンドドラゴンが飛び上がった。

「いつ見ても、あなたのシルフィードは惚れ惚れするわね」

キュルケが突き出た背びれにつかまり、感嘆の声を上げた。

そう、タバサの使い魔は、ウィンドドラゴンの幼生なのであった。

タバサから風の妖精の名を与えられた風竜は、寮塔に当たって上空へ抜ける上昇気流を器用に捕らえ、一瞬で二百メートルも駆け上った。

「どっち？」タバサが短く尋ねる。

キュルケが、あ、と声にならない声を上げた。

「わかんない……。慌ててたから……」

タバサは別に文句をつけるでなく、シルフィードに命じた。

「馬三頭。食べちゃダメ」

シルフィードは、きゅい、と短く鳴いて了解の意を主人に伝えると、青い鱗を輝かせ、力強く翼を振り始めた。

高空に上り、その視力で馬を見つけるのである。草原を走る馬を見つけることなど、この風竜にとっては容易い事だった。

自分の忠実な使い魔が仕事を開始したことを認めると、タバサはキュルケの手から本を奪い取り、尖った風竜の背びれを背もたれにしてページをめくり始めた。

？

トリスティンの城下町を、ルイズと才人、ハヤテは歩いていった。魔法学院からここまで乗ってきた馬は、街の門のそばにある駅に預けてある。才人は腰が痛くてたまらなかつた。なにせ、生まれて初めて馬に乗ったのである。

「腰……いてえ……」

そうぼやきながら、ひよこひよこと歩く。

「だ、大丈夫ですか、サイトさん……？」

ハヤテは心配そうだ。

ルイズはしかめっ面で見つめた。

「情けない……。馬にも乗ったことないなんて……」

「うっせえ。そんな奴を三時間も馬に乗せるな」

「まさか、歩くわけにもいかないでしょ」

才人は腰をさすりながらも、物珍しそうに辺りを見回した。

ハヤテも道端の露店を見つめている。

のんびり歩いたり、急いでいる人がいたり、老若男女取り混ぜ歩いている。その辺は2人の元いた世界とあまり変わらないが、道がとても狭い。

「せ、狭いですね……」

「狭いって、これでも大通りなんだけど」

「これですか？」

道幅は五メートルもない。そこを大勢の人が行き来するものだから、歩くのも一苦労である。

「ブルドンネ街。トリステインで一番大きな通りよ。この先にトリステインの宮殿があるの」

ルイズはそう言いながら、さらに狭い路地裏に入っていった。悪臭が鼻につく。ゴミや汚物が道端に転がっている。

「汚いな……」

「だから、あんまり来たくないのよ」

3人は十字路に出た。ルイズは立ち止まると、辺りをきよろきよろと見回した。

「ピエモンの秘薬屋の近くだったから、この辺なんだけど……」

それから、一枚の銅の看板を見つけ、嬉しそうに呟いた。

「あ、あつた」

見ると、剣の形をした看板が下がっていた。そこがどうやら武器屋らしい。

3人は石段を上り、羽扉を開け、店の中へ入っていった。

店の中は昼間だというのに薄暗く、ランプの灯りがともっていた。壁や棚に所狭しと剣や槍が乱雑に並べられ、立派な甲冑が飾っていた。

店の奥で、パイプをくわえていた五十がらみの親父が、入ってきた。

たルイズを胡散臭げに見つめた。紐タイに描かれた五芒星に気づく。それからパイプを離し、どすの聞いた声を出した。

「旦那。貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさあ。お上に目を付けられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや」

「客よ」ルイズは腕を組んで言った。

「こりやおったまげた。貴族が剣を！おったまげた！」

「どうして？」

「いえ、若奥様。坊主は聖具をふる、兵隊は剣をふる、貴族は杖をふる、そして陛下はバルコニーからお手をおふりになる、と相場は決まっておりますんで」

「使うのはわたしじゃないわ。使い魔よ」

「なるほど。昨今は貴族の使い魔も剣をふるようで」

主人は商売つ気たつぷりにお愛想を言った。それから、才人とハヤテをじろじろ眺めた。

「剣をお使いになるのは、このお二方で？」

「そうよ。別に剣に限ったわけでもないけど」

ルイズは頷いた。才人はすっかり、店に並んだ武器に夢中だった。うわ、すげ、これなにー、とか口の中でぶつぶつ呟きながら、剣に見入っている。

ハヤテはそんな才人を、

「サ、サイトさん、あんまり乱暴に扱っちゃダメですよ……」

といつものように注意していた。

ルイズはそんな2人をとりあえず無視して言った。

「わたしは武器のことなんか分からないから、適当に選んでちょうだい」

主人はいそいそと奥の倉庫へと消えた。彼は聞こえないように、小声で呟いた。

「……こりゃ、鴨がネギしょってやって来たわい。せいぜい、高く売りつけるとしよう」

主人は大きくて立派な剣を油布で拭きながら、倉庫から出てきた。

「これなんかいかがでしょう？」

見事な剣だった。1・5メートルはあるつかという大剣だった。柄は両手で扱えるように長く、立派な拵えである。所々に宝石が散りばめられ、鏡のように両刃の刀身が光っている。見るからに切れそ
うな、頑丈な大剣だった。

「店一番の業物でさ。貴族のお供をさせるなら、このくらいは腰から下げてほしいものですな。と言っても、こいつを腰から下げるのは、よほどの大男でないと無理でさあ。やっこさんなら、背中にし

「よわんといかんですな」

才人とハヤテも近寄ってきて、その剣を見つめた。

「すげえ。この剣すげえ」

一瞬で欲しくなってしまうた。なんとも見事な剣である。

「…そういやあ、最近、このトリステインの城下町を、盗賊が荒らしておりましてなあ…」

主人は突然話し始めた。

「盗賊？」ルイズが聞き返した。

「そうでさ。なんでも、『土くれ』のフーケとかいう、メイジの盗賊が、貴族のお宝を散々盗みまくってるって噂で。貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末で。へえ」

「それで？」

「へえ、ですから、賊に用心するためにも、このくらいの立派なものを持っていただければと、そういうことで。へえ」

「なるほどね」

ルイズはその話を聞いて、これでいいだろうと思った。店一番と親父が太鼓判を押したのも気に入ったし、才人も気に入っているようである。

「おいくら？」ルイズは尋ねた。

そのとき……

「ちょっと待ってください、お嬢様」

ハヤテが呼び止めた。

「どうしたの、ハヤテ？」 「なんだよ……？」

ルイズと才人は頭に？を浮かべている。

「店主さん。その剣、戦闘には使えませんよね……？」

ハヤテは尋ねた。

「え………？い、いや、何を言う！お前みたいな坊主が、勝手なこ
とぬかすな！」

主人は一瞬ドキツとしながらも、怒鳴った。

しかし、ハヤテは笑顔で言う。

「一目で分かりました。これは、装飾用の剣です。全然鍛えられた
ものじゃない。戦いに使うには、まったくのナマクラです」

ルイズと才人は呆然としながら見ている。

「そ、それ以上言うと………営業妨害だぞ！」

店主はやはり怒鳴った。しかしハヤテは、その剣を片手で取り上げ、腰をかがめるように足を構えた。

「この剣をこのまま蹴れば、あっけなく粉々になると思いますよ」
その言葉に主人の顔色が変わった。

「や、やめる……。お、俺が悪かった……。それを壊されたら……」

ハヤテは、そのままその剣を、カウンターに戻した。

「まあ、装飾品としてはそこそこの価値はあるでしょうから、大事にとっておいてください」

その言葉に、店主は安堵の表情になった。

すると……。

『おでれーた……。一発でナマクラと見破るなんざ、たいした坊主だ』

乱雑に積み上げられた剣の中から声がした。低い男の声だった。

『そうね。でも、そっちの黒髪のボウヤは……剣を振るなんて出来るのかしら？』

今度は樽に適当に刺さった武器の中からも声がした。大人の女性の声だった。

3人は声のした方を向いた。主人が頭を抱えた。

『そのとーりだな……。おい、その黒い方の坊主。その体で剣を振る？おでれーた！冗談じゃねえ！おめえにや棒つきれがお似合いさ！』

「なんだと？」

才人はいきなり悪口を言われたので、腹が立った。しかし、声の聞こえてくる方には人影はない。ただ、武器が並んでいるだけである。

「だ、誰ですか？」

才人とハヤテは声のする方へ近づいた。

『おめえらの目は節穴か！』 『あたしはここだよ！』

才人とハヤテは思わず後じさった。

なんと、声の主は一本の剣と一对の棒のような武器だった。どちらも錆が浮いたり汚れたりして

ボロボロであるが、たしかにそこから声が発されているのであった。

「剣がしゃべってる！」才人は叫んだ。

「じ、これって…、ト、トンファー？」

ハヤテは樽に刺さっていた二本で一つの武器を見つめた。

2人がそう言うと、店主が怒鳴り声を上げた。

「やい！デル公！ラーズ！お客様に失礼なことを言うんじゃないよ！」

「デル公？」 「ラーズ？」

才人もその剣をまじまじと見つめた。剣は先ほどの大剣と長さは変わらないが、刀身が細かった。薄手の長剣である。ただ、表面には錆が浮き、お世辞にも見栄えがいいとは言えなかった。

トンファーの方はというと、長さは肘から指先より少し長めで、端から十数センチくらいの所に垂直に持ち手がついている。こちらも薄汚れていて、見栄えがよろしくない。

『お客様？剣もまともに振れなさそうなボウヤが、お客様だっというのかい？ふざけんじゃないよ！』

『おーともよ！耳をちょん切ってやらあ！こっち来い！』

「それって……インテリジエンスウエポン？」

ルイズは当惑した声を上げた。

「そうでさ、若奥様。意思を持つ武器、インテリジエンスソードとインテリジエンストンファーでさ。いったい、どこの魔術師が始めたんでしょうねえ……、武器をしゃべらせるなんて……。とにかく、こいつらはやたらと口が悪いわ、客にケンカは売るわで閉口してまして……。やい、お前ら！これ以上失礼があったら、貴族に頼んで火の中にぶち込んでやるからな！」

『おもしれえ、やってみろ！どうせもつこの世にゃ、飽き飽きしてた所さ！』

『溶かしてくれるってんなら、上等だよ！』

「やってやらあ！」

主人が歩き出した。しかし、才人とハヤテは、それを遮る。

「もつたいないよ。しゃべる剣なんて面白いじゃん」

「そうですね。手入れさえすれば、まだ使えると思いますし」

それから2人は、それぞれの武器を見つめた。

「お前、デル公っていつのか」

『ちがわ！デルフリンガー様だ！覚えとけ！』

「あなたは……、何とおっしゃるんですか？」

『あら……、こっちは紳士なボウヤね……。あたしは、ラーズスヴィズっていうの。よろしくね』

「名前だけは、どちらも一人前なんですさ」

才人はデルフリンガーを、ハヤテはラーズスヴィズを手につめた。

「俺は平賀才人だ。よろしくな」 「僕は綾崎ハヤテといます。」

よろしくお願いしますね」

すると、剣とトンファーは黙った。才人とハヤテを観察しているかのような。

それからしばらくして、2つの武器は小さな声で呟いた。

『おでれーた……。見損なってた。てめ、『使い手』か』

『あら、あなたも……。『使い手』なのね』

「『『使い手』?』」

『ふん、てめえら、自分の実力も知らんのか。まあいい。てめ、俺を買い』

『ねえ、ボウヤ。あたしも買ってちょうだい』

「ああ、買うよ」「はい、もちろん買います」

2人は言った。すると、2つの武器は黙りこくった。

「ルイズ、これにする」「お嬢様、これをお願いします」

ルイズは嫌そうな声を上げた。

「え〜〜。そんなのにするの?もつと綺麗でしゃべらないのになさいよ」

「いいじゃんかよ。しゃべる武器なんて面白い」

「はい。変わってていいと思いますよ」

「それだけじゃないの」

ルイズはぶつくさ文句を言ったが、2人ともよっぽど気に入ったようだったので、主人に尋ねた。

「あれ、おいくら？」

「2つ合わせて、新金貨二百で結構でさ」

「安いわね」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさ」

主人は手をひらひらと振りながら言った。

ハヤテはルイズから預かっていた財布を取り出すと、中身を数えながらカウンターに出した。

主人は枚数を確かめると、頷いた。

「毎度」剣を取り鞘に収め、トンファーを革のホルスターに下げた。

「どうしても煩いと思ったら、こつすりゃおとなしくなれますよ」

才人とハヤテは頷いて、それぞれ、『デルフリンガー』と『ラーズスヴィズ』を受け取った。

？

武器屋から出てきた3人を見つめる2つの影があった。キュルケとタバサである。キュルケは路地の影から3人を見つめると、唇をギリギリと噛み締めた。

「ヴァリエールったら…、剣なんかを買って気を引こうとしちゃって…。あたしが狙ってるってことに気づいたのかしら…？もう、なんなのよ〜！」

キュルケは地団太を踏んだ。タバサはもう自分の仕事は終わりだとばかりに、本を読んでいる。ウィンドドラゴンのシルフィードは、高空をぐるぐると回っている。なんなくルイズたちの馬を見つけた一行は、ここまで後をつけてきたのだった。

キュルケは3人が見えなくなった後、武器屋の戸をくぐった。主人がキュルケを見て、目を丸くした。

「おや！今日はどうかしてる！また貴族だ！」

「ねえ、ご主人」

キュルケは髪をかき上げると、色っぽく笑った。むんとする色気に押され、主人は思わず顔を赤らめる。なんだか、色気が熱波として襲ってくるようだ。

「今の貴族が、何を買っていったかご存知？」

「へ、へえ。剣と、棒を2本でさ…」

「なるほど、やっぱり剣ね…。どんな剣を買っていったの？」

「へ、へえ。剣の方は、ボロボロの大剣を一振り」

「ボロボロ？どうして？」

「あいにく、持ち合わせが足りなかったようで。へえ」

主人は嘘をついた。

キュルケは、手を顎の下に構え、おっほっほ！と大声で笑った。

「貧乏ね、ヴァリエール！公爵家が泣くわよ！」

「若奥様も剣をお買い求めで？」

主人は、今度こそ商売のチャンスだとばかりに身を乗り出した。

「ええ。見繕ってくださいな」

主人はもみ手をしながら奥へと消えた。そして、持ってきたのは先ほどハヤテに装飾品と見抜かれた、見た目だけは立派な大剣だった。

「あら、綺麗な剣じゃない」

「さすが、お目が高くていらっしゃる。この剣は、先ほどの貴族の

お連れ様が欲しがっていたものでさ。しかし、お値段の加減が釣り合いませんで。へえ」

「ほんと？」

貴族のお連れ様？たぶん才人が欲しがっていたものだろう。

キュルケはそう考え、尋ねた。

「おいくら？」

「へえ、新金貨で四千五百でさ」

「ちょっと高くない？」キュルケの眉が上がった。

「へえ。名剣は釣り合う黄金を要求するもんでさ」

キュルケはちょっと考え込むと、主人の方に体を近づけた。

「ご主人……。ちょっと、お値段が張りすぎじゃございませんこと？」

顎の下をなでられ、主人は息がつまりそうになった。

ものすごい色気が親父の脳髓を直撃する。

「へ、へえ……。名剣は……」

キュルケはカウンターの上に腰掛けた。左の足を持ち上げる。

「お値段、張りすぎじゃ、ございませんこと？」

ゆっくりと、投げ出した足をカウンターの上に持ち上げた。主人の目はキュルケの太腿に釘付けになった。

「さ、さようで？では、新金貨で四千……」

キュルケの足が、さらに持ち上がった。太腿の奥が見えそうになる。

「いえ！三千で結構でさ！」

「熱いわね……」

キュルケは答えずに、シャツのボタンを外し始めた。

「シャツ、脱いでもおうかしら……。よろしくて？ご主人」

主人に熱っぽい流し目を送った。

「おお、お値段を間違えておりました！二千で！へえ！」

キュルケはシャツのボタンを一個外した。それから主人の顔を見上げる。

「千八百で！へえ！」

再び、一個外した。キュルケの胸の谷間があらわになる。それからまた、主人の顔を見上げた。

「千六百で！へえ！」

キュルケはボタンを外す指を止めた。今度は、スカートの裾を持ち上げようとした。

その指が途中で止まる。主人が哀れな表情になった。

「千よ」

キュルケは言い放った。再びするとスカートの裾が持ち上がる。主人は息を荒くしてそれを見つめていた。

その指がぴたっと止まる。主人は悲しそうな声を上げた。

「あ、ああ……」

キュルケは、スカートの裾を戻し始めた。そして、希望の値段を繰り返し告げた。

「千」

「へえ！千で結構でさ！」

キュルケはカウンターからすっと降りると、さらさらと小切手を書いた。

それをカウンターの上に叩きつける。

「買ったわ」

そして剣をつかむと、さっさと店を出て行った。

主人は呆然としてカウンターの上の小切手を見つめていた。

急激に冷静さを取り戻し、頭を抱える。

「あ、あの剣を千で売っちゃまったよ！」

主人は引き出しから酒瓶を取り出した。

「ええい！今日はもう、閉店だ！」

第十一話 武器屋（後書き）

キャラ・作者対談

ハヤテ（以下ハ）：ト、トンファー…ですか。

サイト（以下サ）：トンファーってなんだ…？

ルイズ（以下ル）：さあ…。よくわからないわ。

ラーズスヴィズ（以下ラ）：ひどいわね…。ちょっと作者、説明なさい！

作者（以下作）：えーとだな、ウイキ開いて、トンファーね、トンファー…っと。

サ：ウイキって…お前もよく分かってないのかよ！

作：まあ、そう怒るな。

トンファー…つつのはだな、もともとは沖縄の古武道で使われる武器らしい。

本編でも書いたとおり、2つで1組であり、真ん中よりずれたところについた

握りをつかんで、左右の手に持って戦うんだ。

肘を覆うようにして持てば、相手の攻撃を受けるのに使えるし、

そのまま突き出すようにして攻撃も出来る。

長い部分を相手に向けて、棍棒のように殴りつけたり、

握りを利用して手首を返し、回転させながら勢いをつけて襲い掛かる、

といった戦い方が出来る。

また、長い部分を握って、握り部分を鎌のように扱うことも出来る。

主に刀を持った敵と戦うのに作られた攻防一体の武器、

それがトンファーだ。

ラ：そうよ。あたし、すごいんだから！

サ：へえ……意外とすごいんだな……。

ハ：なるほど……。それと、僕の体術を組み合わせる、ということですね。

作：そういうことだな。

デルフリンガー（以下デ）：おい、俺たちは？

ル：あんたは、原作でおなじみだから、今は説明なしよ。

デ………ひどいぜ…

ハ：デルフさんが…いじけてます……

サ：お、おい、デルフ。これから俺と頑張っ*て*いけばいいじゃないか！

デ：あ、あいぼう………（泣？）

ラ：大げさねえ……

ル：まっ*た*くだわ……

サ：そういえば、次回はどうなるんだ？

作：次回はだな………フーケが動き出す話かな……

ル：ついに、一巻の後半*つて*感じね……

ハ：やっ*と*そこまで来たんですか……

作：言っ*て*るだろ。僕だ*つて*一生懸命なんだ*つて*。

サ：ま、更新滞っ*て*ないだけマシだよな。

ハ：そういえばそうですね。

ル：そこだけでしょ。

ラ：やっ*つ*とのことであたしの名前も決まっ*た*んじゃないの。

デ：ひどいやつだぜ。

作：お前ら……励ましの言葉くらいかけてくれたっていいだろ！

サ：ハ・ル・デ・ラ：ない。

作：……泣いちゃうぞ……ふええええん……（泣）

はい、ハヤテの武器は、

インテリジェンストンファア『ラーズスヴィズ』に

決まりました。

ハヤテの武器は女性の性格にしたら面白そうだと思います、

女性的な名前かなーと思ったので、この名前にしました。

案を下さった白迅狼さん、ありがとうございます。

ちなみに、『ラーズスヴィズ』というのは、白迅狼さんによると、

北欧神話のドワーフの一人で、『賢明な決定をする者』

という意味があるそうですよ。

なんだか、それにもちよつと惹かれたってのもあるかもしれません

…。(笑)

他の案を下さった、twさん、神崎さんもありがとうございました。

提案された他の名前は、今後もどこかで出すかもしれないので、

よろしく願いします！

今回は、フーケ動く、ですね。

ルイズとキュルケのケンカも入れる必要が……痛い！ルイズ、やめて！

はあ、はあ、では、また、次回。

第十二話 土くれのフーケ（前書き）

はい、十二話です。

今回はフーケが動き出す、という話ですね。

最近、だんだん疲れがたまってきたようで…

ちょっとキツイです…

今回はキャラ対談を無しにしました。

あとで対談だけ書き加えることもあるかもしれませんが…

では、ごうごう。

第十二話 土くれのフーケ

第十二話 土くれのフーケ

『土くれ』の二つ名で呼ばれ、トリステイン中の貴族を恐怖に陥れているメイジの盗賊がいる。

土くれのフーケである。

フーケの盗み方は、繊細に屋敷に忍び込んだかと思えば、別荘を粉々に破壊して大胆に盗み出したり、白昼堂々王立銀行を襲ったかと思えば、夜陰に乗じて邸宅に侵入する。

行動パターンが読めず、トリステインの治安を預かる王室衛士隊の魔法衛士たちも、振り回されているのだった。

しかし、盗みの方法には共通する点があった。フーケは狙った獲物が隠された所に忍び込む時には、主に『鍊金』の魔法を使う。『鍊金』の呪文で扉や壁を粘土や砂に変え、穴を開けて潜り込むのである。

貴族だってバカでないので当然対策は練っている。屋敷の壁やドアは、強力なメイジに頼んでかけられた『固定化』の魔法で『鍊金』の魔法から守られている。しかし、フーケの『鍊金』は強力であった。大抵の場合、『固定化』の呪文などものともせず、壁や扉をただの土くれに変えてしまうのだ。

『土くれ』は、そんな盗みの技から付けられた、二つ名なのであった。

忍び込むばかりでなく、力任せに屋敷を破壊するときは、フーケは巨大な土ゴーレムを使う。その身の丈はおよそ三十メートル。

城でも壊せるような、巨大な土ゴーレムである。集まった魔法衛士たちを蹴散らし、白昼堂々お宝を盗み出したこともある。

そんな土くれのフーケの正体を見たものはいない。男か女かも分かっていない。ただ、分かっていることは…

おそらく、トライアングルクラスの『土』系統のメイジであるということ。

そして、犯行現場の壁に、『秘蔵の　　、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』と、ふざけたサインを残していくこと。

そして……、いわゆるマジックアイテム、強力な魔法が付与された数々の高名なお宝が何より好きだということだった。

？

巨大な2つの月が、宝物庫のある魔法学院の本塔の外壁を照らしている。

2つの月の光が、壁に垂直に立った人影を浮かび上がらせていた。

土くれのフーケであった。

フーケは足から伝わってくる、壁の感触に舌打ちをした。

「さすがは魔法学院本塔の壁ね……。物理衝撃が弱点？こんなに厚かったら、ちよつとやそつとの魔法じゃどうしようもないじゃないの！」

足の裏で壁の厚さを測っている。「土」系統のエキスパートであるフーケにとって、そんなことは造作もないのであった。

「確かに、『固定化』の魔法以外はかかってないみたいだけど……。これじゃ私のゴーレムの力でも壊せそうにないね……」

フーケは腕を組んで悩んだ。

強力な『固定化』の呪文がかかっているため、『錬金』の呪文で壁に穴を開けることもできない。

「やっとここまで来たつてのに……」

フーケは齒嚙みした。

「かといつて、『破壊の杖』を諦める訳じゃあ、いかないね……」

フーケの目がきらりと光った。そして腕組みをしたまま、じつと考え始めた。

？

フーケが本塔の壁に足をつけて悩んでいる頃……。ルイズの部屋

では、騒動が起ころうとしていた。

キュルケがやって来たのである。

「なによ、ツエルプストー」

ルイズはキュルケを睨んだ。

「あたしね、サイトに恋したの！この間の決闘でギーシュを倒したあなたに、胸が震えたわ。それで、今日はプレゼントを持ってきたのよ！」

キュルケはルイズを無視して、才人へ言った。

「へ、俺にプレゼント？」

才人はきよとんとする。

「これよ」

キュルケはあの、ブルドンネ街で買った、大剣を出した。

それを見たルイズ、才人、ハヤテは無言になる。

「「「……………」」」

そして、可哀相なものを見るような目で、キュルケを見た。

その視線に、キュルケはたじろいだ。

「え……？な、なに……？どうしたのよ……？」

残念そうに、ハヤテが言った。

「あの、真に言いにくいんですが、その剣、戦闘には使えないんですよ。まったくの、ナマクラなんです……」

キュルケはその言葉に絶句した。

「う……、うそ……」

「それは、装飾用なんです」

ハヤテは付け加えた。

「そ……そうだったの。ま、いいわ。それならそれで、壁にでもかけてちょうだい！ナマクラかもしれないけど、綺麗でしょ？」

キュルケはあつという間に立ち直って再び差し出した。

「ちょっと、ツエルプストー！ここはわたしの部屋で、サイトはわたしの使い魔なの！買ってに物をあげないで！」

ルイズはキュルケに叫んだ。

「やあねえ、トリステインの女つたら……。嫉妬深くって、気が短くって、ヒステリーで、プライドばかり高くって、どうしようもないわね。やっぱり女はゲルマニアに限るわよ、サイト」

キュルケは熱っぽい流し目を才人に送った。

ルイズはキュルケをぐつと睨みつけた。

「なによ。ホントのことじゃないの」

「へ、へんだ。あんたなんかただの色ボケじゃない！なあに？ゲルマニアで男を漁りすぎて相手にされなくなったから、トリスティンまで留学してきたんでしょ？」

ルイズは冷たい笑みを浮かべてキュルケを挑発した。声が震えている。相当頭にきているらしい。

「言ってくれるわね、ヴァリエール……」

キュルケの顔色が変わったルイズが勝ち誇ったように言った。

「なによ。ホントのことでしょう？」

ハヤテは一触即発の空気に、ただただ見ているしかできなかった。

ルイズとキュルケは自分の杖に手をかけた。

すると、それまでじつと本を読んでいたタバサが、2人より早く自分の杖を振る。

つむじ風が舞い上がり、ルイズとキュルケの手から杖を吹き飛ばした。

「室内」

タバサは淡々と言った。ここでやったら危険だと言いたいのだろう。

「なに、この子。さっきからいるけど」

「あたしの友達よ」

「なんであなたの友達がわたしの部屋にいるのよ」

キュルケはルイズをぐつと睨んだ。

「いいじゃない、別に」

「よ、よお」「こんばんは」

才人とハヤテは、じつと本を読んでいるタバサに声をかけた。返事はない。本のページを黙々とめくっている。かなり無口のようだ。

ルイズとキュルケは互いに睨み合ったままである。

キュルケが言った。

「そろそろ、決着をつけませんか?」

「そうね」

「あたしね、あなたのこと、だいつきらいなのよ」

「奇遇ね、わたしもよ」

「気が合うわね」

キュルケは微笑んだ後、目を吊り上げた。

ルイズも負けじと胸を張った。2人は同時に怒鳴った。

「決闘よー!!」

「おいおい……」 「や、止めた方が……」

才人は呆れ、ハヤテは恐る恐るといったように呟いた。

?

本塔の壁に張り付いていたフーケは、誰かが近づく気配を感じた。

とんとと壁を蹴り、すぐに地面に飛び降りる。地面にぶつかる瞬間、小さく『レビテーション』を唱え、回転して勢いを殺し、羽毛のように着地する。それからすぐに中庭の植え込みに消えた。

中庭に現れたのは、ルイズとキュルケ、タバサ、そして、才人とハヤテであった。

「決闘って言ったけど、怪我するのもなんだかバカらしいわね」 キュルケが言った。

「そうね」 ルイズも頷いた。

すると、タバサがキュルケに近づいて、何かを呟く。それから才人を指差した。

「あ、それいいわね！」キュルケが微笑む。

キュルケはルイズにも呟いた。

「あ、それはいいわ」ルイズも頷いた。

3人は一斉に才人の方を向いた。

「え……？」

才人はなんだかとても嫌な予感がした。

ハヤテは、もう見ているしかなかった。

「お〜い、本気か？お前ら」

才人は情けない声で言った。

「だ、大丈夫ですか、サイトさん？」

ハヤテは心配そうに見上げる。

本塔の上から、才人はロープで縛られ、吊るされ、空中にぶら下がっている。

遙か地面の下には、小さくキュルケ、ルイズ、ハヤテの姿が見え

る。夜とはいえ、2つの月のおかげでかなり視界は明るい。塔の屋上には、シルフィードに跨ったタバサの姿があった。

キュルケとルイズは、地面に立って才人を見上げている。ロープに吊るされた才人が、小さく揺れているのが2人の目に見えた。

キュルケが腕を組んでいった。

「いいこと？ヴァリエール。あのロープを切つて、サイトを落とすたほうが勝ちよ。あたしが勝つたら、あの剣を飾ること。いいわね？」

「わかったわ」ルイズは硬い表情で頷いた。

「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのくらいはハンデよ」

「いいわ」

「じゃあ、どうぞ」

ルイズは杖を構えた。屋上のタバサが、才人を吊るしたロープを振り始めた。才人が左右に揺れる。『ファイヤーボール』等の魔法の命中率は高い。動かさなければ、簡単にロープに命中してしまう。

しかし、命中するかしないか以前に、ルイズには問題があった。魔法が成功するかしないか、である。

いつもの様に魔法を使おうとしても、恐らくまた爆発するだろう。それならば、最初から『爆発をイメージ』した方がよい。ルイズは集中した。

適当なルーンを呟く。失敗したら……、自分の部屋にキュルケが買ってきた剣を飾ることになる。

プライドの高いルイズに許せることではなかった。

気合を入れて、杖を振った。

ロープの上を小さく爆発させるつもりだったが、一瞬遅れて才人の後ろの壁が爆発した。コントロールがきかなかったようだ。

爆風で、才人の体が揺れる。

ハヤテは啞然とする。

「殺す気か！」と才人の怒鳴り声が聞こえてくる。ロープはなんともない。爆風で切れてくれたら、とも思ったが甘かったようだ。本塔の壁にはヒビが入っている。キュルケは腹を抱えて笑っていた。

「ロープじゃなくて壁を爆発させてどうするの！器用ね！」

ルイズは悔しそうにうなだれた。

「さて、あたしの番ね」

キュルケは狩人の目でロープを見据えた。タバサがロープを揺らしているので、狙いが付けづらい。

それでもキュルケは余裕の笑みを浮かべた。ルーンを短く呟き、手馴れた仕草で杖を突き出す。『ファイヤーボール』はキュルケの

十八番である。

杖の先から、メロンほどの大きさの火球が現れ、才人を吊ったロープめがけて飛んだ。火球は狙いたがわず命中し、一瞬でロープを燃やした。

才人が絶叫とともに落ちていく。屋上のタバサが杖を振り、才人に『レビテーション』をかけてくれた。ハヤテがゆっくりと降りてきた才人を受け止める。

キュルケは勝ち誇って、笑い声を上げた。

「あたしの勝ちね！ヴァリエール！」

ルイズはしょぼんとして、しゃがみ込んでしまった。

？

フーケは中庭の植え込みの中から、一部始終を見守っていた。ルイズの魔法で、宝物庫辺りの壁にヒビが入ったのを見届ける。

「いったい、あの魔法はなんなのだろう？あんな風にモノが爆発する呪文なんて見たことがない。」

フーケは頭を振った。それより、このチャンスを逃してはいけな
い。フーケは呪文を詠唱し始めた。長い詠唱だった。

詠唱を終えると、地面に向けて杖を振る。

音を立て、地面が盛り上がる。

土くれのフーケが、その本領を發揮したのだ。

？

「残念ね！ヴァリエール！」

勝ち誇ったキュルケは大声で笑った。ルイズは勝負に負けたのが悔しいのか、しょぼんと肩を落としたままだ。

才人とハヤテは、複雑な気分でルイズを見つめた。

「ハヤテ、とりあえずロープを解いてくれ」

きつちりロープでぐるぐる巻きにされている。身動きが取れない。

「はい、サイトさん」

ハヤテはロープの結び目に手をかけた。

そのときである。

背後に巨大な何かの気配を感じて、キュルケは振り返った。

我が目を疑う。

「な、なにこれ！」

キュルケは口を大きくあけた。巨大な土ゴーレムがこちらに歩いてくるではないか！

「きゃあああああああ！」

キュルケは悲鳴を上げて逃げ出した。

「ハ、ハヤテ！早く！」

才人はパニックに陥った。

「ま、間に合いそうにないです……。ちょっと失礼します！」

「うわ……！」

ハヤテは結び目を解くのを一旦諦め、そのまま才人を担ぎ上げた。

「な、なにあれ……！」

ルイズはやっと気づいたようだ。呆然とゴーレムを見つめている。

そんなルイズをハヤテは担ぎ上げた。

「お嬢様！逃げないと！」

ハヤテは2人を担いだまま、走り出した。

才人たちがいたところに、ずしん！と音を立て、ゴーレムの足が

めり込む。

上空には、シルフィードに乗ったタバサがいた。

「な、なんなんだよ……あれ……………」

「わからないけど……………たぶん、巨大な土ゴーレムね……………」

「あんな巨大なゴーレムですか!？」

「……………あんな大きい土ゴーレムを操れるなんて、最低でもトライアングルクラスのメイジに達しないわ」

フーケは、巨大な土ゴーレムの肩の上で、薄い笑みを浮かべていた。

逃げ惑う連中や、上空を舞うウィンドドラゴンの姿が見えたが、気にしない。フーケは頭からすっぽり黒いローブに身を包んでいる。その下の自分の顔さえ見られなければ、問題はない。

ヒビが入った壁に向かって、土ゴーレムの拳が打ち下ろされた。

フーケはその瞬間、ゴーレムの拳を鉄に変えた。

壁に拳がめり込む。バカツと鈍い音と共に、壁が崩れる。黒いローブの下で、フーケは微笑んだ。

フーケはゴーレムの腕を伝い、壁にあいた穴から宝物庫の中へ入り込んだ。

中には様々な宝物があった。しかし、フーケの狙いはただ一つ、『破壊の杖』である。

様々な杖が壁にかかった一画があった。その中に、どう見ても魔法の杖には見えない品があった。

全長は一メートルほどの長さで、見たことのない金属でできていた。フーケはその下にかけられた鉄製のプレートを見つめた。

『破壊の杖 持ち出し不可』とあった。フーケの笑みがますます深くなった。

フーケは『破壊の杖』を取った。

その軽さに驚く。いったい、何でできているのだろうか？

しかし、今は考えている場合ではない。急いでゴーレムの肩に乗った。

去り際に杖を振ると、壁に文字が刻まれた。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

再び黒ローブのメイジを乗せ、ゴーレムは歩き出した。魔法学院の城壁をひとまたぎで乗り越え、ずしんずしんと地響きを立てて草原を歩いていく。

才人は去っていく巨大なゴーレムを見つめながら、ルイズに尋ねた。

「あいつ、壁をぶち壊してたけど、何したんだ？」

「あそこはたぶん……宝物庫だわ」

「あの黒ローブの人、壁の穴から出てきた時、何か持ってたみたいですね……」

「泥棒か。しかし、ずいぶん派手に盗んだもんだな……」

草原の真ん中を歩いていた巨大なゴーレムは突然ぐしゃっと崩れ、大きな土の山になった。

そして、肩に乗っていた黒ローブのメイジの姿は、見え失せていた。

第十二話 土くれのフーケ（後書き）

はい、フーケの大胆な盗みでした。

ちよつと冒頭のキュルケ、可哀相だったかなー…

今回は、『破壊の杖』奪還へ、といった感じですね。

これから週連載にしようかなーと考え始めている *carzee* でした。

では、また次回。

第十三話 フーケ捕獲へ（前書き）

はい、十三話です。

すみません、投稿が遅れてしまいました…。

でも、これからはこんな感じのペースになるかもしれない。

今回は、フーケの搜索へ向かう直前、ですね。

キャラ対談、つけときます。

では、ごきげん。

第十三話 フーケ捕獲へ

第十三話 フーケ捕獲へ

翌朝……………。

トリステイン魔法学院では、昨夜からの蜂の巣をつついた様な騒ぎが続いていた。

なにせ、秘宝の『破壊の杖』が盗まれたのである。

それも、巨大なゴーレムが壁を破壊するといった大胆な方法で。

宝物庫には、学院中の教師が集まり、壁にあいた大きな穴を見て、口をあめぐりと開けていた。

壁には土くれのフーケの犯行声明が刻まれている。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

教師たちは、口々に勝手なことを喚いている。

「土くれのフーケ！貴族たちの財宝を荒らしまくっているという盗賊か！魔法学院にまで手を出しおって！」

「衛兵はいったい何をしていたんだね？」

「衛兵など当てにならない！所詮は平民ではないか！それよりも当直の貴族は誰だったんだね！」

ミセス・シュヴルーズは震え上がった。昨晚の当直は自分であった。まさか、魔法学院を狙う盗賊がいるなどは夢にも思わず、当直をサボって自室でぐうぐうと寝ていたのであった。本来なら、夜通し門の詰め所に待機していなければならぬのに。

「ミセス・シュヴルーズ！当直はあなただったのではありませんか！」

教師の1人が、早速ミセス・シュヴルーズを追及し始めた。オスマン氏が来る前に責任の所在を明らかにしておこうというのだろう。

ミセス・シュヴルーズはボロボロと泣き出してしまった。

「も、申し訳ありません……………」

「泣いたって、お宝は戻ってこないのですぞ！それともあなた、『破壊の杖』の弁償、できるのですかな！」

「わ、私…、家を建てたばかりで……………」

ミセス・シュヴルーズは、よよよと床に崩れ落ちた。

そこへオスマン氏が現れた。

「これこれ、女性をいじめるものではない」

ミセス・シュヴルーズを問い詰めていた教師がオスマン氏に訴える。

「しかし！オールド・オスマン！彼女は当直なのに、ぐうぐうと自室で寝ていたのですぞ！責任は彼女にあります！」

オスマン氏は長い口ひげをこすりながら、口から唾を飛ばして訴えるその教師を見つめた。

「ミスタ・……ギトギト」

「ギトーです！お忘れですか！」

「そうそう、ギトー君。君は怒りっぽくていかん。さて、この中でまともに当直をしたことのある教師は何人おられるのかな？」

オスマン氏は辺りを見回した。教師たちは、お互いに顔を見合わせるに恥ずかしそうに顔を伏せた。名乗り出る者はいなかった。

「さて、これが現実じゃ。責任があるとするなら、われわれ全員じゃ。この中の誰もが……、もちろん私を含めてじゃが……、まさかこの魔法学院が賊に襲われるなど、夢にも思っていないかった。なにせ、ここに居るのは、ほとんどがメイジじゃからな。誰が好き好んで虎穴に入るのかっちゅうわけじゃ。しかし、それは間違いないじゃった」

オスマン氏は、壁にぼっかり開いた穴を見つめた。

「この通り、賊は大胆にも忍び込み、『破壊の杖』を奪っていきおった。つまり、我々は油断しておったのじゃ。責任があるとするなら、我ら全員にあると言わねばなるまい」

ミセス・シュヴルーズは感激してオスマン氏に抱きついた。

「おお、オールド・オスマン！あなたの慈悲のお心に感謝いたします！」

オスマン氏は、そんなシユヴルーズの尻を撫でた。

「ええのじゃ。ええのじゃよ、ミセス……」

「私のお尻で良かったら！そりやもう！いくらでも！はい！」

オスマン氏はこほんと咳をした。誰もつつこんでくれない。場を和ませるつもりで尻を撫でたのである。皆、一様に真剣な目でオスマン氏の言葉を待っていた。

「で、犯行の現場を見ていたのは誰だね？」

オスマン氏が尋ねた。

「この3人です」

コルベールがさっと歩み出て、自分の後ろに控えた3人を指差した。

ルイズにキュルケ、タバサの3人である。才人とハヤテもそばにいたが、使い魔なので数に入っていない。

「ふむ……、君たちか……」

オスマン氏は興味深そうに才人とハヤテを見つめた。2人はどうして自分たちがじろじろ見られるのかわからず、かしこまった。

「詳しく説明したまえ」

ルイズが進み出て、見たままを述べた。

「あの、大きなゴーレムが現れて、こここの壁を壊したんです。肩に乗ってた黒ローブのメイジがこの宝物庫の中から何かを……、その『破壊の杖』だと思えますけど……、盗み出した後、そのメイジはまたゴーレムの肩に乗りました。ゴーレムは城壁を越えて歩き出して……、最後には崩れて土になっちゃいました」

「それで……？」

「あとには、土しかありませんでした。肩に乗ってた黒ローブのメイジは、陰も形もなくなっていました」

「ふむ……、つまり手がかりナシ、というわけじゃな……」

オスマン氏は気づいたようにコルベールに尋ねた。

「ときに……、ミス・ロングビルはどうしたのかね？」

「はあ……、それが朝から姿が見えないのです……」

「こんな非常時にどこへ行ったのかのう……」

「さあ……」

そんな風に話をしていると、ミス・ロングビルがやって来た。

「どこへ行っておったのじゃ、ミス・ロングビル」

「すみません、朝から調査をしておりましたもので」

「調査？」

「はい。今朝方に起きてみれば、大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこの通り。壁のフーケのサインを見て、これが国中を騒がせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査をしたのです」

「仕事が早いのも、ミス・ロングビル」

コルベールが慌てた様子で促した。

「それで、結果は？」

「はい、フーケの居場所を突き止めました」

「な、なんですと！」

コルベールが素つ頓狂な声を上げた。

「どこなのかね、それは？」

「はい、近在の農民に聞き込みを行った所、近くの森の廃屋に隠れこんだ黒づくめのローブの男を見たそうです。おそらく、その男がフーケで、廃屋がフーケの隠れ家ではないかと」

オスマン氏は、鋭い目でミス・ロングビルに尋ねた。

「そこは近いのかね？」

「はい、徒歩で半日、馬車で四時間といった所でしょうか」

コルベールが叫んだ。

「すぐに王室へ報告しましょう！その廃屋へ兵隊を差し向けてもらうのです！」

しかし、オスマン氏は首を振った。

「ばかもの、王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまわ！その上、己に降りかかる火の粉を払えぬようで、何が貴族じゃ！魔法学院で起こったことは当然、魔法学院で解決する！」

ミス・ロングビルは微笑んだ。まるで、この言葉を待っていたかのようなのである。

オスマン氏は、一つ咳払いをして有志を募った。

「では、搜索隊を編成する。我は、と思うものは杖を掲げよ」

しかし、誰も杖を掲げない。困ったように顔を見合わせるだけだ。

「おらんのか？おや？どうした？フーケを捕らえ、名を上げようと思っ貴族はおらんのか！」

ルイズは俯いていたが、やがて決心したようにすつと杖を掲げた。

「ミス・ヴァリエール！」

ミセス・シュヴルーズが驚いた声を上げた。

「な、何をしているの！あなたは生徒じゃありませんか！ここは教師に任せて……」

「誰も上げないじゃないですか」

ルイズはきゅっと唇を結んで言い放った。唇を軽くへの字に曲げ、真剣な目をしたルイズは凛々しく、美しかった。才人とハヤテはそんなルイズを見て、微笑んだ。

ルイズが杖を掲げたのを見て、キュルケも杖を上げた。

コルベールが叫んだ。

「ミ、ミス・ツエルプストー！君まで！」

キュルケはつまらなさそうに言った。

「ふん、ヴァリエールには負けられせんわ」

キュルケが杖を上げたのを見て、今度はタバサが杖を上げた。

「タバサ、あなたはいいのよ。関係ないんだから」

キュルケが言うと、タバサは短く答えた。

「心配」

キュルケは感動した面持ちで、タバサを見つめた。ルイズも唇を噛み締めて、お礼を言った。

「ありがとう、タバサ……」

そんな3人の様子を見て、オスマン氏も微笑んだ。

「そうか。では、君たちに頼むとしよう」

「オールド・オスマン！私は反対です！生徒たちをそんな危険にさらすわけには……」

「では、君が行くかね？ミセス・シュヴルーズ……」

「い、いえ……。私は体調がすぐれませんので……」

「彼女たちはフーケの犯行時に奴を見ている。その上、ミス・タバサは若くして『シュヴァリエ』の称号を持つ騎士だと聞いているが？」

タバサは返事をせず、ぼうつと立ったままだ。周りの教師たちは驚いている。

「本当なの……？タバサ」

キュルケも驚いている。王室から与えられる爵位としては最下級の『シュヴァリエ』の称号であるが、タバサの年齢でそれを与えられるというのが驚きである。男爵や子爵といった爵位ならば、領地を扱うことで手に入れることも可能であるが、シュヴァリエだけは違う。純粹に功績に対してのみ与えられる爵位……、実力の称号な

のだ。

宝物庫の中がざわめく。オスマン氏は次にキュルケを見つめた。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も相当強力なものだと聞いているが？」

キュルケは得意げに髪をかきあげた。

それから、ルイズは自分の番だとばかりに可愛らしく胸を張った。しかし、オスマン氏は困ってしまった。正直、褒める所がなかなか見つからないのであった。

「こほん、と咳をすると、オスマン氏は若干目を泳がせながら言った。

「その…、ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で…、その…、うむ、将来有望なメイジだと聞いているが？しかも、その使い魔は！」

それから才人とハヤテを熱っぽく見つめた。

「平民ながらあのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘し、勝利したという噂だが？」

オスマン氏は思った。彼らが…、本当に、本当に『ガンダールヴ』なら……。

土くれのフーケに後れを取ることはあるまい。

コルベールが興奮した調子で叫んだ。

「そうですぞ！なにせ、彼らはガンダー……」

オスマン氏は慌ててコルベールの口をふさいだ。

「むぐぐ！ぷはあ！いえ、なんでもありません！はい！」

教師たちは、すっかり黙ってしまった。オスマン氏は、威厳のある声で言った。

「この3人に勝てるという者がいるのなら、前に一步出たまえ」

誰も歩み出なかった。オスマン氏は才人とハヤテを含む5人に向き直った。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

ルイズとキュルケとタバサは真顔になり直立すると、「」「杖にかけて！」「」と唱和した。それからスカート裾をつまみ、恭しく礼をする。ハヤテも執事らしく礼をした。才人も慌ててハヤテの真似をした。

「では、馬車を用意しよう。それで向かってくれたまえ。魔法は向こうにつくまで温存した方がよいじゃろう。ミス・ロングビル」

「はい、オールド・オスマン」

「彼女たちを援護してやってくれ」

ミス・ロングビルは微笑み、頭を下げた。

「もとより、そのつもりですわ」

そして、馬車が用意されるまで学院の門のところで待つことになった。

ルイズたちが門へと向かおうとしたとき、ハヤテが言った。

「お嬢様、みなさんと先に門へ向かっていてください。僕は少し、学院長に少しお伺いしたいことがあります……」

ルイズは不思議そうな顔をしたが、頷いた。

「わかったわ。早めに来るのよ」

「はい、もちろんです」

そして、ハヤテはオスマン氏と話をした後、すぐに門へと向かった。

第十三話 フーケ捕獲へ（後書き）

キャラ・作者対談

サイト（以下サ）：おい、作者……体……大丈夫か？

ハヤテ（以下ハ）：寝不足で相当フラフラだったみたいですけど……

ルイズ（以下ル）：倒れて投稿できなくなったじゃ、本末転倒よ？

キュルケ（以下キ）：寝不足は美容の大敵なのよ？

タバサ（以下タ）：同感。

作者（以下作）：お、おう。心配してくれて、ありがとよ。

ル：べ、別に……心配ってほどでもないけど……

サ：お前が倒れたら、読者様が悲しむだろ？

ハ：読者様は神様ですから。

キ：そうね、まず読んでもらってるって自覚を持つべきね。

タ：あなたがいないと、私たちが出て来れなくなる。

作：お、お前ら……本当に心配してるのか……？

サ・ハ・ル・キ・タ：別に。

作………。

サ：ま、それはおいといて、次回はVSフーケか？

作：うーん、一気に書いてしまつか…分けるか迷ってるけど……

ハ：一気に書いてみては？

作：んー、それだとかかなり長くなるのと、今回以上に遅れそうな気が……

ル：そうね……、読者様にも遅れてもいいから長くって言う方もいたけど……

キ：悩む所ね……

タ：読者様の意見を尊重すべき。

作：そうだな……。じゃあ、一応一気に書く方向でやってみるよ。

ハ：そうですね。もし早くって方がいれば、分けてもいいですし。

サ：ま、とにかく書け。書かないと始まらないからな。

作：はい。努力いたします。（汗）

キ：そういえば、タバサ。あなた今回この対談に初めて参加したのね？

タ：そう。やっと出られた。

キ：一応本編でも前回までに2回登場してるのよね？

タ：（コクリ） 作者、どうして出してくれなかったの？

作：ええ……？えーっと、だな……。んー……なんというべきか……。

タバサって……基本、セリフ短いからさ……

あんまり、話が弾んでるって感じがないじゃん？

タ：……………。

作：だからというか……、うーん、ま、ぶっちゃけ書きにくいというところで。

タ：……………。作者、ちょっと来て。

作：え……………？

サ：ハ・ル・キ：作者……………終わったな……………。

作者がその後どうなったかは、ご想像にお任せします。

一つ確かなことは、次回の対談には出てこないということですよ。

もしかしたら、その次も出て来れないかもしれません。

タ：私……………そんなに話するの、楽しそうじゃないのかな……………？

はい、今回はタバサにやられました。

次回の話は、一応VSフーケの予定です。

長くなりそう……………。

では、また次回。

第十四話 破壊の杖、奪還へ（前書き）

はい、十四話です。

すみません、遅くなってしまいましたね。

最後の方をずっと悩んでいまして、結局こんな感じになってしまいました。

変かなあとも思いましたが、これ以上どうも出来なかったの……

キャラ・作者対談あります。

では、どうぞ。

第十四話 破壊の杖、奪還へ

第十四話 破壊の杖、奪還へ

5人は、ミス・ロングビルを案内役に、早速出発した。

馬車といっても、屋根ナシの荷車のような馬車である。襲われた時に、すぐに外に飛び出せるようにということと、このような馬車にしたのであった。

才人とハヤテはフーケと戦うことを考え、デルフリンガーとラーズヴィズを持ってきていた。

「しゃべる武器なんて…ヘンねえ…」

キュルケが2つの武器を見つめて言った。

「ヘンとはなんだ!」

「あたしたちをナメてもらっちゃ困るね!」

デルフとラーズは揃って文句を言う。

「まあまあ、俺たちは気に入ってたから」

「いいじゃないですか」

才人とハヤテは軽くそれぞれの武器を磨きながら言う。

タバサはデルフとラーズをちらりと見てから、開いていた本に目を戻した。

「ほんとに、なんでこんなのにしたんだか……」

ルイズは呆れている。

そんな話を背中で聞きながら、ミス・ロングビルは手綱を握っていた。彼女は5人に見えないように薄く笑った。

？

そうして四時間ほど馬車で進むと、深い森に入ってしまった。鬱蒼とした木々が、6人の恐怖をあおる。昼間だというのに、辺りは薄暗く気味が悪い。

「ここから先は、徒歩で行きましょう」

ミス・ロングビルがそう言って、全員が馬車から降りた。

森を通る道から、小道が続いている。

「なんだか…暗くて怖いわ……。いやだ……」

キュルケが才人の腕に手を回してきた。

「あんまりくつつくなよ」

「だってー、すごーくー、こわいんだものー」

キュルケはものすごーくうそくさい調子で言った。ルイズがキュルケを睨むと、キュルケも睨み返した。そしてお互いにふんつと顔を背けた。

そうしている内に、一行は開けた場所に出た。森の中の空き地といった風情である。およそ、魔法学院の中庭くらいの広さだ。真ん中に、確かに廃屋があった。元は木こり小屋だったのだろうか。朽ち果てた炭焼き用らしき窯と、壁板が外れた物置が隣に並んでいる。

6人は小屋の中から見えないように、森の茂みに身を隠したまま廃屋を見つめた。

「私の聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

ミス・ロングビルが廃屋を指差して言った。

人の住んでいる気配はまったくくない。フーケはあの中にいるのだろうか。

一行は、ゆっくりと相談を始めた。とにかく、あの中にいるのなら奇襲が一番である。寝ていてくれたらなおさらだ。

タバサはちよこんと地面に正座すると、皆に自分の立てた作戦を説明するために、枝を使って地面に絵を描き始めた。

まず、偵察兼囿が小屋のそばに赴き、中の様子を確認する。

そして、中にフーケがいれば挑発し、外へ出す。

小屋の中にゴーレムを作り出すほどの土はない。

外へ出ない限り、得意の土ゴーレムは使えないのだ。

そして、フーケが外へ出た所を魔法で一気に攻撃する。ゴーレムを作り出す暇を与えず集中砲火でフーケを沈める作戦だ。

「で……偵察兼囷は誰がするの？」

ルイズが尋ねた。タバサは短く答えた。

「すばしっこいの」

全員が一齐に、才人とハヤテを見つめた。

「俺たちかよ……」 「やっぱりそうなるんですね……」

2人は溜息をついた。

2人はデルフとラーズを握った。

左手のルーンが光り、体が羽でも生えたように軽くなる。

一瞬で小屋のそばへと近づく。ハヤテは裏へと回った。

2人は恐る恐る窓から中を覗いてみた。

小屋の中は一部屋しかないようだった。部屋の真ん中に埃の積も

ったテーブルと、転がった椅子が見えた。崩れた暖炉も見える。テーブルの上には酒瓶が転がっていた。

そして、部屋の隅には薪が積み上げられている。やはり、炭焼き小屋だったらしい。

薪の隣にはチェストがあった。木でできた、少し大きめの箱である。

中に人の気配はなく、人が隠れるような場所も見当たらない。

『誰もいないようね』 「そうですね……」

ラーズとハヤテが呟く。

『用心した方がいいんじゃないか？』

確かにデルフの言うとおり、相手はメイジの盗賊だ。いないと見せかけ、ひっそりと隠れているのかもしれない。

才人とハヤテは考え、とりあえず皆を呼ぶことにした。

頭の上でバツ印を作る。誰もいなかったときのサインだ。

隠れていた全員が恐る恐る近寄ってきた。

「誰もいないみたいだ」

才人は窓を指差して言った。

タバサが杖を振る。

「畏はないみたい」そう呟いてドアを開け、中へ入っていった。

才人とキュルケも後に続く。

ルイズとハヤテは外で見張りをすると行って、後に残った。

ミス・ロングビルは辺りを偵察してきますと言って、森の中に消えた。

？

小屋の中に入った才人たちは、フーケが残した手がかりがないかを調べ始めた。

そして、タバサがチェストの中から……

なんと、『破壊の杖』を見つけ出した。

「破壊の杖」

タバサは無造作にそれを持ち上げると、皆に見せた。

「あっけないわね！」

キュルケが叫んだ。

才人はその『破壊の杖』を見たたん、目を丸くした。

「お、おい。それ、本当に『破壊の杖』なのか？」

才人は驚いて言った。

「そうよ。あたし、見たことあるもの。宝物庫を見学した時にね」

才人は近寄り、『破壊の杖』をまじまじと見つめた。

間違いない、これは……………。

そのとき、外で見張りをしていたルイズの悲鳴が聞こえた。

「きゃああああああ！」

「どうした！ルイズ、ハヤテ！」

一斉にドアへ振り向いたとき……

バコオン、といい音を立てて、小屋の屋根が吹き飛んだ。

才人とキュルケ、タバサは小屋から飛び出す。

そこには、巨大なフーケの土ゴーレムの姿があった。

3人が飛び出したと同時に、ゴーレムが小屋を踏み潰した。

「ゴーレム！」

キュルケが叫んだ。

タバサが真つ先に反応し、杖を振った。

巨大な竜巻が舞い上がり、ゴーレムへぶつかっていく。

しかし、ゴーレムはびくともしない。

続いてキュルケが胸に挿した杖を引き抜き、呪文を唱えた。

杖から炎が伸び、ゴーレムを火炎に包んだ。しかし、炎に包まれようが、ゴーレムはまったく意に介さない。

「無理よ、こんなの！」

キュルケが叫んだ。

「退却」

タバサが呟く。

キュルケとタバサは一目散に逃げ出し始めた。

才人はルイズとハヤテの姿を探した。

……いた！

ハヤテがルイズを抱え、ゴーレムの拳から逃げ回っていた。

しかし、ルイズはハヤテの腕から飛び出し、ゴーレムに対峙した。ルイズはルーンを呟き、ゴーレムに杖を振りかざす。

巨大な土ゴーレムの表面で、何かが弾けた。ルイズの爆発魔法だ！だが、ゴーレムは、やはりびくともしなかつた。小屋の入り口に立った才人は二十メートルほど離れたルイズに向かって怒鳴った。

「逃げる、ルイズ！」

「お嬢様！」

ハヤテも叫ぶ。

ルイズは唇を噛み締めた。

「いやよ！あいつを捕まえれば、誰ももう、わたしを『ゼロ』のルイズなんて呼ばないでしょ！」

目が真剣だった。

ゴーレムは近くにいるルイズをやっつけようか、逃げ出したキユルケたちを追おうか、迷っているように首をかしげた。

「あんな！ゴーレムの大きさを見る！あんな奴に勝てるわけねえだろ！」

「やってみなくちゃわかんないじゃない！」

「無理だったの！」

才人がそう言うと、ルイズはぐつと才人を睨みつけた。

「あなた、ギーシュにボコボコにされても立ち上がったじゃない。わたしだって、ささやかだけどプライドってもんがあるのよ。ここで逃げたら、ゼロのルイズだから逃げたって言われるわ！」

「っ……！」

才人とハヤテは言葉が出なかった。

「わたしは貴族よ。魔法が使える者を貴族と呼ぶんじゃないわ」

ルイズは杖を握り締めた。

「敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよ！」

ゴーレムは、やはりルイズを先に叩きのめすことにしたらしい。ゴーレムの巨大な足が持ち上がり、ルイズを踏み潰そうとした。ルイズは再びルーンを詠唱し、杖を振った。

しかし……、やはりゴーレムにはまったく通用しない。ゴーレムの胸が小さく爆発するのが見えたが、それだけだ。わずかに土がこぼれただけだった。

ハヤテはラーズを握り締めると、飛び出した。

ルイズの視界に、ゴーレムの足が広がった。ルイズは思わず目をつぶった。

そのとき、風のごとく走りこんだハヤテがルイズを抱きかかえ、

才人の下まで転がった。

「死ぬ気か、お前！」

才人は思わず、自分の下へ転がってきたルイズの頬を叩いた。ぱつしいーん、と乾いた音が響いた。

ハヤテもルイズを厳しい目で見つめる。ルイズは呆気に取られて2人を見つめた。

「貴族のプライドがどうした！死んだら終わりじゃねえか！」

「お嬢様、自分から命を投げ出すようなことだけは、しないでください！」

ルイズの目から、ぼろぼろと涙がこぼれた。

「な、泣くなよ！」 「お、お嬢様……」

「だって、悔しくて……。わたし……。いつつもバカにされて……」

目の前で泣かれて、才人とハヤテは困ってしまった。『ゼロ』といつもバカにされて、よほど悔しかったに違いない。2人はルイズを見てその気持ちが痛いほどよく分かった。

才人がギーシュと決闘した時も、ルイズは涙を流したことを思い出した。ルイズは、気が強くて、生意気だけど……。ほんとは優しく、こんな戦いなんか嫌いで苦手な、ただの女の子なのだ……。

ルイズは端正な顔をぐしゃぐしゃにゆがめて泣いていた。子供み

たいだった。

しかし、今は泣き出したルイズに付き合っている場合ではなかった。

振り向くと、巨大なゴーレムが拳を振り上げている。

「少しはしんみりさせろよ！」 「邪魔しないでほしいですね……」

才人とハヤテはルイズを抱え上げ、走り出した。

ゴーレムはずしんずしんと地響きを立て、追いかけてくる。大きいだけで、動きはあまり素早くない。走る2人とあまりスピードは変わらない。

風竜が3人を救うために飛んできた。3人の目の前に着地する。

「乗って！」 シルフィードに跨ったタバサが叫んだ。

才人とハヤテはルイズをシルフィードの上に押し上げた。

「あなたたちも早く」

タバサが珍しく焦った調子で才人とハヤテに言った。

しかし、2人は風竜には乗らずに、迫り来るゴーレムに向き直った。

「サイト、ハヤテ！」 風竜に乗ったルイズが怒鳴った。

「早く行け（行つてください）！」

タバサは2人を見つめていたが、追いついてきたゴーレムが拳を振り上げるのを見て、やむなく風竜を飛び上がらせた。

ぶんツー！

間一髪、風圧と共に、才人とハヤテがいた地面にゴーレムの拳がめり込む。2人は跳びずさって拳から逃れる。

ゴーレムが拳を持ち上げる。ずぽつと地面からゴーレムの拳が抜けると、直径一メートルほどの大穴ができていた。

2人は小さく呟く。

「悔しいからって泣くなよ。なんとかしてやりたくなくなるじゃねえかよ……！」

「お嬢様のお気持ちは、僕たちがしっかり受け取りました……！」

2人は巨大なゴーレムを真っ向から睨みつけた。

「ナメやがって。たかが土人形じゃねえか」

才人はデルフを、ハヤテはラーズをぐっと握り締める。

「僕たちは……ルイズお嬢様の使い魔です……！」

「サイト、ハヤテ！」

ルイズは上昇する風竜の上から飛び降りようとした。タバサがその体を抱きかかえる。

「サイトとハヤテを助けて！」

ルイズは怒鳴った。タバサは首を振った。

「近寄れない」

近寄ろうとすると、やたらとゴーレムが拳を振り回すので、タバサは2人の下へシルフィードを近づけることができないのだった。

「サイト、ハヤテ！」

ルイズは再び怒鳴った。

才人とハヤテが武器を構えて、ゴーレムに対峙しているのが見えた。

ゴーレムの拳が唸りを上げて飛んでくる。拳は途中で鋼鉄の塊に変わる。

才人はデルフで、ハヤテはラーズで受け止めた。

なんとか受け止めはしたが、その勢いそのまま吹き飛ばされる。

2人は受身を取って体勢を立て直す。

才人はゴーレムの左足へと駆け寄り、デルフでそのまま斬り裂いた。

それと同時にハヤテも右足へ駆け寄り、ラーズを叩きつける。

両足が崩れたゴーレムは、体勢を崩して手をついた。

2人がやった、と思った瞬間、崩れた両足が再び形を取り戻し、ゴーレムが立ち上がった。

「くそ……！」 「埒が明かないですね……！」

2人は呟き、ゴーレムの拳をかわす。

ルイズは、苦戦している2人を、はらはらしながら見つめていた。なんとか自分が手伝える方法は無いのだろうか？

そのとき、タバサが抱えた『破壊の杖』に気づいた。

「タバサ、それを！」

タバサは頷き、ルイズに『破壊の杖』を手渡す。

奇妙な形をしている。こんなマジックアイテムは見たことがない。

しかし、自分の魔法はあてにならない。今はこれしか頼れない。

才人とハヤテの姿を見た。

ルイズは深呼吸し、目を見開いた。

「タバサ！わたしに『レビテーション』をお願い！」

そう怒鳴って、ルイズはシルフィードの上から地面に身を躍らせた。タバサは慌ててルイズに呪文をかけた。

『レビテーション』で地面にゆっくりと降り立ったルイズは、巨大な土ゴーレムめがけて、『破壊の杖』を振った。

しかし、何も起こらない。『破壊の杖』は沈黙したままだ。

「ほんとに魔法の杖なの！これ！」ルイズは叫んだ。

込められた魔法を発動させるには、何か条件が必要なのだろうか？

才人はルイズが地面に降り立ったのを見て、舌打ちした。あいつ、風竜の上で大人しくしてればいいのに！

しかし、ルイズが持った『破壊の杖』が目にとまる。

どうやら、ルイズはそいつの使い方がわからないらしく、もたついている。

ハヤテはゴーレムの注意を引きつけ、拳や足を攻撃し続けるが、やはりキリがないようだ。

才人はルイズめがけて駆け出した。

「サイト！」

駆け寄った才人にルイズが叫ぶ。才人はルイズの手から『破壊の

杖』を奪い取った。

「使い方が、わかんない！」

「これはな…、ここう使っただ…！」

才人が『破壊の杖』を掴み、安全ピンを引き抜こうとしたとき…
……。

「ダメです！サイトさん！」

ハヤテがゴーレムの拳を避けながら叫んだ。

「な、なんでだよ、ハヤテ！もう、こいつじゃなきゃキリがねえじやねえか！」

才人が叫び返す。

「どうしても！それだけは！使っちゃダメなんです！」

ハヤテは蹴りや突きを叩き込むが、ゴーレムはやはり元通りに再生してしまっ。

ハヤテは才人たちの下へ下がってきた。

「それは使っちゃダメなんです。僕がなんとかします。サイトさんはお嬢様と離れててください」

ハヤテが小さな声で才人に呟く。

「だ、大丈夫なのか……？ハヤテ……」

才人は不安げだ。

「ハヤテ！ダメ！あんただけじゃ……！」

ルイズも涙を浮かべる。

「お願いします」

ハヤテは頷きながら言った。

「………わかった。任せたよ、ハヤテ……」

才人はルイズを抱え、ハヤテとゴーレムから離れた。

「ハ、ハヤテ……！」

ルイズが叫ぶ。

2人が離れたことを確認すると、ハヤテはラーズを握り直した。

『………何か、策はあるのかい？』

ラーズが尋ねる。

「はい、一つだけ………」

そう。一つだけ、ゴーレムを倒す方法がある。あれは未完成だが

……今はそれも言ってもらえない。なにより、『主を想う気持ち』があれば……！！

ハヤテは駆け出す。

ゴーレムの両足を叩き割り、体勢を崩すと、一旦ゴーレムと距離をとる。

そして、ゴーレムの足が再生する前に……

疾風はやてのごとく、突進した。

B DASH ATTACK

ゴーレムの胸を貫き、上半身を消し飛ばした。

ほとんど腰の辺りしか残らなかったゴーレムは、そのまま崩れ落ち、土へと還った。

たんっ、とハヤテが着地する。

「「やった……！！」」

ルイズと才人は呆然とその様子を見つめ、手を握り合った。

木陰に隠れていたキュルケが駆け寄ってくるのが見えた。

ハヤテは、そのまま地面に倒れこんだ。

「ハ、ハヤテ！」「」

ルイズと才人はハヤテの下へと駆け寄る。

「お、お嬢様…、サイトさん……」

ハヤテは弱々しく返事をした。

「だ、大丈夫か…？ハヤテ……」

「は、はい…なんとか……いっだっ！」

ハヤテはなんとか立ち上がったが、全身の骨がおかしくなっているのか、痛みにうめいた。

「大丈夫じゃないわ！じっとしてないと……」

ルイズがハヤテを支える。

「あ、ありがとうございます、お嬢様……」

風竜から降りたタバサが、崩れ落ちたフーケのゴーレムを見つめながら、呟いた。

「フーケはどこ？」

全員は一斉に、はっとした。

すると、辺りを偵察に行っていたミス・ロングビルが茂みの中から姿を現した。

「ミス・ロングビル！フーケはどこからあのゴーレムを操っていたのかしら……？」

キュルケがそう尋ねると、ミス・ロングビルはメガネを外した。優しそうだった目が吊り上がり、猛禽類のような目つきに変わる。

「さっきのゴーレムを操っていたのは、わたし」

「え、じゃあ……、あなたが……」

「そう。『土くれ』のフーケ。想定外だったわ。まさか、『破壊の杖』を使わずに、私のゴーレムを粉々にするなんて……」

フーケはルイズに支えられ、フラフラなハヤテを見つめる。

「どうして!？」ルイズがそう怒鳴るとフーケは、

「そうね、面倒だけど説明してあげる」

と言って、妖艶な笑みを浮かべた。

「私ね、この『破壊の杖』を盗んだはいいけど、使い方がわからなかったの」

「使い方？」

「そう。せっかくのお室でも、使えないんじゃ室の持ち腐れ。だから、魔法学院の誰かなら知ってるだろうと、あなたたちを連れてきたってわけ」

「でも結局、俺たちは『破壊の杖』を使わなかった」

「そうね。だから、ここで始末してあげる。学院には、フーケのゴレムにやられた、とでも言っておくわ」

そう言った後、フーケは笑みを消し、呪文を唱えだした。しかし

……

「おい、俺のこと忘れてんだろ……………」

才人は電光石火で駆け寄り、フーケの腹にデルフの柄をめり込ませた。

フーケはそのまま崩れ落ちる。

「フーケって…実はマヌケなのか…?」

『いや、たぶん怒りで我を忘れてたんだろつよ…』

才人とデルフが咳く。

「これで……、終わりですよね……?」

ルイズに支えられたハヤテが言った。

キュルケ、タバサ、ルイズとハヤテは顔を見合わせると、才人に駆け寄った。

5人は喜びを分かち合い、抱擁し合った。

「い、いだっ！そ、そんなに強く抱きしめないでください！」

第十四話 破壊の杖、奪還へ（後書き）

キャラ・作者対談

サイト（以下サ）：ハ、ハヤテ強ええーなあー…

ルイズ（以下ル）：もはや、人間業じゃないわね…

ハヤテ（以下ハ）：ははは…

作者（以下作）：それは『ハヤテのごとく!』の読者全員の共通認識だ。

サ・ル：ハヤテは『超人』という認識か…

ハ：超人って…

キュルケ（以下キ）：隠れて見てたけど…ほんとに凄かったわね…

タバサ（以下タ）：（こくり）

ハ：お二方まで…。

作：ま、これからもこの超人ぶりが発揮されるということだ。

サ・ル・キ：……。 （やっぱりハヤテは敵に回したくないな…）

ハ：なんだか僕、化け物を見てるような目で見られてませんか…？

ル：そ、そんなことないわよ！ねえ、サイト？

サ：そ、そうだよ！ハヤテは俺と同じく、ルイズの使い魔じゃねえか！

仲間が決まってるんだろ！

キ：そ、そうよ！化け物だなんてこれっぽちも思っていないわよ！ね、タバサ？

タ：イーヴァルディ…………… / / / /

作……………タバサ…？

キ：あら…？ちよつと、タバサ？

タ：（ぼーっ）

キ：あらあら、タバサったら…………… / / /

サ：ハ・ル……………？

キ：（恋しちゃったみたいね……………）。いえ、なんでもないわよ！

タ：（勇者さま……………）

作：なんだか妙な雰囲気だが……………次回の話をしようと思う。

ル：突然ね……………。

サ：次回は何の話だ？

キ：決まってるじゃない！あれよ、あれ！

作：そう、『フリッグの舞踏会』だ。

ル：なるほど。もうユルの曜日だったものね。

サ：コルベールとフーケ（ロングビル）の話にちらっと出てきたやつか。

たしか、この舞踏会で踊ったペアは、結ばれるとかなんとかつて。

タ：！！（ハ、ハヤテと……！）

ル：（サ、サイトと……踊りたいな……／＼／＼）

キ：ダーリン、一緒に踊りましょうよ！

ル：だ、ダメ！サイトは、わたしの使い魔なんだから！

キ：あら？こっちもかしら……？

ル：な、なにがよ！

キ：なんでもないわよ。

ル：と、とにかくダメだからね！

作：そういうのは他所でやってくれ……

で、次回のその話で、やっと原作第1巻が終わりになる。

ハ：やっとですか……。ほんとに長かったですね……。

サ：一ヶ月かけてやっとか。もたもたしていると、また最新刊出ちまうぜ？

作：そーだな……。でもま、焦らずのんびりやってくよ。

ル：待ってる人たちもいるんだから、あまり間を空けすぎないようにしなさいよ！

作：はい、善処します。

デルフ（以下デ）：俺っちたちも忘れんなよ！

ラーズ（以下ラ）：今回はとりあえずセリフあったみたいだけどねえ……。

作：ああ、デルフとラーズのセリフもどこで入れるか悩んだんだよね……

デ・ラ：そこがお前さんの努力すべき所だろ！

作：次回もちゃんと入る予定だから、気にすんなって。

デ：それならまあ、いいけどよ……。

ラ：セリフ一言だけじゃ、どつくからね！

作：はいはい、善処いたしますよ……。

はい、いかがでしたでしょうか。今回は悩みまくってました。

『破壊の杖』を使わないようにするのを前提にしていたので、

フーケをどうするか………

結局サイトに任せてしまいました………

あれで良かったのかなあ………。

次回が原作一巻の最後となります。

では、次回もお楽しみに。

第十五話 フリックの舞踏会（前書き）

はい、第十五話です。

この話で、原作第一巻部分が終了となります。

ひとまず一区切りがつかいましたが、いかがでしたでしょうか……

キャラ対談あります。

では、さようなら。

第十五話 フリッグの舞踏会

第十五話 フリッグの舞踏会

学院長室で、オスマン氏は戻った5人の報告を聞いていた。

フラフラだったハヤテは元々の頑丈さもあってか、学院に戻ってすぐにかけてもらった治癒の呪文一発で回復していた。

「ふむ……。ミス・ロングビルが土くれのフーケじゃったとはな……。美人だったもので、なんの疑いもせず秘書に採用してしまった」

「いったい、どこで採用されたんですか？」

隣に控えたコルベールが尋ねた。

「街の居酒屋じゃ。私は客で、彼女は給仕をしておったのだが……いついこの手がお尻を撫でてしまったな」

「……で？」

コルベールが促した。オスマン氏は照れたように告白した。

「おほん。それでも怒らないので、秘書にならないか、と言ってしまった」

「なんで……？」

ほんとに理解できないといった口調でコルベールが尋ねた。

「カァーッ！」

オスマン氏は目をむいて怒鳴った。年寄りとは思えない迫力であった。それから、こほんと咳をして真顔に戻った。

「おまけに魔法も使えるというもんでな」

「……死んだほうがいいのでは？」

コルベールがぼそつと言った。オスマン氏は軽く咳払いすると、コルベールに向き直り、重々しい口調で言った。

「今思えば、あれも魔法学院に潜り込むためのフーケの手じゃったに違いない。居酒屋でくつろぐ私の前に何度もやってきては、魔法学院学院長は男前でしびれます、などと媚を売りまくる。終いにやお尻を撫でて怒らない。惚れてる、とか思うじゃろ？なあ？ねえ？」

コルベールは、ついつつかりフーケのその手にやられ、宝物庫の壁の弱点について語ってしまったことを思い出した。

あの一件は自分の胸に秘めておこうと思いつつ、オスマン氏に合わせた。

「そ、そうですね！美人はただそれだけで、いけない魔法使いですな！」

「そのとおりじゃ！君はうまいことを言うな！コルベール君！」

才人とハヤテとルイズ、そしてキュルケとタバサの5人は呆れて、そんな2人の様子を見つめていた。

生徒たちのそんな冷たい視線に気づき、オスマン氏は照れたように咳払いをすると、厳しい顔つきをしてみせた。

「さてと、君たちはよくぞフーケを捕まえ、『破壊の杖』を取り返してきてくれた」

誇らしげに、ルイズ、キュルケ、タバサの3人が礼をする。

同時にハヤテも礼をする。慌てて才人も礼をした。

「フーケは王室の衛士隊へ引き渡した。そして、『破壊の杖』は無事に宝物庫におさまった。一件落着というわけじゃ」

オスマン氏は微笑んだ。

「君たちの『シュヴァリエ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじやろう。といっても、ミス・タバサはすでに『シュヴァリエ』の爵位を持っているから、精霊勲章の授与を申請しておいた」

ルイズ、キュルケ、タバサの顔がぱあっと輝いた。

「ほんとうですか？」

キュルケが驚いた声で言った。

「本当じゃ。いいのじゃ、君たちはそのくらいの事をしたんじゃか

ら

ルイズは、先ほどから複雑そうな顔で立っている才人とハヤテを見つめた。

「……オールド・オスマン。サイトとハヤテには、何もありませんか？」

「残念じゃが、彼らは貴族ではないのでなあ……」

才人とハヤテは言った。

「何もいらぬですよ」「お気持ちだけで十分です」

オスマン氏は、ぼんぼんと手を打った。

「さてと、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。このとおり、『破壊の杖』も戻ってきたことじゃし、予定通り執り行う予定じゃ」

キュルケの顔がぱあつと輝いた。

「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりました！」

「今日の舞踏会の主役は君たちじゃ。用意をしてきたまえ。うんと着飾るのじゃぞ」

ルイズとキュルケ、タバサは礼をするとドアに向かう。

ルイズは、才人とハヤテを見つめ、立ち止まった。

「先に行っていていいよ」「僕たちは少々お尋ねしたいことがありますので」

ルイズは心配そうに見つめていたが、才人とハヤテがそう言うと言いつつ、頷いて部屋を出て行った。

オスマン氏は才人とハヤテに向き直った。

「尋ねたいこと、か。言っでごらんなさい。出来るだけ力になろう。君たちに爵位を授けることはできませんが、せめてものお礼じゃ」

それからオスマン氏は、コルベールに退室を促した。わくわくしながら2人の話を待っていたコルベールは、しぶしぶといった様子で部屋を出て行った。

コルベールが出ていったあと、才人は口を開いた。

「あの『破壊の杖』は俺たちが元いた世界の武器です」

オスマン氏の目が光った。

「ふむ。元いた世界とは……？」

今度はハヤテが話した。

「僕たちは、この世界の人間ではないんです。ルイズお嬢様の『召喚』によって、この世界に呼び出されたんです」

「なるほど……。そうじゃったか……」

オスマン氏は目を細めた。

「あの『破壊の杖』は俺たちの世界の武器、『M72ロケットランチャー』です。あれをここに持ってきたのは、誰なんですか？」

オスマン氏は溜息をついた。

「実は、君たちが『破壊の杖』奪回に向かう前に、そちらのハヤテ君に似たような話をしたのじゃが……」

「え……？ そうなのか、ハヤテ？」

「はい、フーケが入り込んだ宝物庫は、派手に穴を開けられていましたが、『破壊の杖』だけがなくなっていました。それで、よほど珍しいものだったのではない、どのようなものなのか、と先に学院長にお尋ねしていたんですよ」

「そうだったのか……」

「うむ。それでじゃ、あれをくれたのは、私の命の恩人だったのじゃが……。三十年も昔のことじゃったかのう、すでに亡くなってしまうたのじゃ……」

「なんですって？」

オスマン氏は驚いて目を見開いた。ハヤテは目を閉じて話を聞いている。

オスマン氏は話を続けた。

「三十年前、森を散策していた私は、突然現れたワイバーンに襲わ

れた。そこを救ってくれたのが、あの『破壊の杖』の持ち主じゃ。彼はもう一本の『破壊の杖』でワイバーンを吹き飛ばしすと、ぼつたりと倒れてしまった。かなりの怪我をしておったので、私は彼を学院へと運び込み、手厚く看護した。しかし、看護の甲斐なく……」

「死んでしまったんですか……？」

オスマン氏は頷いた。

「私は、彼が使った一本を彼の遺体と共に埋葬し、もう一本を『破壊の杖』と名づけ、宝物庫にしまいこんだ。恩人の形見としてな……」

オスマン氏は遠い目になった。

「そうか……。だからハヤテはあのとき、『破壊の杖』を使うなって言ったのか……」

「はい。あれは、学院長や学院長の恩人の方の物です。それに、奪われたときのままの形でお返ししなければ、本当に取り戻したことにほならないと思っただので……」

「うむ、そのことについては本当に感謝しておる。彼はベッドの上で、死ぬまでうわごとのように繰り返しておった。『ここはどこだ。元の世界に帰りたい』とな。きっと、彼は君たちと同じ世界から来たんじゃないかな」

「いったい、誰がこっちにその人を呼んだんですか？」

「それは分らん。どんな方法でこっちの世界にやってきたのか、

最後まで分からなかった」

「くそ！せつかく手がかりを見つけたと思ったのに……！」

「…その方は、やはりどこかの兵士だったのでしょね……」

才人とハヤテは嘆いた。見つけた手がかりは、あつという間に消えてしまった。ハヤテの言うとおり、恐らく彼はどこかの国の兵隊だったのだろう。どうやってこっちの世界にやってきたのか知りたかったが、今となつては知る術はない。

オスマン氏は2人の左手を見つめた。

「君たちのこのルーン……」

「ええ、こいつのことも聞きたかった。この文字が光ると、なぜか武器を自在に使えるようになるんです。剣なんて握ったことすらなかったのに……」

オスマン氏は、話すべきかどうかしばし悩んだ後、口を開いた。

「……これなら知っておるよ。伝説の使い魔、『ガンダールヴ』の印じゃ」

「『伝説の使い魔の印……？』」
「そうじゃ。その伝説の使い魔は、ありとあらゆる『武器』を使いこなしたそうじゃ。初めて握った剣を自由に操れたのも、そのおかげじゃろっ」

才人とハヤテは首をかしげた。

「そうだとしても……なぜ、僕たちがその伝説の使い魔に……？」

「わからん」オスマン氏はきっぱりと言った。

「わからんことばかりだ……」

「すまんの。ただ、もしかしたら君たちがこっちの世界にやってきたことと、そのガンダールヴの印は、何か関係があるのかもしれない」

「「はあ………」」

2人は溜息をついた。学院長ならば、何か有益なことが聞けるかと思っただのに、すっかりあてが外れてしまったようだ。

「力になれんですまんの。ただ、これだけは言っておく。私はいつでも、君たちの味方じゃ。ガンダールヴよ」

オスマン氏はさういうと、2人を抱きしめた。

「よくぞ、恩人の杖を取り戻してきてくれた。改めて礼を言っぞ」

「「いえ………」」2人は疲れた声で返事をした。

「君たちがどういう理屈でこっちの世界にやってきたのか、私なりにも調べるつもりじゃ。でも………」

「でも、なんですか？」

「何も分からなくても、恨まんでくれよ。なあに、こっちの世界も

住めば都じゃ。嫁さんだつて探してやる」

「いえ、必ず帰らなければなりません。待ってる人がいますから…」

ハヤテはきつぱりと言った。

「そうか。ならば、必ずや帰る方法を見つけねば…」

オスマン氏は微笑んだ。

？

アルヴィーズの食堂の上の階が、大きなホールになっている。『フリッグの舞踏会』はそこで行われていた。

才人とハヤテの2人は、バルコニーの枠にもたれ、華やかな会場を見つめていた。

中では着飾った生徒や教師たちが、豪華な料理が盛られたテーブルの周りで歓談している。才人とハヤテはバルコニーに続く階段からここまで上ってきて、料理を食べつつ、ぼんやりと中を眺めているのだった。知り合いもほとんどいないので、場違いな気分がして中には入れなかった。

2人のそばの枠には、シエスタが持つてきてくれた、肉料理の皿とワインの瓶が乗っかっていた。ハヤテは給仕を手伝おうかと申し出たが、シエスタが「今日はサイトさんもハヤテさんも大変でした

でしようから、パーティを楽しんでください」と言ったので、お言葉に甘えて、こうして料理を食べているのだった。

才人はワインを手酌で一杯グラスに注ぐと、それを飲み干した。

『おい、お前さつきから飲みすぎじゃねえのか？』

バルコニーの柱に立てかけた抜き身のデルフリンガーが心配そうに言った。ハヤテと2人だけというのもつまらなかったので、話し相手を増やそうと持ってきていたのだった。

「そ、そうですよサイトさん。もうその辺で止めた方が……」

『これ以上飲んだらつぶれちまうよ……』

ハヤテと、同じく持ってきていたラーズスヴィズも言った。

「うるせえ。家に帰れるかも、と思ったのに……。とんだ思い過ぎだよ。飲まずにいられるか」

「ま、まあ……お気持ちは僕も一緒ですけど……」

『それで体壊しちゃあ、しょうがねえじゃねえか』

『ホントだよ……』

さつきまで綺麗なドレスに身を包んだキュルケが2人のそばにいて、なんやかんやと話しかけてくれていたが、パーティが始まる中に入ってしまった。

才人は仕方なく、ハヤテとデルフとラーズを相手に、憂さを晴らしているのだった。

ホールの中では、キュルケがたくさん男たちに囲まれ、笑っている。キュルケは才人に、後で踊りましょ、と言っていたが、あの調子では何人待ちになるのかわからない。

黒いパーティドレスを着たタバサは、一生懸命にテーブルの上の料理と格闘している。しかし、時折、バルコニーにいるハヤテのほうをちらりと見ては、軽く頬を染めていた。誰もそれには気づいていないようだったが。

それぞれに、パーティを満喫しているようだった。

ホールの壮麗な扉が開き、ルイズが姿を現した。

門に控えた呼び出しの衛士が、ルイズの到着を告げる。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢の、おな〜り〜！」

2人は息を飲んだ。ルイズは長い桃色がかった髪をバレッタにまとめ、白いパーティドレスに身を包んでいた。肘までの白い手袋が、ルイズの高貴さをいやになるくらい演出し、胸元の開いたドレスがつくりの小さい顔を、宝石のように輝かせている。

主役が全員揃ったことを確認した楽士たちが、小さく流れるように音楽を奏で始めた。ルイズの周りには、その姿と美貌に驚いた男たちが群がり、盛んにダンスを申し込んでいた。今まで、ゼロのルイズと呼んでからかっていたノーマークの女の子の美しさに気づき、

いち早く唾をつけておこうというのだろう。

ホールでは、貴族たちが優雅にダンスを踊り始めた。しかし、ルイズは誰の誘いをも断ると、バルコニーに佇む才人とハヤテに気づいて、近寄ってきた。

ルイズは2人の目の前に立つと、腰に手をやって首をかしげた。

「楽しんでるみたいね」

「べ、別に……」 「お嬢様……お綺麗ですね……」

「あら…ありがと、ハヤテ」

才人は眩しすぎるルイズから目をそらした。酔っていてよかった、と思った。顔の赤さが気取られない。

デルフとラーズがルイズに気づいて言った。

『おお、馬子にも衣装じゃねえか』

『なかなか似合ってるじゃない』

「うるさいわね」

ルイズは剣とトンファーを睨んだ。

「お前は踊らないのか？」

才人は目をそらしたまま言った。

「相手がいないのよ」

ルイズは手を広げた。

「みなさんに誘われていたみたいでしたけど……」

ハヤテが言うと、ルイズはそれには答えず、才人に向かってすと手を差しのべた。

「へ……?」

「踊ってあげても、よくってよ」

目をそらし、ルイズはちょっと照れたように言った。

いきなりのルイズのセリフに、才人は戸惑った。いきなり何を言うのだ、こいつは、と思ったら照れて仕方がなくなった。

「踊ってください、じゃねえのか」

才人も目をそらしたままだ。

ハヤテは微笑みながら、2人を見つめている。

そのまましばらくの沈黙が流れた。ルイズが溜息をついて、先に折れた。

「今日だけだからね」

ルイズはドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると、膝を曲げて才

人に一礼した。

「わたくしと一曲踊ってくださいませんこと。ジェントルマン」

そう言つて顔を赤らめるルイズは激しく可愛くて、綺麗で、清楚であつた。

才人はふらふらとルイズの手を取つた。

2人は並んで、ホールへと向かつた。

「ダンスなんかしたことねえよ」

才人が言つと、ルイズは「私に合わせて」と言つて、才人の手を軽く握つた。才人は見よう見まねで、ルイズに合わせて踊りだした。ルイズは才人のぎこちないステップに文句をつけるでなく、済ました顔で優雅にステップを踏んでいる。

しばらく踊っていると、ルイズはちょっと顔を赤らめ、思い切つたように口を開く。

「あ、ありがとう」

「ど、どうしたんだよ、突然……」

「その…わたしがフーケのゴーレムに襲われたとき…、あんだ、わたしのこと叩いてまで叱つてくれたじゃない。そんな人、家族くらいしかないなかつたから……」

ルイズは何か誤魔化すように、そう呟いた。

楽士たちがテンポのいい曲を奏で出した。才人は段々と楽しくなってきた。いつか元の世界に絶対帰ってやるけど……。今を楽しむのは悪くない。今日のルイズは、いつもよりさらに可愛い。それだけで今は十分な気がした。

「気にすんな。当然だろ？」

「どうして…？」

「前にも言ったじゃねえか。俺はお前の使い魔だからな」

才人はそう言って、ルイズに笑いかけた。

ハヤテがそんな2人を微笑みながら見つめていると、ホールの中からタバサが駆け寄ってきた。

「ハ、ハヤテ……………」

「どうしました…？タバサさん」

ハヤテが尋ねると、タバサは顔を赤くして、軽く俯きながら言った。

「あ、あの……よかつたら、私と……」

ハヤテは一瞬驚いた顔になったが、すぐに微笑んだ。

「はい、喜んで」

ハヤテは片膝をついて、タバサの手を取った。

タバサはさらに頬を染めて頷くと、ホールへと向かった。

ハヤテはタバサの小さな体に合わせて、慣れたように優雅に踊りだした。

「あ、ありがとう……」

「いえ、タバサさんには助けをいただきましたし、ダンスくらいは……」

「ダンスもだけど」

「はい？」

「あなたがフーケのゴーレムを倒してくれた」

「ああ、そうですね。でも、あのときはお嬢様やサイトさん、キュルケさんと、もちろんタバサさんも、皆さんを守るために必死でしたから……」

「そう……。あなたが私のイーヴァルディなのかな……」

「え……？」

「な、なんでもない」

タバサは顔を赤らめ首を振った。

ルイズと才人、ハヤテとタバサの様子を眺めていたデルフとラーズが、こそつと呟いた。

『おでれーた!』 『まあ……』

双月がホールに月明かりを送り、ロウソクの光と絡んで幻想的な雰囲気を作り上げている。

『相棒! てーしたもんだ! 主人のダンスの相手をつとめる使い魔なんて、初めて見たぜ!』

『あらあら、あのタバサって子、あたしのパートナーに惚れてるみたいだねえ……』

2つの武器の呟きは、誰にも聞こえなかった。

第十五話 フリックの舞踏会（後書き）

キャラ・作者対談

サイト（以下サ）：はあ、やっと一区切りついたみたいだな。

ルイズ（以下ル）：ホント…やっと、って感じよね。

ハヤテ（以下ハ）：もう6月も終わりますけどね……。

作者（以下作）：うるさいな…。

サ：最初の方は毎日更新してたのに、急に週一ペースに変わるから、

結局全体通してみれば2日に一回の更新じゃねーか……。

ハ：ハッキリしてほしいですね…毎日なのか、週一なのか…

ル：読者様を混乱させるんじゃないわよ！

作：そこは申し訳ないと思っております……（汗）

ひとまず一つの区切りがいたので、完全に週一更新に切り替えようかと…。

ル：結局無茶しすぎたってことね…。

ハ：本編でワインを飲みまくってたサイトさんみたいですね。

サ：痛いところ突かれたな……

作：ほんでもって、次回と次々回は特別編でいこうと思う。

ル：特別編って…何よ？

作：まず、今回はキャラ対談特別編だ。

サ：ハ・ル：キャラ対談特別編…？

作：ああ。普段後書きで書いてるこのキャラ対談をスケールアップして、

質問コーナーを作ってみようと思う。

ル：質問コーナーって……。

ない。
読者様から特にコーナーでやるような質問なんてきてないじゃない。

サ：そうだな。

ハ：ですね。

作：ふっふっふ。

実はだな、とある作家様から質問のボタンを回してもらったのだよ。

その質問の数、30！

ル：さ、30……。意外と多いわね……。

サ：いつの間に回してもらってたんだ……

ハ：読者様、喜んでしょうかね……そんなコーナー……

作：この30の質問を答えながら、キャラ対談をしていくという予定だ。

ル：ふん……。

サ：へえ〜。

ハ：あはは……。

作：微妙な反応だな……。

ル：だって、読者様が喜んでくれるか分からないもの。

サ：ハ：そうだな（ですね）。

作：ま、まあいいじゃないか。自己満足だったとしても……。

サ：ハ・ル：やっぱり自己満足かよ！

作：……。ま、次回はそんな感じですよ。

続いて、次々回の話。

ル：無理やり話をずらしたわね…。

作：次々回は特別編パート2。ハヤテのごとくサイドの話だ。

ハ：ハヤテのごとくサイド…って事は…。

サ：ハヤテのごとくから、誰かが登場するって事か？

作：そのとおりだ。予定ではナギとマリア、あと…クラウドもかな。

ハ：ナ、ナギお嬢様が登場するんですか…。

作：区切りがついた所だし、登場させるにはいいタイミングかなと思っただ。

ル：どうなのかしらね…。

作：うん。正直どこでこの話を持ってくるべきか悩んでただけだね。

サ：ってことは、連載初期からすでに構想はあったってことか。

作：おう。ハヤテだけじゃつまらないと思っただけだからな。

ハ：ははは…。

ル：…どういつ話になるのかしら…？

作：それはさすがに言えないな。

とは言っても、すでに下書きは出来ているんだけどね。

サ：じゃ、すぐ更新すればいいじゃねえか…。

作：え？あー、うん、そう言われればそうなんだけど…。

ハ：もしかして、作者…。

ル：時間稼ぎって事？

作：バレました…？

サ：は？

ハ：原作2巻部分の構想が纏まらないから、時間稼ぎしておこう、

という魂胆だったんですね…。(汗)

作：だってさー……。冒頭のシーンをさ……。どうしようか悩んでてさ…。

ル：それくらい頑張りなさいよ！時間稼ぎって…ダメじゃない！

サ：ひどい奴だな…。

作：そこまで言わなくてもいいじゃないか…。

サ：ハ・ル：……………！！……………！！……………！！

(この後、数時間に渡って作者はお説教されました)

はい、いかがでしたでしょうか。原作一巻部分が終了しました。

次回、次々回はキャラ対談で言ったとおりです。

次回がキャラ対談特別編・質問コーナー！

次々回がハヤテのごとくサイドの話。

回りの質問コーナーに関しては、読者様からの質問もあれば、盛り込みたいと思いますので、よかったですらどうぞ。

では、また次回。

キャラ対談特別編！（前書き）

はい、予告どおり、やっけてしまいました。

キャラ対談・質問コーナーです。

あのキャラもゲスト出演しますので、お楽しみに。

では、ごんご。

キャラ対談特別編！

作者（以下作）：はい、前回の予告通り、質問コーナーをやりたいと思います。

サイト（以下サ）：マジでやるのか…。

ルイズ（以下ル）：本気だったのね…。

ハヤテ（以下ハ）：時間稼ぎ第一弾ってわけですね…。

作：それは言うんじゃない…。質問は、ハヤテに読んでもらうことにします。

ハ：え、僕ですか？

作：おう、任せたぞ。

ハ：わかりました…では、最初の質問、『あなたのペンネームは何ですか？』

作：おう、ペンネームは『carzee』だ。ここだけじゃなくて、ブログとかでも使ってる。

ル：なんだか、なんて呼んだらいいのか迷う名前よね…。

サ：実際チャットとかでは、なんて呼べばいいか聞かれたりしてるみたいだぜ。

ハ：ダメじゃないですか…。

作：うん、でもまあ、変えるつもりもないけどね。

ル：それでいいのかしら…。

ハ：あはは…。ちなみに、なんて読むんですか？このペンネーム…。

作：一応、聞かれたときは『カーズィー』って読んでと言ってる。

サ：変な名前だな。

作：ほっとけ、次の質問で説明するから。

ハ：で、では、次の質問です。『ペンネームに由来はありますか？』

作：おう、これはだな、本名からだ。本名 カーズィー car
zeeとしてみた。

サ：安直だな…。

ル：ネーミングセンスのかけらもないわね…。

ハ：もっといい名前はなかったんですか？

作：うるせえ。わりと気に入ってたんだ。とやかく言われる筋合い

はねえ。

サ：ま、いいけどよ…。

ル：次の質問にいきましょうか…。

ハ：は、はい。えーと、『物書き歴はどのくらいですか？』

作：物書き歴か…。高2くらいだったかのとときに、別のサイトで長門の短編を書いたんだが、半日もせず書いたからな…。だいたい1ヶ月くらいだな。

サ：まだまだ新米って感じが。

ル：かなり原作の文に頼ってる、というかパクってるような状態だもんね…。

ハ：ほんと、通報されないのが奇跡ですよ…。

作：それに関しては何も言えません…。ただただ感謝と謝罪の言葉のみです…。

ハ：それはもう何度も聞きました…。では、次の質問…『何がきっかけで小説を書きはじめましたか？』

作：うむ、他の素晴らしい作家様方の作品を読んでいるうちに、自分でも書いてみたいと、こう…沸々と気持ち湧いてきたというか…、まあそんな感じ。

ル：要は、衝動で書いてるってことですよ。

作：ま、一言でいえばそうなるな。

サ：いつ飽きて放り出すのか、気が気じゃねえんだが…。

ハ：それだけは止めてくださいよ…？

作：ああ、頑張つて連載は続けていくよ。スランプに陥ることもあるけどね。

ル：つていうか、今スランプだからこうして質問コーナーしてるんじゃないの？

作：……そうだな。

サ：おいおい…しっかりしてくれよ…。

作：だってー…、原作2巻の冒頭のサイトをどうすべきか悩んでさ…。

ハ：原作読み返すなり、誰かに相談するなりすればいいじゃないですか…。

作：やってるっつーの。

サ：ならもつと頑張れよ…。

作：だって…だって…。

ハ：『だってだって』とうるさいですね…。ほっといて、次の質問いきますよ。えー、『最初に書いた小説は何ですか？』

作：最初にネットに公開した、というなら…前項で書いた、別サイトでの長門の短編、『長門有希のお見舞い』だ。

ル：うわぁ…、なんか内容が透けて見えるようなタイトルね…。

サ：ち、ちなみにどんな内容なんだ？

作：ん、そうだな…、キョンが夏風邪で倒れたある日、突然長門がキョンの家に来て、そのまま看病しだすって話だ。

ハ：ほんと、そのまんまじゃないですか。

作：まあな。ちなみに読みてえな、って方がいらっしやるなら、リンク先をはろうかとも思ってるんだが、どうだろう？

ル：そんな人いるのかしら…？でも、感想に書いてくれた人がいれば、そうしてもいいんじゃない？

作：そうだな。読みたいって方は、感想にその旨を書いてくれ。

ハ：えーと、さくさくと進めたいと思います。では、次の質問、『作品を書く上でプロットはどうしてますか？』

作：プロット…構想のことだな。僕の場合は、ゼロ魔とハヤテの原作を読み返したり、下書きをノートに書くことで構想を練るかな。

ル：まあ、普通といえば普通かもね。

サ：そうだな。特にこれといって変なところも見当たらないしな…。

作：お前ら…そんなに僕を非難したいのか…？

ハ：まだまだ質問ありますから進みますよ……。では、次の質問…『小説を雑誌等に投稿した事がありますか？あるなら評価は？』

作：あ、あるわけねえ……。完全オリジナルなんて…書いたことすら…。あ、いや、一度書こうとして挫折した、設定だけの小説があつたような…

ル：ま、今のあなたじゃ無理でしょうね…。一次審査も突破不能だと思つわ。

サ：だな、ムリムリ。

ハ：パクするようなダメ作者ですからね。

作：う、それはもう言わないでくれ…。頼むから……。

ハ：はいはい。では、次の質問、『携帯、それともパソコンで書きますか？それとも紙ですか？』

作：下書きは紙というか、ノートだな。紙に書いた方が、なんとなく書きやすいんだ。そのあとで、パソコンのワードソフトを使って加筆修正とバックアップをとってから、投稿してる。

場合によっては、一部を携帯で書いたりもするけどな。

ル：携帯で書くときって…どんな時なのよ？

作：真夜中だな。投稿で使ってるパソコンは、家族共用なんだ。夜中は使えないから、携帯で書くしかない。

サ：なるほどな。書いてさえおけば、あとでパソコンで修正してもいいからな。

作：そういうことだ。うまく使い分けてるんだよ。

ハ：はい、では次いきたいと思います。えーと、『大人な文章、書いてますか？』

作：……。書けたら、いいなあ……。(遠い目)

サ：何も言わないでおこうか……。(汗)

ル：そ、そうね……。(汗)

ハ：で、では次、『主人公はやんちゃ系？クール系？』

作：うん、原作とほぼ同じだけど、どちらかというと、サイトは

やんちゃ、ハヤテはクール、…なのかな？サイトに関していえば、若干優しくしてるけど。

サ：俺ってやんちゃか…？

ル：ギーシュとの決闘なら、やんちゃと言えるかもね。

サ：う、わ…悪かったって…。

ル：も、もういいわよ……。済んだことなんだから……。

ハ：僕はクールなんですかね…？

サ：紳士な感じではあるけどな…。

ル：クール、とはちょっと違うかも…いや、あの授業の時のハヤテは…クールかも。

サ：あゝ、マリコルヌの……。

ハ：あの時は、ついカツとなってしまうって……。

ル・サ：（絶対怒らせちゃダメだ…！）

ハ：……？え〜と、では次、『逆にヒロインは元気系？それともおとなしい、またはお姉さん系？』

作：ルイズは…元気系かな……。ツンデレ系というのは間違いない。タバサは思いつきり、おとなしい系だし、キュルケはもちろん

お姉さん系かな。三人の中で一番年上だしね。

サ：いくつなんだ？

作：18歳らしい。ルイズは16歳、タバサは15歳だ。

ハ：キュルケさんはマリアさんより年上なんですね……。

作：言われてみればそうだな。意外な感じだけど。

マリア（以下マ）：私は17歳ですよ！年増じゃありません！

ハ：うわ、マリアさん！？

マ：うふふ、みなさんこんにちは。三千院家のハウスメイド、マリアです。次回のお話に登場するキャラクターとして、今回出させていただきました。

ル：ふ〜ん。あのキュルケなんかより全然大人っぽいわね…。落ち着いた感じというか、物腰っていつのかしら？

サ：そうだな。

作：というわけで、10個の質問が終わった所で、マリアさんに質問を読んでいただくと思います。マリアさん、よろしく。

ハ：マ、マリアさんには敬語なんですね…。

マ：はい、わかりましたわ。では、次の質問です。『凸凹コンビ

って好きですか？』

作：嫌いではないかな。ゼロ魔のごとくでは、ルイズとサイトは凸凹とは言えないかもしれないけど、ハヤテとタバサなら、そうかも。

ハ：え…、なんで僕とタバサさんなんですか？

作：お前、ほんとに鈍感なんだな…。

ハ：……？

マ：（ま、まずいですわ……、もしもタバサさんとハヤテ君がくつついてしまったら…ナギの事はどうすれば……？）

ハ：マリアさん、どうかしましたか？

ル：顔が少し青いみたいだけど……。

サ：気分でも悪いのか？

マ：いえ…、なんでもありませんわ。それより、次の質問です。

『脇キヤラはどんなキヤラにしますか？』

作：そうだな…。キヤラは原作からほぼ同じ性格で出すつもりだけど、もしかしたらオリキヤラも出すかも。

サ：オリキヤラか。どんなやつだ？

作：うん、て、転校生…とか？

ル：転校生…？

ハ：なんだか、どこかで聞いたことあるような設定ですね…。

マ：ほんとですわ…。

作：まだオリキャラ出すとも決めてないし、いいだろ、それくらい…。

マ：で、では、次の質問です。『文章中に記号や絵文字使ったりしますか？』

作：記号は、三点リーダーや、エクスクラメーション、クエスチオン、ダッシュとかはよく使うかな。絵文字は…たぶんまだ使ってない。

ル：絵文字ねえ…。

サ：OTLとかか？

ハ：というか…絵文字使ったら…それって小説と言えるんですか？

作：……そうだな。これからも使わない方向でいくよ。

マ：では、次の質問ですわ。『基本的に貴方の文章は長い？短い？』

作：読者様には短いとおっしゃる方もいたんですけど、検索してみるとゼロ魔のごとくと同じ15話の作品でも、こっちが7万〜8万字に対して、

3万字弱の文字数しかないものもあつたし、行間の取り方の問題なのかな…。

サ：意外だな…。そこまで短いつてわけでもないってことか。

マ：難しい問題ですわね…。

ル：たしか、ノートに5〜10ページを目安に書いてるんだつたわね。

作：ああ。10ページとなると、結構大変だけどな。

サ：読者様にアドバイスもらつたりしたらどうだ？

作：考えてみようかな…。

マ：はい、次の質問に移ります。『小説のネタはどんな時に浮かびますか？』

作：前項とだいたい同じなんだけど、原作読み返したり、ノートに下書きしたりするときが一番浮かびやすいかな。ふと思いつくこともあるけど。

ル：そうね。とにかく書く、っていうのは案を出す上で大事なこ

とだしね。

サ：へえ、そうなのか…。

ハ：書くと、思い付かなかったことが出ることもありますから、紙とペンは常に持つておくといいですよ。

マ：今は携帯のメモ機能を使ったりする人もいらっしやるでしょうけど、紙に書くという基本的なことが意外なアイデアを産むものですわ。

作：うん。だから、僕は小説を書くときはノートに書くことから始めるんだ。

マ：まだまだ続きます。では、次の質問、『好きな、または得意なジャンルは何ですか？』

作：得意な、っていうのはわかんないけど、好きなのはクロスオーバー、異世界、魔法、学園モノ、チート、ラブコメとかかな。

サ：ゼロ魔のごとくには全部入ってるな…。

ル：そうね…。

ハ：いやいや、『チート』はないんじゃないですか？

サ：いやいや、ハヤテのその能力がチートだろ。

ハ：そ、そんな風に言わないでください…。

マ：落ち込んだハヤテ君は放っておいて、次の質問ですわ。『小説を書く時によく使う人称は？』

作：地の文は基本、三人称かな。サイトとかは『俺』、ルイズは『わたし』、ハヤテとかは『僕』、キュルケとかは『あたし』、タバサとかは『私』だね。

ル：『わたし』はどうして平仮名なの？

サ：そう言えばそうだな。

作：ルイズは特別だからだ。第一ヒロインとして、あえて『私』ではなく『わたし』にしてるんだ。

ル：わたしが…特別…／／／

ハ：じゃあ、サイトさんや僕だって、『おれ』や『ぼく』でもいいのでは？

作：わかってないな…ハヤテ。

ハ：……？

作：ヒロインだからこそ意味があるんだ。主人公にやったって…
…萌えないだろ！

ハ：も、萌え…なんですか？

マ：次、いきましようか…。では…『今まで書いた話で気に入ってる物がありますか？』

作：そうだな、『第十四話 破壊の杖、奪還へ』かな。あれは破壊の杖を使わないってことを前提に書いてて、

ハヤテの必殺技のシーンは自分で言うのもなんだけど、ちょっと鳥肌がたつくらい気に入ってるシーンなんだ。

ハ：やった僕はそのあとフラフラでしたけどね…。

ル：でも治癒の呪文をかけたら、あつという間に回復したわね…。

マ：以前は一日休んでましたけど、魔法ってすごいんですね…。

サ：いやいや、魔法がすごいんじゃないかってハヤテがすごいんだろ…。一度その必殺技を使ってたんなら身体が慣れたんじゃないかねえのか？

ハ：え、そうなんですかね…？

作：ま、ハヤテはチートってことだ。

ハ：ま、またチートって……。

マ：で、では、次の質問です。『好評だった、感想をもらった作品はありますか？』

作：うん。ゼロ魔のごとくは感想を書いてくれる人がいて、とて

も嬉しいです。ちょっとしたことでも、励みになりますよ。

ル：そうね。読者様からエネルギーをもらってるってことを一番実感できるわね。

サ：ほんと、幸せな気分になるよな…。

ハ：そんな読者様のためにも、もっと精進してくださいよ。

作：わかっております。これからもよろしく願いますね。

マ：では、次の質問です。『タイトルはどうやってつけますか？』

作：うーん、本文を先に書いてから、一度読み返して、全体を表しそうな言葉を考えてつけるかな。

ル：だからぱっとしないのね…。

サ：ほんとにな…。

作：ほっとけ…。苦労してんだよ、こっちだって。

ハ：ぱっとしないのをわかって書いてるんじゃないですか…。

作：そりゃ…そうだけど…。

マ：まあまあ、ハヤテ君。作者の気持ちも察してあげてくださいな。

ハ：はあ……。

マ：はい、では次にいきたいと思います。『自分が書いた小説で気に入った文章・セリフがあつたら教えてください』

作：えくと、『第六話 使い魔の一日 その3』で言ったハヤテのセリフ、『執事には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わっているんですよ』だな。

これはハヤテ原作7巻から引つ張ってきたセリフで、ピツタリかな〜と思つて使つてみたんだ。マリコル又の恐怖をよりかきたてるかと思つて。

ル：ひどいわね……。

サ：まあ、マリコル又は自業自得だけだな。

マ：ハヤテ君の逆鱗に触れたのが運の尽き、でしたわね…。

ハ：マリアさん……、げ、逆鱗って……。

作：まさに逆鱗って感じだったけど。

ハ：作者まで……。

マ：なんだか、ハヤテ君が落ち込んでばかりの気もしますけど、華麗にスルーしますわ。では、次の質問、『どんな話を書くのが好きですか？』

作：そうだな。まあ、学園モノかラブコメかな、やっぱり。

ル：基本はそれなのね……。

サ：軸はぶれないんだな……。

ハ：そうですね……。

マ：では、次にいきます。『読む書くにあたり、どんな話が苦手ですか？』

作：暗い話。ホラーとかは絶対無理だ。悲しい話は気分によっては読みたいくなることもあるけどな。

サ：そうだな、泣きたい時とかか……？

ル：それってどんな時よ……。

ハ：男心は複雑なんですよ……。

作：乙女心が複雑なのと同じようにな……。

ル：そういうもんなのかしら……？

マ：……うふふ、では、次の質問です。『文章教室とかに通いましたか？それとも今通ってますか？』

作……。そんな教室あるんだ、知らなかった。通ってないな。かなり適当に書いてるから。

ル：通ってればもっとマシな物を書いてたでしょうね…。

サ：まったくだ。

ハ：ほんとですね。

マ：散々に言われてますわね…。

作：返す言葉もありません…。

マ：ラスト5つです。次は… 『影響を受けた作家、作品はありませんか？』

作：そうだな、たくさん読んできてどれも少なからず影響は受けてると思うけど、一番はやっぱり翔翔さんの『ゼロの使い魔たち』侍と一般人と魔法使い…』だな。

これを読んでゼロ魔のごとくを書こうと思ったんだ。

サ：なるほど、使い魔を複数召喚する、というアイデアをそこからもらったのか。

ル：結局パクリじゃない…。

作：まあ、そう言うな。そこそこ好評だしいいじゃないか…。

ハ：いいんですかねえ……。

マ：あと少しですよ。では、次の質問です。『心がけていることは？』

作：うむ、文章上の凡ミスを極力出さないことだな。今のところほとんどないみたいで安心してる。

ル：一回読者様に指摘されてたじゃない……。

サ：しかも、俺とハヤテを間違えて書いてたっていう最悪な間違いじゃねーか……。

ハ：ひどいですね……。

作：うっ、そこ突かれると……痛いな……。

マ：これからは気をつけてくださいな。

作：気をつけます……。

サ：ほんとかよ……？

作：僕って……信用ないな……。

マ：作者は放っておいて、次の質問ですわ。『これから書いてみたい話がありますか？』

作：話というか、ネタは少し考えてる。今はまだここでは言わないことにするよ。

ル：なによ、もったいぶるわね……。

サ：ネタバレになっても面白くないからだろ……。

ハ：まあ、この作者がそんな隠すほどすごいネタを考えてるとは思えませんけど……。

マ：散々ですわね……。

作：……。挑発には乗りません……。

マ：はいはい、ではあと2つ、『あなたにとって小説とはなんですか？』

作：僕にとって小説とは、生活の一部であり、喜びや楽しみであり、悲しみや苦しみであり、友である物。

サ：なんかクサイ台詞だな……。

ル：かっこつけてるの？

作：べ、別にそんなんじゃないけど……。

ハ：ありきたりといえばありきたりですけど、まあ、悪くはないと思いますよ。

マ：…そうですね。キザな感じが否めませんが、これはこれで…。

作：一言多いよな……いつも……。

マ：では、最後の質問です。『回答ありがとうございました。このバトンを渡したい方の名前をどうぞ。』

作：……誰に回せばいいのかわからないので、募集しようと思
います。

ル：…そうですね、回した先がもうもらってたってことあったら悪いものね…。

サ：…それが無難だな…。

ハ：…そうですね。

マ：…これで質問は以上ですけど…。

サ：…そうか、やっと終わったか。

ル：…長かったわね……。

ハ：…30問もありましたからね……。

作：…質問も終わったことだし、少し次回の話をして締めようと思
う。

マ：今回は私やナギが出る特別編でしたわね。

ル：ってことは……………。

ハ：なんとなく内容は想像できますけど……………。

サ：ん？まさか……………誰かがこっちに来るってことか？

作：……………。まあ、そういうことになるかな。

ル：どういう風にやってくるのかしら……………？

作：ある読者様からはコメディな感じを想像されてたみたいなんだが、僕が考えてたのはシリアスな方向だ。

サ：シリアスか……………。

ハ：シリアスさをうまく書けてるんでしょうかね……………？

作：うまくとは言えないけど……………。

マ：…どこに飛ばされるんですか？やっぱり、魔法学院の中、とか……………？

作：そこは、次回までとっといてくれ。

ル：…ひっぱるわね……………。

作：…そこまで言ったらほとんど内容喋ってしまっからな。

サ：だろっな……。

ハ：（もしもナギお嬢様にお会いしたら、僕はルイズお嬢様とナギお嬢様、どちらに仕えれば……？）

マ：（もしもハヤテ君がナギに会ってしまったら、ハヤテ君はナギとあのタバサさん、どちらを選ぶのかしら……？）

サ：あれ、なんだかハヤテ組2人が悶々と悩んでるみたいなんだけど……。

作：悩ませとけ。恐らく僕が悩んでるのと一緒のこと考えてるんだろっからな……。

サ：……………？

キャラ対談特別編！（後書き）

いかがでしたでしょうか。

質問のバトンを回してほしいという方は、活動報告のほうへどうぞ。
今回は前回やキャラ対談の中でも言ったとおり、ハヤテのごとくサ
イドの話です。

まだまだ原作2巻の冒頭で悩んでおりました…、次々回がどうなる
か…。

とりあえず、次回をお楽しみに。

では、また。

第十五・五話 ハヤテを求めて（前書き）

特別編第2弾です。

明日・明後日と用事がありまして、早めの更新になりました。

とは言ったものの、いつもより結構短めかもしれないです…。

あ、あと、クラウドさん結局出ませんでした…ごめんね、クラウドさん…（汗）

キャラ対談あります。

で、では、どうぞお楽しみください。

第十五・五話 ハヤテを求めて

時は遡り、ハヤテが地球から消えた日の夜、三千院家の屋敷にて

……

「……ハヤテ君、遅いですね」

三千院家のハウスメイドであるマリアは窓の外を眺めながら、仕事仲間であり、家族のような存在でもある、綾崎ハヤテの帰りが遅いことを気にしていた。

時間はすでに夜の11時。学校はとっくに終わっているはずだ。

もしや、と思い当たるところ・愛沢家や橘家、鷺ノ宮家、西沢家など・にも連絡してみたものの、どこにもハヤテは来ていないという。

また何か大変な目にあっているのでは……とSPを派遣してみたが、まだ連絡がない。

執事服に仕込まれた発信機も、GPSビジョンに表示されない。

・・ボタン！

勢いよくドアが開き、この屋敷の主であるナギが入ってきた。

「おい、マリア。ハヤテはまだ帰ってこないのか？」

「ええ。SPにも探させているんですけど、まだ見つかっていない

ようです……」

ナギは不安そうな顔だ。涙がこぼれそうな目をしている。

「どこへ行ってしまったのだ…ハヤテ……」

マリアは安心させるようにナギを抱きしめる。

「大丈夫です、ナギ。きつと、また何か変なことに巻き込まれているだけです」

「な、なおさら心配なんだが……」

「ハヤテ君はそんな柔な人じゃありません。だって、あなたの執事じゃないですか」

マリアはナギの目を見つめて、そう元気づける。

「う、うむ。ハヤテは私を置いて簡単にくたばるような奴じゃない。いつだって、私が呼べば颯爽と現れて私を助けてくれる」

ナギはこぼれかけた涙を拭い、ハヤテのことを想う。

「ハヤテ……」

ハヤテとの出会いは、突然だった。運命だったのかもしれない。

いつだったかのクリスマスイブ。つまらないパーティーから抜け出した自分は、偶然行き着いた公園の自販機の前で彼と出会い、い

きなり告白されたのだ。

『君をさらいたい』と……。

突然過ぎる告白だったが、私はOKした。はっきりした理由はわからないが、一目惚れだったのかもしれない。

しかし、『君の家族に挨拶する』と電話に行った彼を待つ間に、自分は変な男どもに誘拐されてしまった。

だが、やはり私が見初めたハヤテはすごい奴だった。私が誘拐された車に自転車で追い付き、車に引かれても誘拐犯どもを睨みつけ、私を華麗に救い出してくれたのだ。

私は、すぐにハヤテを執事することに決めた。

そして、ハヤテは執事になってからも、私のことをいつも守ってくれた。

そんなハヤテが、私の許可なく母と同じ所へ行ってしまうはずがない。

地球の裏にいたって、次元を越えたって、亜空間にいたって、必ずまた会える。

だって彼は、私の……大切な人だから。

「ハヤテえええ〜!!!」

ナギは、彼の名を呼んだ。

そのとき……

「……………」

向かい合ったマリアの向こう側の景色が揺らいだかと思うと、突然光り輝く鏡のようなものが現れた。

「な、なんだ…あれは…？」

「え……………」

マリアは、呆然としたナギの表情を見て振り向く。

そして、目にしたものが信じられないとばかりに目を擦る。

2人はその鏡のようなものに、恐る恐る近づく。

「鏡…ではありませんね」

「ああ、映っていないしな……。裏側も……何も無いな……………」

ナギは、それを見つめながら、思ったことを呟く。

「なあ、マリア。もしかして、ハヤテもこれを見たのかな…？」

「え……………」

マリアはまさか、と聞き返す。

「もし、もしだぞ？これが別の場所に繋がっているとしたら……」

「ま、まさか……、そんな、夢物語じゃないんですよ？」

「わ、わかっている。私だって、さすがに現実とフィクションの区別くらいつく。でも……ハヤテが私を呼んでいるような、いや……、私が呼んだからこそ、これが現れたような気がしてならないんだ。きつと……この向こう側に、ハヤテがいる」

「だ、ダメですよ。あなたまでいなくなったら……」

しかしナギは、決心した顔で、

「いや、決めた。私はこれに賭ける。いや、絶対ハヤテに会いに行く！そこまで心配なら、マリアも来い！」

「え、ええ！？わ、私もですか……？」

マリアはとても驚いた顔をしたが、ナギの真剣な顔を見て、溜息をつく。

「ふう……。あなたは一度言ったら聞きませんからね……。わかりました、私も行きます」

それを聞くと、ナギはマリアの手をとる。

「よし、では行くぞー！」

「え、もうですか……？何か準備したりとか……」

マリアは部屋をきよるきよる見回しながら言う。

しかし、

「そんな暇はない！これが消えてしまっ前に行かなければ！」

そう言って、ナギは鏡に向かって飛び込んだ。

ナギに手を引かれてマリアも目をぎゅゅとつむりながら飛び込む。

2人が消えたあと、その鏡も消えてしまった。

？

所変わって、異世界ハルケギニア大陸の上空に浮かぶ、浮遊大陸アルビオン。

そのとある村近くの森の中に、あの鏡が現れる。

ドサッ……

「いたっ……！」

ナギとマリアだ。三千院家の居間にいたときと同じ格好のまま、森の中に倒れた。

2人が放り出されると、鏡は跡形もなく消えた。

「い、いいは…？」

ナギは辺りを見回す。

三千院家の屋敷にいた時は夜だったのに、森の中は日が差していた。

「森の中、みたいですね……。あら、あっちの方に……」

マリアも同じく辺りを見回すと、木々の隙間から小さな民家が見えた。

2人はその方向へと歩き出した。

森を抜けると、その民家のあった場所には、他にも小さな家があった。どうやらかなり小さいが、村として人が集団で生活しているようだ。すぐに人が見つかって、2人はほっとした。

そうしていると、一軒の家から小さな子供が出てきた。男の子だ。

「あれ、お姉ちゃんたち、どうしたの？」

「あ、あの…誰か大人の人はいいますか？」

マリアが尋ねた。

「うん！ちよつと待ってて！」

その男の子は別の家へと入っていった。しばらくして、マリアと同じくらいの年の少女を連れて出てきた。その少女は大きめの帽子

を被っている。

「大人というか……テファ姉ちゃんだよ！」

テファと呼ばれた少女は、おずおずと2人に尋ねた。

「えと、私、ティファニアっていいいます。あなた方は……？」

「私はマリアといいます。こっちの子は、ナギといいますわ。ほら、ナギ」

「う、うむ、よろしく……」

ナギはマリアの後ろから覗くようにティファニアたちを見ていたが、マリアに促されて隣に並んだ。

「あの、それで……ここは一体……どこなんですか……？」

マリアが再び尋ねる。

「ここは、白の国アルビオンのウェストウッド村です。王都ロンドンイニウムから南へ300リーグほど離れた、ロサイスという港町の森の中にある村よ」

ティファニアが答えると、ナギとマリアは呆然とした。

「ど、どこなのだ……そこは……」

「ち、ちあ……」

「あ、あの……大丈夫……？」

ティファニアが心配そうに言った。

「え、ええ……。あ、そうそう、ここに使用人のような服を着て、水色の髪をした『綾崎ハヤテ』という男の子は来ませんでしたか？私やあなたと同じくらいの年齢なんです……」

「いえ……。見てないわ。というより、私、同じくらいの年の子に会うのが、初めてなの……」

「え……。？どうしてですか？子供はいるようですが……」

「はい……。私以外、この村に住んでるのは皆小さな子供です。ここは言ってみれば、孤児の村なの」

「そ、そうなんですか……」

自分たちは本当に異世界に来てしまったらしい。しかも、ハヤテは見えていないという。おまけにここは孤児の村で、帰る方法も行くべき場所さえ分からない。

ナギはとても不安だった。自分が「行く」と言ったばかりに、マリアまで巻き込んで知らない世界に来てしまった。ハヤテも見つからない。どうすればいいのかもわからない。

マリアはしばらく考えた後、ティファニアに頼み込んだ。

「すみません……。私たちは行く先がないんです。無理を承知でお願いするのですが、私たち2人をこの村に住まわせていただけない

でしょうか……？」

どうすればいいのかも分からない以上、頼れるのはこの村と、ティファニアだけだ。

ティファニアは驚いた表情になった。マリアの隣で聞いていたナギも同じ表情だ。

「あ、あの……こんな私でも……怖がらない……？」

そう言ってティファニアは、帽子を取った。すると、長い髪から、尖った長い耳が覗いていた。

「え……？それが、どうかしたのか？」

ナギは首をかしげた。確かに見たことのない形の耳だが、聞いたことのない場所に来たのだ。尖った耳くらいでは驚かない。マリアも同じだ。

「珍しいわ、エルフを怖がらないなんて……」

ティファニアは、ほっとしながら言った。

「「エ、エルフ……？」」

ナギとマリアは聞き返した。

「まあ、私は『混じりもの』だけど……。それより、行く先がないって言ってたわね。いいわ、ベッドも空いてたと思うし、2人くらいなら……」

「本当ですか…？」

「あ、ありがとう……」

2人は、再びほっとした。この村にはいなかったが、まだこの世界にハヤテがいないと決まったわけではない。いつかきつと再び会えるはずだ、とナギは信じた。安心すると、気持ちに戻ってきたようだ。

こうしてナギとマリアは、ウエストウッド村で生活をするようになった。

かなり先の話だが、運命は後に『彼ら』を結びつけるのである。

第十五・五話 ハヤテを求めて（後書き）

キャラ・作者対談

注・今回は特別編ということでルイズたちは対談に参加しません。

マリア（以下マ）：な、なんなんですか…これは…。

作者（以下作）：なにして…アルビオンに飛ばされたんだよ、君たちは。

ナギ（以下ナ）：いきなりだな…。

マ：そもそも、読者様から『牧村さんが時空転移装置なんか作って、総出で追いかけてきたら笑えます』って言われてたじゃないですか…。

そっちの方が筋が通った感じがして良かったのでは？

作：まあ、そう言われればそうなんだが…。

この話は結構前に書き上げていたから、
今更変えようとは思わなくて…。

ナ：適当だなー…。

作…う…………。

マ：それに、ハヤテ君たちとかなり離れた場所じゃないですか…？

確か…このウエストウッド村って…かなり先の話でしたよね？

作：まあ、原作ではだいぶ後に出てくる場所だけだな…。

ナ：ということは…私がハヤテに会えるのも…だいぶ先という事か…？

作：うーん…どうだろ？

ナ：ハッキリしろ！どうなのだ？かなり後なのか？

作：そうだな、たぶんかなり先の話になりそうだと思う。

本編の最後にも書いたからな…。

ナ：ううう…ハヤテえ…（泣）

マ：ナ、ナギ…、

会えないわけじゃないんですから…、ほら、しっかりして…。

ナ：ぐすっ……。そうだな、ティファニアにも世話になるわけだし、

いつまでも泣き言を言ってるわけにもいかないな。

ティファニア（以下テ）：ナギちゃん……。

作：おお、いたのか、テファ……。

テ：い、いたわ……最初から……。聞いてただけだけど……。

マ：ティファニアさんはエルフ……だそうですけど、

エルフって……？

作：ま、まあ……その辺りはこれから本編で説明されるだろうから、

今は聞かないでくれ……。

ナ：ネタバレになるからか？

作：そ、そうだな、うん。

マ：では、この対談はどうやってオチをつけるのですか？

作：オチ？オチ……ねえ……。オチは……。……ない。

ナ：ないのか！

テ：（結局私、対談で一言しか喋ってないわ……）

はい、ハヤテのごとくサイドの話でした。

アルビオンに飛ばされるとは、読んだ方も予想外だったのではない
でしょうか？

ちょっとびっくりさせてみたいなあと思って、アルビオンを選んでみました。

ナギとマリアなら、ウェストウッド村にも馴染んでいけそうでしたしね。

次回からは、原作の2巻、『風のアルビオン』編です。

アルビオンとは言っても、ナギたちとはまだ関わりませんが…。

では、また次回。

第十六話 秘密の小船、そして脱獄（前書き）

はい、第十六話です。

大変お待たせしてしまいましたね……。申し訳ないです。

おまけに、ほとんど原作文と同じという……。(汗)

さらに、ハヤテがまったく動かない……

駄文の極みでございますが、楽しんでいただけたら、と思います。

最近、急に忙しくなってしまう、これからもいつ投稿できるかわかりませんが、

読者様にはぜひ続けて読んでいただきたいです。

では、ごうごう。

第十六話 秘密の小船、そして脱獄

第十六話 秘密の小船、そして脱獄

ルイズは自分のベッドの上で夢を見ていた。トリスティン魔法学院から、馬で3日ほどの距離にある、生まれ故郷のラ・ヴァリエール領にある屋敷が舞台だった。

夢の中の幼いルイズは屋敷の中庭を逃げ回っていた。迷宮のような植え込みの陰に隠れ、追手をやり過ごす。双月の片一方、赤の月が満ちる夜だった。

「ルイズ！どこへ行ったの？まだお説教は終わっていませんよ！」

そうやって騒ぐのは、自分と同じ色の紙をした母であった。夢の中でルイズは、出来のいい姉たちと魔法の成績を比べられ、物覚えが悪いと叱られていたのであった。

隠れた植え込みの下から、誰かの靴が見えた。

「ルイズお嬢様は難儀だねえ……」

「まったく……。2人のお姉様方はあんなに魔法がお出来になるっていうのに……」

ルイズは悲しくて、悔しくて、歯噛みをした。召使たちは植え込みの中をがさごそと捜し始めた。

見つかる、と思ったルイズはそこからある場所へと向かった。

そこは……、彼女が『秘密の場所』と呼んでいる、中庭の池だった。

その場所は、ルイズが唯一安心できる場所だった。あまり人の寄り付かない、うらぶれた池……。池の周りには季節の花々が咲き乱れ、小鳥が集う石のアーチとベンチがあった。池の真ん中には小さな島があり、そこには白い石で造られた東屋がある。

島のほとりに小舟が一艘浮いていた。舟遊びを楽しむための小舟であった。しかし、今ではもうこの池で舟遊びを楽しむ者はいない。2人の姉たちはそれぞれ成長し、魔法の勉強で忙しかったし、軍務を退いた地方のお殿様である父は、近隣の貴族との付き合いと、狩猟以外に興味はなかった。母は、娘たちの教育とその嫁ぎ先以外は、目に入らない様子であった。

そんなわけで、忘れ去られた中庭の池と、そこに浮かぶ小舟を気に留める者は、この屋敷にルイズ以外ない。ルイズは叱られると、決まってこの中庭の池に浮かぶ小舟の中に逃げ込むのであった。

夢の中のルイズは小舟の中に忍び込み、用意してあった毛布に潜り込む。そんな風に行っていると……。

中庭の池にかかる霧の中から、1人のマントを羽織った立派な貴族が現れた。

年の頃は十六歳くらいだろうか？夢の中のルイズは六歳くらいの子格好だから、十ばかり年上に見えた。

「泣いているのかい？ルイズ」

つばの広い羽根付き帽子に隠れて、顔が見えない。でも、ルイズは彼が誰だかすぐに分かった。子爵だ。最近近所の領地を相続した、年上の貴族。夢の中のルイズは、ほんのりと頬を染めた。憧れの子爵。晩餐会をよく共にした。そして、父と彼の間で交わされた約束……。

「子爵さま、いらしてたの？」

幼いルイズは慌てて顔を隠した。みつともないところを憧れの人に見られてしまったので、恥ずかしかった。

「今日はきみのお父上に呼ばれたのさ。あのお話の事だね」

「まあ……！」

ルイズはさらに頬を染めて、俯いた。

「いけない人ですわ、子爵さまは……」

「おや、ルイズ。ぼくの小さなルイズ。きみはぼくのが嫌いかい？」

おどけた調子で、子爵が言った。夢の中のルイズは首を振った。

「いえ、そんなことはありませんわ。でも……。わたし、まだ小さいし、よくわかりませんわ」

ルイズははにかんで言った。帽子の下で、子爵はにっこりと笑っ

た。そして、そつと手を差し伸べてくる。

「子爵さま……………」

「ミ・レイディ。手を貸してあげよう。ほら、つかまって。もうじき晚餐会が始まるよ」

「でも……………」

「また怒られたんだね？大丈夫、ぼくからお父上にとりなしてあげよう」

島の岸边から小船に向かって手が差し伸べられる。大きな手。憧れの手……………。

ルイズは頷いて立ち上がり、その手を取ろうとした。

そのとき、風が吹いて子爵の帽子が飛んだ。

「あ……………」

現れた顔を見て、ルイズは当惑の声をあげた。夢の中だからなのか、いつの間にかルイズは六歳から十六歳の今の姿になっていた。

「な、なによ、あなた……………」

帽子の下から現れた顔は、憧れの子爵などではなく、使い魔の一人である才人だった。

「さあルイズ、おいで」

「おいでじゃないわよ。なんであんたがここにいるのよ」

「気にすんな。お前、俺に惚れてんだろ？」

憧れの子爵の格好をした才人は、勝ち誇ったような調子で言った。

なんだか自信たっぷりな夢の中の才人であった。

そんな才人に対してルイズは、怒っているからか、はたまた心の奥底を見透かされたような気がしたからなのか、わずかに頬を染めて叫んだ。

「ばかじゃないの！ちょっと踊ってあげたくらいでいい気にならないで！」

「強がっちゃって。ばかだなあ、ミ・レイディ。俺のルイズ」

「誰があんたのルイズなのよ！」

才人は気にせず、ルイズを抱きかかえようとした。

「やめてよ！ばか！」

それでも気にせず、才人は小船の中のルイズを抱きかかえた。

ちらりと目を移すと、少し離れた所に、もう1人の使い魔であるハヤテもいた。才人とルイズを穏やかな笑顔で見つめている。

「ハ、ハヤテまで……」

「だから、気にすんなって。俺にこうされてて、嬉しいんだろ？」

「う、嬉しくなんか無いわよ！だいたい、なんであんななのよ！もう！」

ルイズはぼかぼかと才人を殴りつけたが、才人は気にせず、ここにこと笑っているのだった。それがさらに夢の中のルイズを苛立たせるのだった。

？

才人は自分の藁束の中ではちりと目を開いた。この藁束は、冷たく固い床で寝るのに耐えかねた2人が、シエスタからもらった物である。窓の外は二つの月が光り、室内を煌々と照らしている。

ベッドの中から、うんうんとルイズの唸り声が聞こえてくる。どうやら、悪い夢を見ているらしく、それで起こされてしまったようだ。隣では、藁束の中で穏やかに寝息を立てているハヤテがいた。かなり寝つきがいいらしい。

激しく寝返りを打ったのか、ルイズのベッドから毛布が落ちかけていた。やれやれ、と思いつながら才人はむくりと起き上がり、ルイズの方へと近寄った。そんな才人の様子に気づいたのか、壁に立てかけてあったデルフリンガーとラーズスヴィズが声をかけてきた。

『眠れねえのか？相棒』

『こんな夜中に、どうしたんだい？』

才人は振り向くと、口の先に指を立てた。

『黙ってるってか。なんでだ？』

才人は極力小さな声で言った。

「ルイズが起きちまうだろ。ずり落ちてる毛布を直すんだよ。いいからそのまま静かにしてる」

すると今度はラーズが小さな声で言った。

『あら、意外と優しいトコあるじゃない』

「だから、黙ってるって……」

才人の言葉にデルフとラーズは、ふるふる震えて了解の意を示した。

才人は溜息をつく、ルイズを起こさないようにゆっくりとベッドに近づいた。

あどけなく、清楚で美しい寝顔を浮かべたネグリジエ姿のルイズが月明かりに照らされていた。華奢な身体が、くつきりと柔らかいネグリジエの生地越しに浮かんでいる。

ルイズの毛布がその足先にひっかかって、ほとんどがベッドからずり落ちてている。

才人はそーっとその毛布を拾い上げ、きちんと広げ直し、ルイズにかけてやるうとした。

しかしそのとき、ルイズの目が開いた。

ルイズと才人はそのまま三秒ほど見つめ合ったあと、ルイズが飛び起きた。顔を赤くしている。

「な、なによあんた！ご主人さまのベッドに忍び込むつもりなの！？」

「い、いや、俺はただ、お前の毛布が落ちてたのを、拾ってだな……」

「嘘おっしやいー！」

ルイズはベッドから飛び出し、才人の股間に蹴りを叩き込んだ。

「ぐお……………」

才人は痛みに悶絶し、膝をついた。

「デ……………デルフ、ラーズ……………、お前らも説明してくれ……………」

才人はデルフとラーズに助けを求めたが、

『……………』

二つの武器はどうやらだんまりを決め込んでいるらしい。笑っているのか、わずかに震えている。

「ご主人さまのベッドに入ってこようとすする使い魔なんて聞いたことがないわ……。よくも軽く見てくれたわね」

ルイズは怒り心頭で話を聞くどころではないようだ。才人はもう、覚悟を決めるしかなかった。

煌々と光る双月をバツクに、才人の絶叫が響き渡った。

それでもハヤテは、すやすやと眠っていた。

？

才人がルイズに、理不尽な理由でとっちめられている頃……………。

遠く離れたトリステインの城下町の一角、チエルノボーグの監獄で、土くれのフーケはぼんやりとベッドに寝転んで壁を見つめていた。彼女は先日『破壊の杖』の一件で、ハヤテや才人たちに捕らえられた『土』系統の呪文を得意とするメイジである。

彼女は散々貴族のお宝を荒らし回った有名な怪盗だったので、魔法衛士隊に引き渡されるなりすぐに城下で一番監視と防備が厳重なここ、チエルノボーグの監獄にぶち込まれたのである。

裁判は来週中にも行われるとの事だったが……。あれだけ国中の貴族のプライドを傷つけまくったのだから、軽い刑でおさまるとは思えない。おそらく、縛り首。よくなって島流し。どっちにしろ、このハルケギニアの大地に二度と立つことはないだろう。脱獄を考え

だがフーケはすぐに諦めた。

監獄の中には粗末なベッドと木の机以外に目に付くものはない。ご丁寧に、食器まですべて木製だった。まあ、金属のスプーン一個あったところで、この監獄をどうこうできるわけではないが。

得意の『錬金』の魔法で壁や鉄格子を土に変え脱獄しようにも、杖を取り上げられてしまったのでは、魔法が使えない。まったく、杖を持たないメイジは無力である。おまけに壁や鉄格子には魔法の障壁が張り巡らされている。たとえ『錬金』が使えるようとも、ここから脱獄するのは不可能に思えた。

「まったく、かよい女1人閉じ込めるのに、この物々しさはどうなのかしらね……」

苦々しげに呟く。

それからフーケは自分を捕まえた2人の少年のことを思い出した。

「たいしたもんじゃないの！あいつらは！」

ただの人間とは思えない、やたらとすばしっこい動きでフーケのゴーレムを翻弄し、水色の髪の少年は『破壊の杖』も使わず倒してのけた。

そのおかげで、『破壊の杖』に秘められた魔法はわからずじまいだった。

結局、『破壊の杖』とは何だったのだろうか？

そしていったい、あの少年たちは何者なんだろうつか？

まあ、今となってはもう関係のないことだ。

とりあえず眠ろうと思いついて、フーケは目をつむったが……。

すぐにぱちりと開いた。

フーケが投獄された監獄が並んだ上の階から、誰かが下りてくる足音がする。カツ、カツ、という靴の音と共に、ガシャガシャと拍車の音が聞こえる。何者だろう？階上に控える門番なら、足音に拍車の音が混ざるわけがない。フーケはベッドから身を起こした。

鉄格子の向こうに、長身の黒マントをまとった人物が現れた。白い仮面に覆われて顔が見えないが、マントの中から長い魔法の杖が出ている。どうやらメイジのようだ。

フーケは鼻を鳴らした。

「おや、こんな夜更けにお客さんなんて、珍しいわね」

マントの人物は、鉄格子の向こうに立ったまま、フーケを値踏みするように黙りこくっている。

フーケはすぐに、おそらく自分を始末しに来た刺客だろうと当たりをつけた。裁判なんてまだるっこしいことが面倒になって、その前に消してしまおうという気に違いない。

盗んだ貴族の宝の中には、王室に無許可で手に入れた禁断の品や、他人に知られたくないようなものもある。それが明るみに出たらま

ずい貴族の手の者かもしれない。口封じというわけだ。

「おあいにく見ての通り、ここには客人をもてなすような気の利いたものはございませんの。でもまあ、呑気に茶飲み話をしに来たって顔じゃありませんわね」

フーケは身構えた。囚われているとはいえ、むぎむぎとやられる気はなかった。魔法だけでなく、体術にもそここの心得がある。しかし、鉄格子越しに魔法をかけられたら終わりだ。なんとか油断させて、中に引き込もうとフーケは考えた。

黒マントの人物が口を開いた。年若く、力強い声だった。見た感じの通り、男のようだ。

「『土くれ』だな？」

「誰がつけたか知らないけど、確かにそう呼ばれているわ」

男は手を広げて、敵意のないことを示した。

「話をしに来た」

「話……………？」

怪訝な声でフーケは言った。

「弁護でもしてくるっていうの？物好きね……………」

「なんなら弁護してやっても構わん。マチルダ・オブ・サウスゴータ」

フーケの顔が蒼白になった。それは、かつて捨てた、いや、捨てることを強いられた貴族の名であった。その名を知るものは、少なくともトリステイン王国の中にはいないはずだった。

「あんた、何者……？」

平静を装ったが、無理だった。震える声でフーケは尋ねた。男はその問いには答えず、笑って言った。

「再びアルビオンに仕える気はないかね？マチルダ」

「まさか！父を殺し、家名を奪った王家に仕える気なんかさらさらないわ！」

フーケは、いつもの冷たい態度をかなぐり捨てて怒鳴った。

「勘違いするな、何もアルビオンの王家に仕えろと言っているわけではない。アルビオン王家はいずれ倒れる。近いうちにね」

「どづいうこと……？」

「革命さ。無能な王家はつぶれ、我々有能な貴族が政治を行うのだ」
「でも……、あんたはトリステインの貴族なんですよ？アルビオンの革命とやらと、何の関係があるの？」

「我々はハルケギニアの将来を案じ、国境を越えて繋がった貴族の連盟さ。我々に国境というものはない。ハルケギニアは我々の手で一つになり、始祖ブリミルの光臨せし『聖地』を取り戻すのだ」

「バカ言っちゃいけないわ」

フーケは薄ら笑いを浮かべた。

「で、その国境を越えた貴族の連盟とやらが、このこそ泥に何の用？」

「我々は優秀なメイジが1人でも多く欲しい。協力してくれないか？ 『土くれ』よ」

「絵空事や夢物語は、寝てから描くものよ」

フーケは手を振った。

ハルケギニアを一つにする……？

トリステイン王国、帝政ゲルマニア、故郷のアルビオン王国、そしてガリア王国……。未だに小競り合いが絶えない国同士が一つにまとまるなんて、まさに夢物語だ。

おまけに『聖地』を取り戻すだって？あの強力なエルフたちから？

ハルケギニアから遠く東に離れた地に住まうエルフたちによって、『聖地』が奪われてから幾百年。それから何度も数多の国々が聖地を奪回しようと兵を送ったが、ことごとく無残な敗北を喫してきた。

長命と独特の尖った耳と文化を持つエルフたちは、そのすべてが強力な魔法使いであり、優秀な戦士なのだ。同じ数で戦えば、人間たちに勝利の二文字はないということを、この幾百年でハルケギニ

アの王たちは学んできたはずである。

「私は貴族は嫌いだし、ハルケギニアの統一なんかには興味がないわ。おまけに『聖地』と取り返すだって？エルフどもがあそこにい
たいってんなら、好きにさせればいいじゃない」

男は腰に下げた長柄の杖に手をかけた。

「『土くれ』よ。お前は選択するだけだ」

「……言っただらん？」

「我々の同士となるか……」

後をフーケが引き取った。

「……ここで死ぬか、でしょ？」

「その通り。我々のことを知ったからには、生かしておけんからな」

「あなたが勝手に喋ったんじゃないの……。ほんとに、あんたら貴族
族ってやつらは、困った連中だわ。他人の都合なんか考えないんだ
からね」

フーケは笑った。

「つまり、選択じゃなくて、強制でしょ？」

仮面の下で、男も笑った。

「わかつてるじゃないか」

「だったら最初から、味方になれって言ってちょうだい。私は命令もできない男も嫌いな」

「我々と一緒に来い」

フーケは腕を組むと、尋ねた。

「あんたらの貴族の連盟とやらは、なんていうのかしら？」

「味方になるのか？ならないのか？どっちなんだ」

「これから旗を振る組織の名前くらい、先に聞いておきたいのよ」

「ふ……、お前も回りくどい言い方をするんだな……」

男は笑いながら、ポケットから鍵を取り出し、鉄格子についた錠前に差し込んで呟いた。

「『レコン・キスタ』」

第十六話 秘密の小船、そして脱獄（後書き）

キャラ・作者対談

ハヤテ（以下ハ）：ちよつと……僕、寝てるだけですか……？

サイト（以下サ）：ボコボコにされる俺よりマシだろ……（泣）

ルイズ（以下ル）：わ、悪かったわよ……。

デルフ（以下デ）：相棒の話も耳に入ってたからなあ……（笑）

ラーズ（以下ラ）：乙女のピンチだったものねえ……。 （笑）

作者（以下作）：同じ男としては、あの蹴りは相当痛そうだったがな……。

サ：だろ？ほんと、女になるかと思っただぜ……。

ハ：サイトさんが女にですか……？

ル：……きもちわる。

サ：お前が蹴るからだろ！

作：ルイズの気持ちもわかる。サイトが女って……想像しただけでも……（汗）

サ：そこまで言うか……

デ：相棒が女だったら……俺っち、水色の坊主ハヤテと組みたくなるぜ……
(汗)

ラ：ちょっと！ハヤテはあたしのパートナーだよ！

でも、ハヤテなら女って言われても……わからないかもね。

ハ：え…… (汗) またこの流れなんですか……？

作：まあ、ハヤテといえば女顔、これに尽きるからな。

ハ：尽きないでしょ！執事とか、借金とかあるでしょ！

(借金はあんまり言いたくないですけど……)

ル：いや、ハヤテは女顔っただけで十分だわ。

サ：まあな。俺から見ても、ほんとに男なのか？って時々思っぜ。

ハ：お嬢様とサイトさんまで…… (泣)

作：というわけで、女装してこい、ハヤテ。

ハ：は……？

ル：おもしろそうね！ハヤテ、行くわよ！サイトも手伝いなさい！

サ：おう。似合いそうだしな……。

(ルイズとサイトがハヤテの手を取って引きずっていく)

ハ：ちょ、ちょっと……、待ってk…… (強制連行されました)

うん。ハヤテはやっぱり女装だよ。本編でもいつか女装は確実にやります(笑)。

今回はちゃんとハヤテも出番ありますから……。

こうしてみると、ハヤテがメインで頑張る話少ないなあ……。

オリ話か何かでハヤテメインの話も書いてみようか……。

そしたらタバサもついてきそうなのが…… (笑)

タバサスキーの方々には喜んでもらえるものになるかも……

で、今回は……王女様の登場、かな？

うーん、ナギたちが再会するのは本当はかなり先になりそうだ……。

では、また次回。

第十七話 王女の来訪（前書き）

はい、第十七話です。

いやあ、お待たせしました……。 （汗）

結局一ヶ月を超えてしまいましたね……。

小説って…なかなか思ったように書けないもんです……。

今回はとりあえず更新ということで、後書きはなしで。

期待していた方、ごめんなさい。

では、ごじげ。

第十七話 王女の来訪

第十七話 王女の来訪

朝……。

「いてえ……………」

「わ、悪かったって言ってるじゃない……………」

「あはは……………」

教室に現れたルイズたちを見て、クラスメイトたちは苦笑いをした。

才人の顔が普段の1.5倍ほどに腫れ上がっていたのである。

真夜中の理不尽なお仕置きの後、満足したらしいデルフとラーズが説明したのだが、才人はすでに気絶して、そのまま夜明けまで目覚めなかった。

ハヤテはというと、そんな事があつたとは知らず、普通に朝まで寝ていたのだった。デルフとラーズからそれを聞いたハヤテは、ただ笑うしかなかった。

ルイズを真ん中に3人が席につくと、ハヤテの隣に座っていたタバサが小さな声で尋ねてきた。

「どうしたの？」

「はは……。なんでも、ちょっとした誤解があつて、お嬢様がサイトさんをお仕置きしたらしいんですけど……」

「そう……」

すると今度は、タバサの隣に座っていたキュルケが才人に向かって言った。

「大丈夫？あたしが『治癒』で治してあげるわ」

「適当なこと言わないで。あんたに『水』系統の『治癒』が使えるわけないじゃないの」

ルイズとキュルケは、ハヤテとタバサを挟んで睨み合った。

当の才人は、まだ顔をさすっていた。

そうしていると、教室の扉が開き、ミスター・ギトーが現れた。

生徒たちは一斉に静まり返った。

ミスタ・ギトーは、フーケの一件の際、当直をほっぽりだして寝ていたミセス・シュヴルーズを責め、オスマン氏に『君は怒りっぽくていかん』と言われた教師である。

長い黒髪に漆黒のマントを纏ったその姿は、なんだか不気味である。まだ若いのに、その不気味さと冷たい雰囲気からか、生徒たちに人気がない。

「では、授業を始める。知っての通り、私の二つ名は『疾風』。疾風のギターだ」

その言葉にタバサはぴくりと反応したが、教室中がしーんとした雰囲気にもまれていた。タバサの様子に気づかなかったギターは、その様子を満足げに見つめ、言葉が続けた。

「最強の系統は知っているかね？ミス・ツエルプストー」

「『虚無』じゃないんですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いているんだ」

いちいち引つかかる言い方をするギターに、キュルケはちょっとかちんときた。

「『火』に決まっていますわ。ミスタ・ギター」

キュルケは不敵な笑みを浮かべて言い放った。

「ほづ、どづしてそう思うね？」

「すべてを燃やしつくせるのは、炎と情熱。そうじゃございませんことっ。」

「残念ながら、そうではない」

ギターは腰に手を当て、言い放った。

「試しに、この私に君の得意な『火』の魔法をぶつけてきたまえ」
キュルケはぎよっとした。いきなり、この先生は何を言うのだからと思った。

「どうしたね？君は確か、『火』系統が得意なのではなかったかな？」

挑発するようなギトーの言葉だった。

「火傷じゃすみませんわよ？」

キュルケは目を細めて言った。

「構わん、本気で来たまえ。その有名なツェルプストー家の赤毛が、飾りでないのならね」

キュルケの顔から、いつもの小ばかにしたような笑みが消えた。

立ち上がって胸の谷間から杖を引き抜くと、炎のような赤毛がふわっと熱したようにざわめき逆立った。

そのまま杖を振ると、その先に小さな炎の玉が現れる。キュルケがなおも呪文を詠唱すると、その玉は次第に膨れ上がり、直径１メートルほどの大きさになった。

生徒たちは慌てて机の下に隠れる。

才人とハヤテは顔を引きつらせながら、それを見ていた。

キュルケは杖を振り、炎の玉を放った。

唸りを上げて自分めがけて飛んでくる炎の玉を避ける仕草も見せずに、ギトーは腰に差した杖を引き抜いた。そのまま剣を振るようにして薙ぎ払う。

烈風が舞い上がり、キュルケの放った炎の玉をかき消すかに思われたが……。

その直前、タバサが軽く杖を振った。

炎の玉の前にもう一つ突風が起こり、ギトーの烈風をかき消した。その結果……

「え……」

ポウン！！！

見事にギトーの顔面に炎の玉が命中し、黒コゲになったギトーはそのまま気絶した。

隠れていた生徒たちから、くすくすと笑い声が聞こえる。

「ありがとう、タバサ」

「あの人に『疾風』の名は似合わない。その名にふさわしいのは…ハヤテだけ…」

そう言って軽く頬を染めながらタバサはちらりとハヤテを見た。

「はは……」

ハヤテはただ苦笑いを浮かべるしかなかった。

「（タバサ…意外と積極的ね……）」

キュルケは心の中でそう呟いた。

そのとき、教室の扉がガラツと開き、緊張した顔のミスタ・コルベールが現れた。

彼は珍妙な格好をしていた。頭にバカでかいロールした金髪のかつらに乗っけている。見ると、ローブの胸にはレースの飾りやら、刺繍やらが踊っている。何をそんなにめかし込んでいるのだろう？

「おや、ミスタ・ギトー。どうされたのかな？」

気絶してバツタリと倒れているギトーに声をかけるが、ピクピクと痙攣するだけで返事がない。

代わりにルイズが答えた。

「ミスタ・ギトーのことは、そっとしておいてあげてください……。それより、何かあったのですか？」

コルベールはハツとして言った。

「そうでした！おっほん、今日の授業はすべて中止であります！」

その言葉に、教室中から歓声上がる。その歓声を抑えるように両手を振りながら、コルベールは言葉を続けた。

「静かに！えー、皆さんにお知らせですぞ！」

もったいぶった調子でコルベールは仰け反った。その拍子に頭に乗ったかつらが取れて、床に落っこちた。

教室中が、再びくすくす笑いに包まれる。

タバサがコルベールのつるつるに禿げ上がった頭を指差して、ぽつんと呟いた。

「滑りやすい」

とたんに教室が爆笑に包まれた。キュルケが腹を抱えながら、タバサの肩をぽんぽんと叩いて言った。

「あなた、たまに口を開くと、言うわね！」

コルベールは顔を真っ赤にさせると、大きな声で怒鳴った。

「黙りなさい！ええい、黙りなさい小童どもが！大口を開けて下品に笑うとは、まったく貴族にあるまじき行い！貴族はおかしいときは下を向いてこっそり笑うものですぞ！これでは王室に教育の成果が疑われる！」

とりあえずその剣幕に、教室中がおとなしくなった。

「えー、おほん。本日はトリスティン魔法学院にとって、よき日があります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります」

コルベールは真剣な顔になり、後ろ手に手を組んだ。

「恐れ多くも先の陛下の忘れ形見、我らがトリスティンがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸なされます」

その言葉に、教室中がざわめいた。

「したがって、粗相があつてはいけません。急なことですが、今から全力を上げて歓迎式典の準備を行います。そのために本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、正門前に整列すること」

生徒たちは、緊張した面持ちになると一斉に頷いた。

コルベールはうんうんと重々しげに頷くと、目を見張って怒鳴った。

「諸君らが立派な貴族に成長したことを姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ！御覚えがよろしくなるように、しっかりと杖を磨いておきなさい！よろしいですかな！」

？

それから数時間後。

魔法学院の正門には、学院中の全生徒、職員、使用人が集まって

いた。

まもなくゲルマニア訪問を終えた王女一行が到着する予定である。

ズラリと並んだ列の中にいた才人はハヤテに向かって呟いた。

「王女…ってことは、お姫様ってことだよな？」

「そうですね。コルベール先生の話では、国王であるお父上を亡くされたらしいですけど……」

「やっぱり、可愛いのかなあ？」

「サ、サイトさん……」

すると、どこから現れたのかギーシュが話に割り込んできた。

「可愛い？そのような一言で表せるような美しさではない！」

「あ、ギーシュさん」

「突然どうした、ギーシュ」

「どうしたではないよ、サイト！アンリエッタ姫殿下は、まさに卜リステインの白百合なのさ！可憐で、優雅で、華麗で、清楚で、絢爛で、秀美で、秀麗で……！」

「そこまで言うほどなのか……！」

「もちろんさ！僕の言葉でさえ足りないほどに、姫殿下は美しいの

さ！」

「ふおおおおお……！」

サイトとギーシュの目がキラキラと輝いていた。

ハヤテは2人についていけず、呆然と見てることしか出来なかった。

そのとき、魔法学院の正門をくぐり、豪華に装飾された馬車が入ってきた。馬車は、その背に純潔な乙女しか乗せないといわれる幻獣、ユニコーンに引かれていた。額の角や銀白の毛並みが陽光を受けて輝いている。

馬車の周囲や上空には、鷲の半身と獅子の半身を併せ持つ幻獣、グリフォンに跨るグリフォン隊が飛び回っている。

グリフォン隊は王室直属の親衛隊、『魔法衛士隊』の内の1つである。選りすぐりの貴族で構成された3つの魔法衛士隊は、それぞれが隊の名前を冠する幻獣に騎乗し、強力な魔法を操る畏怖と憧れの象徴であった。

馬車を見留めた生徒たちは、一斉に杖を掲げた。

正門をくぐった先の本塔の玄関では、学院長のオールド・オスマンが王女一行を出迎えた。

馬車が止まると、召使たちが駆け寄り、馬車の扉まで緋毛氈の絨毯を敷き詰めた。

呼び出しの衛士が、緊張した声で王女の登場を告げる。

「こほん、トリスティン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなー
ーりーりーッ！」

しかし、がちやりと扉が開いて現れたのは、灰色のローブに身を包んだ痩身の老人だった。

生徒たちは一斉に鼻を鳴らした。もちろん、才人とギーシュもある。

「あの方は誰ですか？」

ハヤテがルイズに尋ねた。

「マザリーニ枢機卿よ。先代のトリスティン国王陛下が亡くなった後、国政を一手に引き受けてるの。街じゃ『鳥の骨』とかなんとか呼ばれてるけど、実際のところはよくわからないわ」

「はあ、なるほど…」

「どの世界も政治というものは大変なのだなあ」とハヤテと才人は思った。

そのとき、マザリーニに手を引かれて、馬車から王女が降りてきた。

生徒たちから歓声があがる。

王女はにっこりと薔薇のような微笑を浮かべると、優雅に手を振った。

ギーシュはその姿を見ただけで感激で卒倒してしまった。モンモランシーが無言で倒れたギーシュを引きずっていった。

「あれがトリステインの王女？ふん、あたしの方が美人じゃないの」
キュルケがつまらなさそうに呟く。

「あれがお姫様が……。確かに綺麗だけど……」

才人はそう呟きながら、ルイズに目を移した。ルイズは真面目な顔をして王女を見つめている。なぜか才人には、ルイズのほうが何倍も美しく見えるのであった。理屈ぬきに、そう思わせるものがルイズにはあるような気がした。

そのルイズの横顔が、はっとした顔になった。それから顔を赤らめる。才人はその表情の変化が気になり、ルイズの視線の先を確かめる。

その先には、見事な羽帽子をかぶった、凛々しい貴族の姿があった。鷲の頭と志士の胴体を持った、見事な幻獣グリフォンに跨っている。

ルイズはぼんやりとその貴族を見つめている。

才人は面白くなかった。あの貴族、確かにいい男かもしれないが、そんなに見つめて頬を染めなくてもいいじゃないか。

「あら、いい男じゃない……」

見れば、キュルケもその貴族を見つめている。

なんだよ、結局そういうことじゃないか、と思いながら才人はうなだれた。

ハヤテも馬車から現れた王女を見つめていると、不意にくいぐいと袖を引かれているのに気づいた。

見ると、タバサがこちらを見つめている。

「どうしました？タバサさん」

「王女と私……」

「王女様とタバサさんが…何ですか？」

「な、なんでもない……」

タバサは頬を染めて、持ってきていた本を広げ始めた。

その様子にハヤテは首をかしげながら、タバサを見つめていた。

？

そして、その日の夜……。

才人とハヤテは藁束の上に座り込んで、ルイズを見つめていた。なんだか、ルイズは激しく落ち着きがなかった。立ち上がったかと思ったら、再びベッドに腰かけ、枕を抱いてぼんやりとしている。

昼間、あの羽帽子の貴族を見てからこうである。

あれからルイズは何もしゃべらずに、ふらふらと夢遊病者のように歩き出し、部屋にこもるなりずっとこの調子であった。

「お前、ヘンだぞ」

才人が言った。しかし、ルイズは答えない。

「お嬢様ー」

ハヤテが立ち上がって、手を目の前で振ってみた。それでもルイズは動かない。

続けて才人は軽くルイズの髪を引っ張った。くいくいと引いてみても、ルイズはぼーっとしたまま反応がない。

「お嬢様！」

ハヤテは強く呼びかけながら、ルイズの肩を軽く揺すってみた。

しかし、それでも無反応だった。

「「うん……………」」

才人とハヤテは腕を組んで、考え込んだ。

いったいどうすればいいのだろう……？

そうしていると、ドアがノックされた。

「誰だ？」

才人がルイズを促した。

ノックは規則正しく叩かれた。初めに長く2回、それから短く3回……。

ルイズの顔がはつとした顔になり、ドアの方を向いた。

「僕が出ます」

ハヤテはドアを開いた。

そこに立っていたのは、真っ黒な頭巾をすっぽりとかぶった、少女だった。

ルイズを認めると辺りを見回してから、そそくさと部屋に入ってきて後ろ手に扉を閉めた。

「ど、どなたですか……？」

ハヤテが尋ねた。

頭巾をかぶった少女は、しっと口元に指を立てた。それから、頭

巾を同じ黒いマントの隙間から杖を出して軽く振った。同時に短くルーンを呟く。

光の粉が部屋に舞う。

「……^{探知}ディテクトマジック？」

ルイズが尋ねた。頭巾の少女が頷く。

「どこに耳が、目が光っているかわかりませんかからね」

部屋のどこにも、聞き耳を立てる魔法の耳や、どこかに通じる覗き穴がないことを確かめると、少女は頭巾を取った。

「「え……？」」

思わず才人とハヤテは呆けた声をあげた。

現れたのは、なんとアンリエッタ王女その人であった。

才人とハヤテは息をのんだ。ルイズも稀に見るほど可愛いのが、王女はそれに加え神々しいばかりの高貴さを放っている。

それでもなぜか2人には、ルイズは持っている魅力がこの王女にはないと感じるのも確かだった。

「ひ、姫殿下！」

ルイズはアンリエッタの前へ進み出て、慌てて膝をついた。

ハヤテも慌ててルイズの後ろへ下がり、膝をついた。

才人はわけが分からなかったが、とりあえずハヤテの真似をして膝をついた。

アンリエッタは涼しげな、心地よい声で言った。

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

第十八話 王女の依頼（前書き）

なんてこった……

2ヶ月以上かかって……

なのに大して面白くないという……

私生活が忙しくなってきたとはいえ……

この遅筆ぶり、なんとかしなくては……

今回の後書きは、オマケ話です。

第十八話 王女の依頼

ルイズの部屋に現れたアンリエッタ王女は、感極まった表情を浮かべて、膝をついたルイズを抱きしめた。

「ああ、ルイズ、ルイズ、懐かしいルイズ！」

「姫殿下、いけません。こんな下賤な場所へお越しになられるなんて……」

ルイズはかしくまった声で言った。さっきまでぼーっとしていたのが嘘のようだ。

「ああ、ルイズ！ルイズ・フランソワーズ！そんな堅苦しい行儀はやめてちょうだい！あなたとわたくしはお友達！お友達じゃないの！」

「もつたいないお言葉でございます。姫殿下」

ルイズは硬い緊張した声で言った。才人とハヤテはただ呆然と2人の美少女が抱擁するのを見つめていた。

「やめて！ここには枢機卿も母上も、あの友達面をして寄ってくる欲の皮の突っ張った宮廷貴族たちもいないのですよ！ああ、もう、わたくしには心を許せるお友達はいないのかしら。昔馴染みの懐かしいルイズ・フランソワーズ、あなたにまで、そんなよそよそしい態度を取られたら、わたくし死んでしまうわ！」

「姫殿下……」

ルイズは顔を持ち上げた。

「幼い頃、一緒になって宮廷の中庭で蝶を追いかけたじゃないの！泥だらけになって！」

少しはにかみながら、ルイズが応えた。

「ええ、お召し物を汚してしまって、侍従のラ・ポルトさまに叱られました……」

「そう、そうよルイズ！ふわふわのクリーム菓子を取り合って、つかみ合いになったこともあるわ！ああ、ケンカになると、いつもわたくしが負かされたわね。あなたに髪の毛をつかまれて、よく泣いたものよ」

それから2人はあははは、と顔を見合わせて笑った。才人とハヤテは呆れて、そんな2人の様子を見つめていた。

おしとやかに見えた王女なのに、とんだお転婆娘のようだ。

「その調子よ、ルイズ。ああいやだ、懐かしくて、わたくし涙が出てしまうわ」

「……どんな知り合いなの？」

才人が尋ねると、ルイズは懐かしむように目をつむって答えた。

「姫さまがご幼少のみぎり、恐れ多くもお遊び相手を務めさせていただいたのよ」

「なるほど」

それからルイズはアンリエッタに向き直った。

「でも、感激です。姫さまが、そんな昔のことを覚えてくださってるなんて……。わたしのことなど、とっくにお忘れになったかと思いました」

アンリエッタは深いため息をつく、ベッドに腰掛けた。

「忘れるわけじゃないじゃない。あの頃は、毎日が楽しかったわ。なんにも悩みなんかなくて」

深い、憂いを含んだ声であった。

「……姫さま？」

ルイズは心配になってアンリエッタの顔を覗きこんだ。

「あなたが羨ましいわ。自由って素敵ね。ルイズ・フランソワーズ」

「なにをおっしゃいます。あなたはお姫様じゃない」

「王国に生まれた姫なんて、籠に飼われた鳥も同然。飼い主の機嫌一つで、あっちに行ったり、こっちに行ったり……」

アンリエッタは窓の外の月を眺めて、寂しそうに言った。それからルイズの手を取って、にっこりと笑って言った。

「結婚するのよ。わたくし」

「……おめでとございます」

その声の調子に、なんだか悲しいものを感じたルイズは、沈んだ声で言った。

そこでアンリエッタは、ルイズの後ろにいる才人とハヤテに目を移した。

「そちらのお2人は？」

「使い魔です」

「…使い魔？」

アンリエッタはきよとんとした面持ちで、2人を見つめた。

「人にしか見えませんが……」

「人です。姫さま」

「しかも、2人も…？」

「召喚したら、2人揃って来ちゃったんです」

ハヤテは恭しく一礼した。才人も慌てて礼をした。

「…そうよね。はあ、ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこか変わっていたけれど、相変わらずね」

「好きで彼らを使い魔にしたわけじゃありません。でも、今は彼らを誇らしく思います」

ルイズは軽く微笑んで言った。

「そう……」

アンリエッタは再びため息をついた。

「姫さま、どうなさったのですか？」

「いえ、なんでもないわ。ごめんなさいね、いやだわ、自分が恥ずかしいわ。あなたに話せるような事じゃないのに……、わたくしつたら……」

「おっしゃってください！あんなに明るかった姫さまが、そんな風にため息をつくってことは、なにかお悩みがおりなのでしょう？」

「……いえ、話せません。悩みがあると言ったことは忘れてちょうだい。ルイズ」

「いけません！昔はなんでも話し合ったじゃありませんか！わたしをお友達と呼んでくださったのは姫さまです。そのお友達に、悩みを話せないのですか？」

ルイズがそう言うと、アンリエッタは嬉しそうに微笑んだ。

「わたくしをお友達と呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズとても嬉しいわ」

アンリエッタは決心したように頷くと、語り始めた。

「……今から話すことは、他の誰にも話してはいけません」

それから才人とハヤテの方をちらつと見た。

「俺たち、席外した方がいいか？」

才人がルイズに尋ねると、アンリエッタは首を振った。

「いえ、メイジにとって使い魔は一心同体。席を外す理由がありません」

そして、物悲しい調子で、アンリエッタは語り出した。

「わたくしは、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐことになったのですが……」

「ゲ、ゲルマニアですって！あんな野蛮な成り上がりどもの国に！」

「（たしか、キュルケさんもゲルマニアでしたよね……）」

「（だから、あんなに嫌ってるのか……？）」

才人とハヤテはひそひそと呟いた。

それには気づかず、アンリエッタは話し続ける。

「そうよ。でも、しかたがないの。同盟を結ぶためなのですから」

アンリエッタはハルケギニアの政治情勢をルイズに説明した。

アルビオンの貴族たちが反乱を起こし、今にも王室が倒れそうなこと。

反乱軍が勝利を収めたら、次にトリステインに侵攻してくるであろうこと。

それに対抗するために、トリステインはゲルマニアと同盟を結ぶことになったこと……。

「そうだったんですか……」

ルイズは沈んだ声で言った。アンリエッタがその結婚を望んでいないのは、口調や表情から明らかであった。

「いいのよ、ルイズ。好きでもない相手と結婚するなんて、王室に生まれた以上、逃れられない運命。物心ついたときから諦めていませわ」

「姫さま……」

「礼儀知らずのアルビオンの貴族たちは、トリステインとゲルマニアの同盟を望んでいません。2本の矢も、束ねずに1本ずつなら楽に折れますからね」

アンリエッタは呟いた。

「……したがって、わたくしの婚姻を妨げるための材料を、血眼になつて探しています」

「もし、そのような物が見つかったら……。もしかして、そんな物があるのですか？」

ルイズが顔を蒼白にして尋ねると、アンリエッタは悲しそうに頷いた。

「言って、姫さま！ いったい、姫さまのご婚姻を妨げる材料って何なのですか？」

ルイズはアンリエッタの様子に、興奮したようにまくし立てる。両手で顔を覆い、アンリエッタは苦しそうに呟いた。

「……わたくしが以前したためた1通の手紙なのです」

「手紙……？」

「そうです。それがアルビオンの貴族たちの手に渡ったら……。彼らはすぐにゲルマニアの皇室にそれを届けるでしょう」

「どんな内容の手紙なんですか？」

「……それは言えません。でも、それを読んだらゲルマニアの皇室はきっと、わたくしを赦さないでしょう。そうなれば婚姻はつぶれ、トリステインとの同盟は反故。トリステインは一国にてあの強力なアルビオンに立ち向かわねばならないでしょうね」

ルイズは息せき切って、アンリエッタの手を握った。

「いったい、そのトリステインに危機をもたらすという手紙とやら

はどこにあるのですか？」

アンリエッタは、首を振って答えた。

「それが…、手元にはないのです。実は、アルビオンにあるのです」

「ア、アルビオンですって！では、すでに敵の手中に？」

「いえ……、その手紙を持っているのは、アルビオンの貴族側ではありません。その貴族側と骨肉の争いを繰り広げている、王家のウエールズ皇太子が……」

「プリンス・オブ・ウエールズ？あの、凛々しい王子さまが？」

アンリエッタは再び顔を手で覆った。

「ええ…、しかしウエールズ皇太子は遅かれ早かれ、貴族派に囚われてしまいます……。そうなれば、あの手紙も明るみに……！」

ルイズは息をのんだ。

「で、では姫さま、わたしに頼みたいことというのは……」

そのとき、ルイズとアンリエッタの後ろで話を聞いていたハヤテは、人の気配を感じてサッとドアに駆け寄った。

「ど、どうしたの？ハヤテ」

ルイズは驚いて尋ねた。

「誰かドアの前にいるみたいです」

そう言ってハヤテはドアを開いた。

ドアに引っ付いて立ち聞きしていたらしい人物は、そのまま部屋へ倒れ込んだ。

「うわっ…あだッ!」

そこにいたのは、ギーシュだった。

「ギ、ギーシュ!」

「あたたた……」

ギーシュは頭をさすりながら、ゆっくりと立ち上がった。

「ギーシュ、あんた立ち聞きしてたの？今の話を!」

しかし、ギーシュはルイズの問いには答えず、アンリエッタに対しサツとひざまずいて言った。

「薔薇のように見目麗しい姫さまの跡をつけて来てみれば、こんな所へ……。話を聞いてみれば重要な密書を回収する任務とは……。その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せ付けますよう」

アンリエッタは聞き覚えのある名前に驚いて尋ねた。

「ギーシュ・ド・“グラモン”？あの、グラモン元帥の…？」

「はい、息子でございます。 姫殿下」

「あなたも、わたくしの力になつてくださるのですか？」

「もちろんでございます。 内乱中のアルビオンに親友ともいえるヴァリエール嬢を遣わせる心中、真に心苦しいことでございます。しかし、他に信頼できるような貴族もいない。なれば、ヴァリエール嬢の友であるこの僕も任務に加えていただければ、きつと力になれることでしょう」

そこでルイズが口を挟んだ。

「ちょっと待って、いつからわたしとあんたが友達なのよ？」

「何を言う。 サイトとハヤテは僕の友達だ。 だから、彼らを使い魔にしている君だって友達に決まつてるじゃないか」

ルイズは口をあぐりと開けてギーシュを見た。

サイトとハヤテは苦笑いで真剣なギーシュの表情を見た。

ルイズに背を向けていたアンリエッタはルイズの表情に気づかず、ギーシュに対して微笑んだ。

「ありがとう。 お父さまも立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるようね。 ではお願いしますわ。 この不幸な姫と、わたくしのおともだちをお助けください、ギーシュさん」

すると、ギーシュは突然ぶるぶると震え出した。

「ひ、姫殿下がこの僕に、ぼぼ僕に、微笑んでくださった!」

ギーシュはひざまずいたまま失神した。

「お、おい。大丈夫か、ギーシュ?」

才人はルイズの後ろから声をかけた。

「……気絶したみたいです」

ギーシュのそばにいたハヤテは顔の前で手を振りながら言った。

ルイズは溜息について表情を直し、男3人を無視して真剣な声で言った。

「では明日の朝、アルビオンに向かって出発することにいたします」

「ウエールズ皇太子は、アルビオンのニューカッスル付近に陣を構えていると聞き及びます」

「了解しました。以前、姉たちとアルビオンを旅したことがございますゆえ、地理には明るいかと存じます」

「旅は危険に満ちています。アルビオンの貴族たちは、あなたたちの目的を知ったら、あらゆる手を使って妨害しようとするでしょう」

アンリエッタは気絶したギーシュに構っていた才人とハヤテの方を向いて、声をかけた。

「頼もしい使い魔さんたち、これからもわたくしの大切なおともだちを、よろしくお願いしますね」

そして、ずっと左手を差し延べた。

すると、ルイズが驚いて言った。

「いけません、姫さま！使い魔にお手を許すなんて！」

「いいのです。この方々は、わたくしのために働いてくださるので、忠誠には報いるところがなければなりません」

「はあ……」

才人は差し出されたアンリエッタの手を見つめながらキョトンとして言った。

「『お手を許す』って、お手？俺たち犬扱い……？」

それを聞いたルイズとハヤテは思わずガクツとよろけた。

「違うわよ……。もう、これくらいも分からないなんて……」

「サイトさん、『お手を許す』というのは『手の甲にキスしていいですよ』ということです。忠誠の印というか、挨拶の意味で行う行為ですね」

才人はハヤテの説明を聞いて、ポンと手を打った。

「あゝ、なるほど、そういうことか」

「分かったら、さっさとしなさい。姫さまに失礼よ」

ハヤテはスツとアンリエッタの前にひざまずき、彼女の手を取って軽く口づけした。

才人も慌ててアンリエッタの前に進み出てひざまずき、ハヤテに倣って口づけした。

「そう、それでいいのよ」

なぜかルイズは偉そうな態度で満足げに頷いた。作法がすっかり出来ているのが嬉しいらしい。

才人はハヤテの行為を見様見真似でやっているのがほとんどだが。

アンリエッタは軽く頷くと、机についてルイズの羽ペンと羊皮紙を使い、さらさらと手紙をしたためた。

アンリエッタは、じっと自分が書いた手紙を見つめていたが、そのうちに悲しげに首を振った。

「姫さま、どうなさいました？」

ルイズは怪訝に思い、声をかけた。

「な、なんでもありません」

アンリエッタは顔を赤らめると、決心したように頷き、末尾に―

行付け加えた。

それから小さな声で呟く。

「始祖ブリミルよ……。この自分勝手な姫をお許してください。でも、国を憂いても、わたくしはやはり、この一文を書かざるをえないのです……。自分の気持ちに嘘をつくことは出来ないのです……」

密書だというのに、まるで恋文でもしたためたようなアンリエッタの表情だった。

ルイズはそれ以上、何も言うことが出来ず、じっとそんなアンリエッタを見つめるばかりだった。

アンリエッタは書き終えた手紙を巻くと、軽く杖を振った。

すると、どこから現れたものか、巻いた手紙に封蝋がなされ、花押が押された。

その手紙をルイズに渡す。

「ウエールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡してください。すぐに件の手紙を返してくれるでしょう」

それからアンリエッタは右手の薬指から指輪を引き抜くと、ルイズに手渡した。

「母君から頂いた『水のルビー』です。せめてものお守りです。旅のお金が心配なら、売り払ってもかまいません」

ルイズは手紙と指輪を受け取ると、深々と頭を下げた。

「この任務にはトリスティンの未来がかかっています。母君の指輪が、アルビオンに吹く猛き風から、あなたがたを守りますように」

第十八話 王女の依頼（後書き）

オマケ

アンリエッタが依頼を終え、部屋を出て行った後。

部屋には、ルイズ、才人、ハヤテと……

気絶したままのギーシュがいた。

「なあ、こいつ……どうすりゃいいんだ？」

才人がギーシュの頬をつつきながら言った。

「どうするって……ここは一応、女子寮よ？」

「そ、そうですね……。よく、寮長さんに見つかりませんでしたね……」

「まあ、それは姫さまにも言えるけどな……」

「姫さまは……スリープ・クラウドでも使ったんじゃないかしら」

「眠らせる魔法か？」

「そう、雲状の眠り薬みたいなものね」

「そのおかげでギーシュさんも簡単に忍び込めたわけですね……」

「まったく……、姫さまからの任務を立ち聞きするなんて……」。

「そうね……、罰として廊下に放り出しておいて」

「よし、わかった」

才人はルイズの言葉を聞くとドアを開け、

ずるずるとギーシュを廊下へ引きずり出し、ボタン！とドアを閉めた。

「これでいいか？」

「上出来よ」

「……いいんでしょうか？」

「構わないわよ。言ったでしょ、罰よ、罰。

姫さまに代わって、わたしが与えた罰なの」

「ギーシュさんも明日、任務に加わるはずでは……？」

「いいわよ別に……。どうせギーシュは準備するものなんてないでしょうし」

「まあ、朝に目え覚ました女子たちにボコボコにされること請け合
いだけだな」

「それも含めて、罰なのよ」

「き、厳しいですね……」

ハヤテは明日の朝の様子を想像し、思わず冷や汗を流した。

次の日の朝、才人の予言通り、ギーシュがフルボッコになったのは

……

言うまでもない。

〈オマケ・終〉

いかがでしたでしょうか。

今後もこのように遅れることが多々ありますが、

これからもよろしく願います。

活動報告もチェックしていただけると、嬉しいです。

今回はやっと、任務開始ですね……。

あのロリコン子爵も現れます（笑）

彼の性格をどうするかなあ……

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7418/>

ゼロ魔のごとく！ ~ Hayate the combat servant of Zero ~

2010年10月30日00時45分発行